

630  
8

630-8  
  
1200501540953

1844



630  
8

新 潮 文 庫

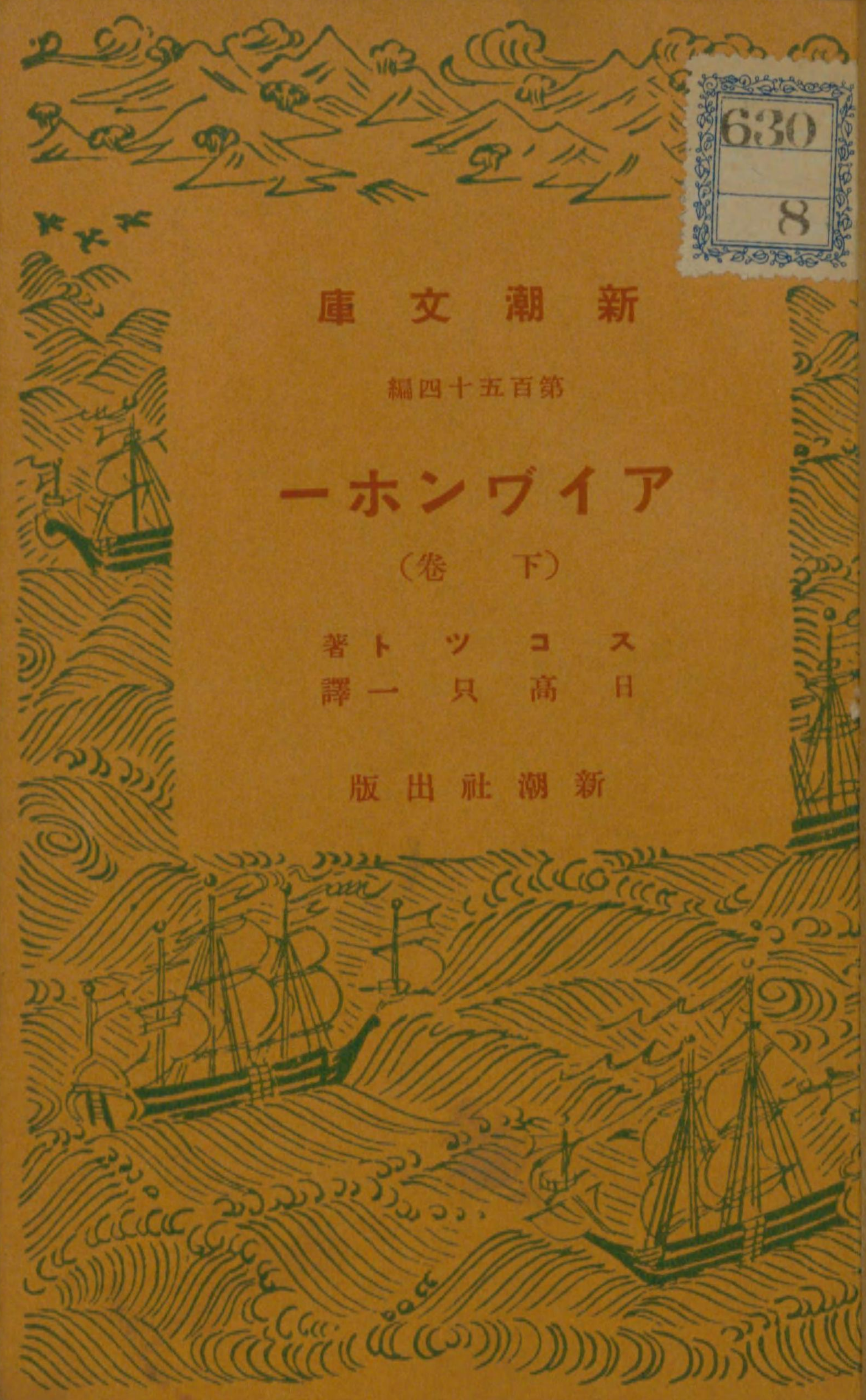
第 五 百 四 十 四 編

ア ヴ イ ホ ー

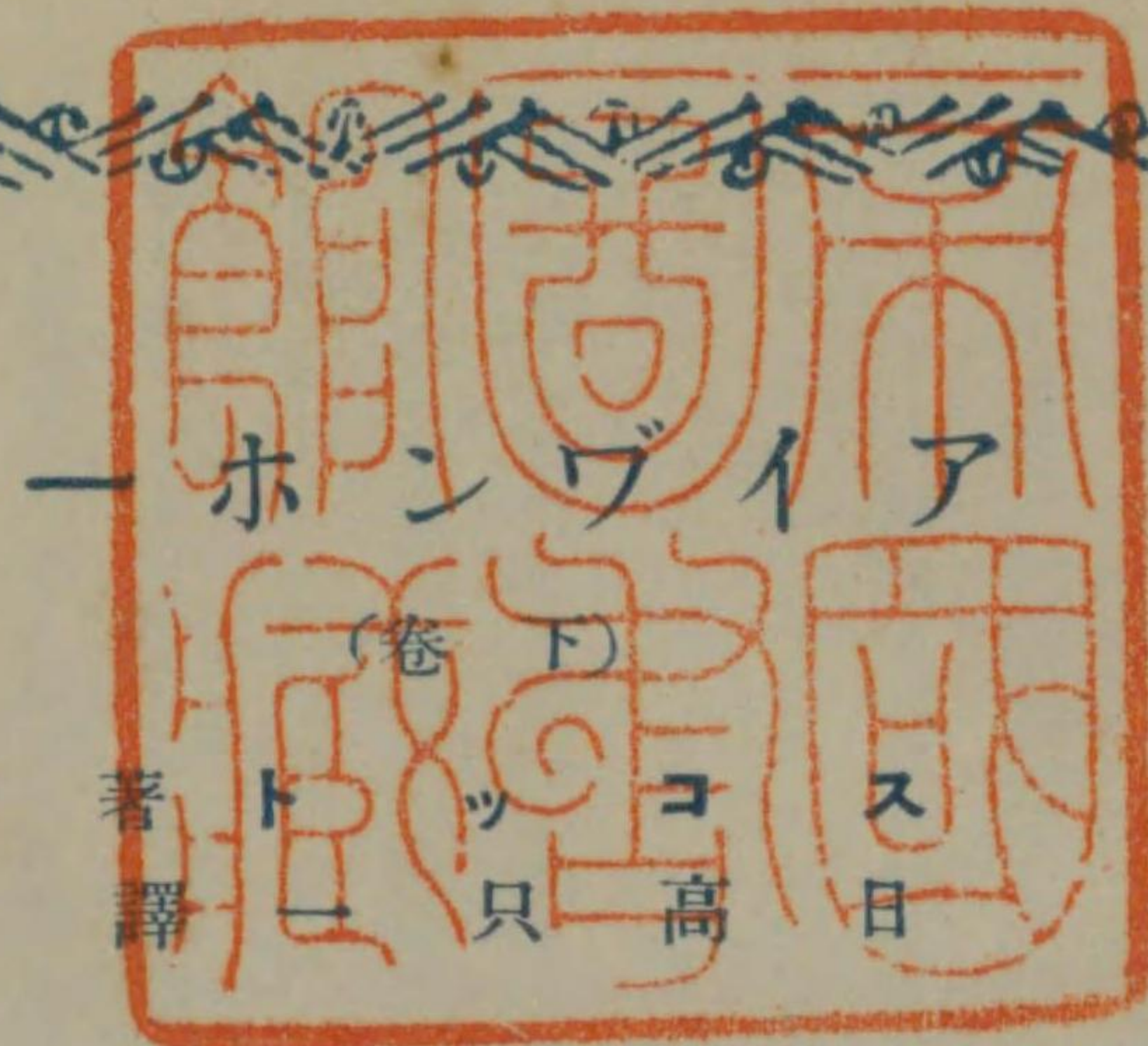
( 下 卷 )

著 ト ツ コ ス  
譯 一 只 高 日

新 潮 社 出 版



674



新 潮 文 庫

— 154 —

新 潮 社 出 版



(二十六)

如何な悍馬も時には静か、

いかな駄馬でも時には狂ふ。

坊さんも時には道化に變り、

道化も時には坊さんに變る。

(古 語)

隱者の頭巾を被り、法衣を着け、同じく隱者の節目太な綱帯を腰に結んだ彼の幫間ワンバが、フロント・ブーアの城門前に立つた時、番兵は彼の名と用向きとを訊き質した。

「パックス・グレイブスクム、」とワンバは答へた、「わしは聖フランシス派の貧僧ですが、唯今この城内に監禁されてゐる不幸な囚人共の爲め、愚僧の職務を果しに參つた者なのです。」

「これは大膽な坊さんだ、」と番兵は驚いて言つた、「うちの酔つばらひの懺悔聽聞僧の外、この二十年と云ふもの、お前さんのやうな羽並の鶏(はなみ)の(こり)が(いふ)時をつくつた事のない、この城へ遣つて來ようとは。」

「でもございませうが、どうぞ愚僧の事を御城主様まで御取次をお頼み申します、」と鷹法師は言つた。「必ず、歓迎なされるに違ひありません、そしてこの雄鶏は、城中に聞える程の時をつくるでございま

630-8

せう。」  
「そいつは有難い、」と番兵は答へて、「だが、若し俺が大事の持役をほつといてお前さんの使ひをし  
て遣つた爲め、顔を潰すやうな事があつたら、坊主の灰色の衣が、灰色の鶯鳥の羽のついた箭を防ぐ  
ことができるかどうか、試してやるぞ。」

かう嚇して置いて、彼はこの櫓を去り、一人の聖僧が門前に立つて即刻入城を求めてゐるといふ異  
常な報告を城中の廣間へ持つて行つた。所が彼が非常に驚いたことは、その僧を直ちに通せといふ主  
人の命令が下りたのである。そして、前々から不意打ちに備へるよう、この部屋の入口に兵卒を置い  
てあつたので、彼はもう躊躇する所なく、今受けた命令に従つた。ワンバは無鐵砲な自惚うぶはたを持つてゐ  
たので、それに勵まされ、この危険な役目も引き受けたのであるが、レジナル・フロン・ド・ブーフのや  
うな恐ろしい又實際恐れられもしてゐた人物の面前に出た時には、その無鐵砲な自惚も殆んど彼を助  
け支へるのに役立たなかつた、で、彼は例の「平安爾曹と共にあれ」——自分の役目を助けるものとし  
て可なり頼みにしてゐた、この「平安爾曹と共にあれ」を持ち出したのであるが、それと同時に、以  
前よりもずつと多くの不安と躊躇とを感じたのである。併し、フロン・ド・ブーフは、如何なる階級の  
人でも、自分の面前では震へるのを見慣れてゐたので、この懺悔聽聞僧と思つた者の臆病な様を見て  
も、別段怪しいとも思はなかつた。「御坊、そなたはどなたで何處から來なすつた？」と彼は訊ねた。  
「平安爾曹と共にあれ」と、幫間はもう一度繰り返して言つた、「愚僧は聖フランシスの貧しい僕でござ

います、この曠野を旅行中、盜賊共の手に捕へられました——(聖書にも書いてある通り、)ケイダム・  
平アトル・インシディット・イン・ラトロネス(ラテン語、「ある人旅行中彼人に會へり」)——その盜賊共が愚僧を  
この城に遣はしまして、あなた様のお裁さだきに依つて、死刑の宣告を受けた兩名の爲めに、愚僧の役目  
を勤めさせようとするのでございます。」

「あゝ左様か、宜しい、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「では御坊、そなたに訊くが、その盜賊共は  
一體何人程ゐるのだ？」

「殿様、ノーメン・イリス・レギオ(ラテン語、「彼等の名は『無數』なり」)、彼等の名は『無數』にござ

「何人ゐるかはつきり申せ、申さぬと、これ坊主、そちの衣や綱帯じょうたいに對しても容赦はせぬぞ。」

「おゝ！」と贖法師は言つた、「コル・メウム・エリユクタギット、つまり、愚僧は恐ろしさで心が破れさ  
うでございました！ 彼等は恐らく——半ば郷土、半ば平民——少くも五百人はゐるかも知れぬと存  
じます。」

「何に！」と、折からこの部屋へ入つて來た寺侍が言つた、「そんなに多勢の地蜂ちばちが押し寄せてゐるの  
か？ 今こそ左様な惡戯わるまよ好きの群の息の根を止めてやる時だ。」それからフロン・ド・ブーフを傍に呼ん  
で、「貴方はあれなる僧をお見知りで居られますか。」

「彼は遠方の寺よりまゐつた旅僧、私はとんと見知り申さぬ。」

「では、あの者に口で傳言を頼む譯にも行かない、」と寺侍は答へた。「ド・ブラシーの傭兵隊へ、直ち

に隊長の救助に來いと云ふ命令書を持たせてやらうではありませんか。命令書の出来る間、坊主が何にも氣取らぬよう、あのサクソンの豚共に屠殺所行きの引導を渡すといふ彼の仕事を勝手に始めさせるがよろしいでせう。」

「では、さういふ事にしよう、」とフロン・ド・ブーフは言つた。そして彼は直ちに一人の僕に命じて、ワンバをセドリックやアセルステインの監禁されてゐる部屋へ案内させた。

セドリックの短氣は今度の監禁によつて滅せられるどころか、却つて増されて來た。彼は敵を突撃するか、又は攻め圍まれた場所の崩壊口を強襲してもする人のやうな身構へで、廣間の端から端へと歩き廻りながら、或る時は一人で絶叫したり、又或る時はアセルステインに話し掛けたりした、が當のアセルステインは、その間、晝に食べた腹一杯の食物を、如何にも落着き拂つて消化しながら、又何時まで捕虜となつてゐるのかといふやうな事に左程心を勞さず、凡そ如何なる災害もいつかは天意に依つて終る日の來るもの、今度の事件もその例に洩れなからう、と斷定して、心を大きくし、落着いて事件の成行を待つてゐた。

「平安爾曹と共にあれ、」と幫間はこの部屋へ入つて來ながら言つた、「聖ダンスタン、聖ダンニイ（フラスの聖者、三世紀に）聖デユソック（スコットラ）その他あらゆる聖の祝福、御身等の上に又御身等の周圍にあれ。」

「勝手にお入り下さい、」とセドリックはこの贖法師に答へた、「貴僧は何の積りで此處へ參られた？」

「貴方方に死の覺悟をおさせ申す積りで、」と、幫間が答へた。

「そんな事は有る筈がない！」と、セドリックは吃驚して言つた、「彼等は如何に大膽不敵の惡黨にもせよ、そんな公然な謂れない残酷な眞似はよもや企てまい。」

「おゝ！」と幫間は言つた、「彼等の人情で彼等の行動を制止するのは、絹絲の手綱で奔馬を留めるも同然だ。さればセドリック殿、尙ほ又アセルステイン殿にも、如何なる罪惡をこの世で犯したか御勘考なさい、今日こそ貴方がたは天國の審判所に召されて、その事を答へる事となりませうからな。」

「アセルステイン殿、今の言葉をお聞きなされたか、」とセドリックは言つた、「わし達は最期を見苦しくしてはならない、奴隷のやうにして生きるよりは、人間らしくして死ぬ方がましだ。」

「私は彼等の惡意中の惡意に我慢をする覺悟が出來てます。食卓に就く如く平氣で死に就きませう。」

「では御僧、我等の懺悔を聞いて戴かう、」とセドリックは言つた。

「でも一寸お待ちなさい、セドリックをぢさん、」と幫間は持前の口調に戻つて言つた、「黄泉にお飛び込みなさる前に、暫くもつとよくお考へなさい。」

「おや、その聲には聞き覚えがある！」

「且那様の信賴すべき奴隷で幫間の聲ですもの、」とワンバは頭巾を後に脱ぎ捨てながら答へた。「且那様が前にこの馬鹿の忠言をお容れ遊ばしたら、こんな處にてんでお出でなさらないで濟みましたでせうに。今度はこの馬鹿の忠言をお容れ遊ばしませ。さう致しますと、こんな處に長居をなさらないとも宜しうございませう。」

「それは又どういふ譯かな？」とセドリックは訊ねた。

「たゞこれだけのことでございます、」とワンバは答へた、「この衣と綱帯とお着けなさい、手前はこれだけしか持たないで坊さんに成りすましたのでございますから。そして旦那様は、こつそりこの城をお抜けなさいまし、後に旦那様の上衣と帯とを残して置いて下されば、手前がお身代りになつてあの世に参ります。」

「身代りにお前を置いて行く！」とセドリックはワンバの申出に驚いて言つた、「さうすれば、彼奴等はお前を絞殺すぢやないか。可哀さうに。」

「そんな事しても世間が許すならさうさせませう、」とワンバは言つた。「ウイトレスの子は、祖先が長老としてかけた鎖に劣らぬ重々しい鎖を首に掛けられて、縊り殺されても——旦那様のお家柄に泥を塗るやうな事は決してない——と信じます。」

「さうか、ワンバ。ぢやあ、唯一つの事だけはお前の望みを容れることゝしよう。それは外でもない、若しわしの代りにアセルステイン卿と衣類の交換をするなら、さうしてもよいといふのだ。」

「いや、神かけて、そんな事を致す筈がございませぬ。ウイトレスの子がヘリワード様の御子息を救ふ爲めに苦しまなければならぬといふ事には、立派な理由がございしますが、御先祖が赤の他人であつた方の爲めに死ぬなどと申すのは餘り智慧のない事でございます。」

「飛んでもない奴だ、アセルステイン殿の御先祖はイン格蘭ドの王様であつたのだぞ！」

「その方々は勝手に好きな者になつたが、いゝ、」とワンバは答へた。「兎に角、手前の頸は手前の肩の上に餘り眞直ぐに立ち過ぎてゐて、あの方々の爲めに振らせるわけには行かないのでございます。で旦那様、手前のお願ひを御自分でお容れ下さるか、それとも、この牢獄を入つて來た時と同様、自由に立ち退かせて下さるか、どちらかにして下さいまし。」

「老木を枯してすへ。さうすれば、森全體の偉大な希望が保存されるだらう。頼み甲斐あるワンバ、アセルステイン殿をお助け申してくれ！ それは苟もサクソンの血が流れてゐる者の義務なのだ。お前とわしは一緒に此處に残つて、あの暴虐な敵のこの上もない怒りを最後まで忍ぼう。さうしてアセルステイン殿は、自由な安全の身となられて、屹度我が國民の目覺めた魂を奮ひ起たせ、我等の仇を打つて下さい。」

「さうぢやない、セドリック殿、」とアセルステインは彼の手を握り締めて言つた——一度覺醒めて考へたり、行つたりすれば、彼の所業や感情は中々立派なもので、最早彼の高貴な家門に適はしからぬものではなかつたのである——「さうぢやない、」彼は更に言葉を繼いだ、「私はこの奴隷が心からの親切で、その主の爲めに折角造へた脱走の機會に乗ずる位なら、寧ろ囚人の僅かな當がひ麵麴の外食べものもなく、囚人に飲ますだけの水しか飲む物がなくとも、この部屋に一週間残つてゐたいのです。」

「あなた方は賢者と申されて居りますし、手前は氣違ひじみた道化だの、馬鹿だの言はれて居ります、」と幫間が言つた、「ですが、セドリックをぢさん、アセルステインさん、この道化の馬鹿がお兩人



の爲めにこの争論を決めて差し上げませう。してもうこれ以上禮儀に拘泥する勞を省いて差し上げませう。手前はジョン・ア・ダックの牝馬みたいな者でございます、ジョン・ア・ダックの外には誰も乗せようと致しません。手前は手前の主人を救ひに参りました、で、若しその方が手前の申す事を聞いて下さらなければ——もう分りました——手前は又家に歸るより外致し方がございません。心盡しの御奉公と申すものは、羽根か毬見たいに手から手へと抛る事が出来るものでございませぬ。手前は自分の生れながらの御主人の他は何人の爲めにも死なうとは思ひませぬ。」

「ではセドリック殿お行きなさい、」とアセルステインは言つた、「この好機をお逃しなさるな。あなたが城外に居られれば、又味方を勵まして我等を助ける事も出来よう——あなたが此處にゐたのでは我々は皆んな亡びて了ひます。」

「では城外から救助する見込でもあるのか？」とセドリックは幫間の方を見ながら言つた。

「見込！ 如何にも、」とワンバは鸚鵡返しに言つた、「まあお聞き下さいまし、且那様は手前の外套を羽織んなさいますと、指揮官の服で包まれる事となります。城外には唯今五百人の軍勢が居りまして、この手前も今朝はその主なる首領の一人でございました。手前の道化帽は兜であり、手前の杖（驢馬の耳をもつた面を彫り込んだ杖で、幫間のしるし）は軍配がはりでした。左様、道化の馬鹿を伶俐の且那様に取り換へた爲めに、どんなに皆んなの爲めになるか直き分るでせう。實際、手前はあの人々が、思慮深く事を謀つたなら得られさうなものを、血氣に逸つて失ひはしないかと心配してゐるのでございます。では、且那様、

御機嫌よう、そして可哀さうなガースやガースの大ファンゲスにお慈悲を加へてやつて下さいまし。それから手前の道化帽をロザウウの廣間に掛けて頂きたいもので、手前が忠實な、その……道化らしく、御主人の爲めに命を投げ出したといふ記念に……。」

この最後の言葉は、冗談でもあり、眞面目でもある、二重の響きを帯びてゐた。セドリックの眼には涙が溜つた。

「お前の記念は、この地上で忠節と愛情とが榮譽とされる限り、長く保存して置くぞ！」と彼は言つた。「だが、わしも必ずローエナ姫や、アセルステイン殿や、ワンバ達を救ふ手段があると確信しなければ、お前の言ふなりに、こんな事をしやしないのだ。」

衣服の交換も今は終つた、とその時、突然セドリックの胸に或る疑ひがはたと浮んだ。

「わしは自國の言葉と、それに氣障なノルマン語を少々許りとの外、何にも知らないのだ。だのに何うして僧侶を装ふことが出来よう。」

「その呪ひは二言葉にございます、」とワンバが答へた、「どんなことを聞かれても、たゞ『ボックス・グービスカム』とだけお答へなさるのです。行くにも来るにも、食べるにも飲むにも、祝福するにも呪ふにも、ボックス・グービスカムとさへ仰しやれば萬事うまく進んで行きます。これは魔法使ひに箒の柄、手品師に呪ひ棒と云つた風に、僧侶には附きものでございます。たゞ底力のある重々しい調子で、かういふ風に——ボックス・グービスカム！——と仰しやいまし、——さう言へば大丈夫間違ひはな

いのでございます——夜番にも見張りにも、騎士にも、楯持にも、徒歩の者にも、騎馬の者にも、誰にでも、この咒文は利きます。明日、彼奴等が、本當に手前を引つ張り出して絞首にするか何うかは大變疑はしいのでございますが、萬一手前をさうするといふなら、その死刑執行人にこの咒文の效力を試して見ようと存じてゐます。」

「それが本當なら、直ぐ僧侶に成れる——バックス・ダービスクム。わしは必ずこの合言葉を忘れまい。——さらばだアセルステイン殿、さやうなら、眞心に分別も湧き出るワンバよ、——わしは屹度二人を救ふ、救はれなければ戻つて来て、二人と一緒に死ぬる。わしの血管にわしの血が脈打つてゐる中は、我がサクソン王の貴い血を一滴もこぼさせはしない、いや又このセドリックは、どんな危険を冒しても、屹度主人の爲めに身命を賭した、親切な奴の頭から髪の毛一筋落させはせぬ。——さらばだ！」

「御機嫌よう、セドリック殿」とアセルステインは言つた、「茶菓を出されたら、何にでも受けるのが僧の眞の役目だと思し召されよ。」

「さやうなら、をぢさん」とワンバもその後について言つた、「してバックス・ダービスクムをお忘れなさいませぬ。」

かう勵まされて、セドリックは勇ましく冒険の首途に立つた、そして幫間が萬能だと推薦したあの咒文の力を試す機会に會つたのは、それから間もない事であつた。低い圓天井の薄暗い廊下傳ひに、城の廣間へ出ようとしてゐるところを、一人の女の姿に引き留められた。

「バックス・ダービスクム——」と贗法師は言つて、急いで通り過ぎようとする、柔しい聲がかう答へた、「エト・ダービス——クエゾ、ドミネ・レヴェレンディシメ、プロ・ミゼリコルディア・ヴェストラ。」

(ラテン語で、「そして御身も(安かれ)——いじ様  
き聖父よ、願はくは慈悲を垂れ給へ」ミいふ意味)

「わたしは少し耳が悪い」とセドリックは立派なサクソン語で答へた、そして同時に我れとかう呟いた、「あの道化の馬鹿ものめ、バックス・ダービスクムなんて、教へやがつて！ わしは最初の一突きで投槍を失くして了つた。」

けれども、當時の僧としては肝腎のラテン語を餘り知らないのは珍しい事ではなかつた、そしてこの事を、今セドリックに言葉を掛けた者も十分よく知つてゐたのであつた。

「和尚様、どうぞ願ひでございますから」とその女は僧と同じ言葉で答へた、「城内にゐる一人の負傷した捕虜に法の慰めのお詞を掛けてやつて下さいまし、そして貴僧方の聖いお役目が教へますやうな、お憐みをその方や私達にお寄せ下さいまし——どんな善根でも、さうして頂くこと程貴僧のお寺の爲めになる事は決してございませぬ。」

「お娘御」とセドリックはひどくどきまぎして答へた、「この城では暇がなく、愚僧が役目の義務を果しては居られぬのだ——愚僧は直ぐに參らねばならぬ——死ぬるか生きるか愚僧の急ぐ具合一つで決めるのだから。」

「でもございませうが、和尚様、願ひでございます、あのひどい目に遭うて命も危い方を御救助も

御訓戒もなさらずにお置き去りに遊ばさぬよう。」

「悪魔よ、わしを連れて飛び去つてくれ、そして鬼神の王や雷神の靈と一緒に地獄に置いてくれ！」  
と、セドリックは苛々しながら答へた、そして、恐らく彼の靈的な役目からは全然離れた同じ調子で續けて饒舌つて行くところであつたのだらうが、折も折この二人の對話は、櫓のしなび婆、アフリードの噺れた聲で妨げられたのである。

「小娘、折角向うのお前の牢部屋を出させて貰つた親切をいゝ事に、これはまあどうしたことだ？——  
！こんな聖いお方に向つて猶太娘の癖に執拗い事をおねだりするから、それを逃れたさに、つい粗暴な不信心な言葉をお使ひなされたのぢやないかい？」

「猶太の娘！」とセドリックは、彼等の邪魔を脱れる爲め今の話を利用してしようとして繰り返した、——  
「これ女、愚僧を通させてくれ！ 引き留めるな、引き留めて、そなたの身がどうなつても知らぬぞ。」  
愚僧は僧侶に成り立てぢや、不淨を除けたい。」

「御坊、この道を御座れ、」と醜い婆は言つた、「お前さんはこの城の様子を御存知ないやうだから、案内者がなくては出るわけに参りません、こちらへお出で、わしはお前さんに話したい事がある——  
それから、罰當りの種族の娘、お前は病人の部屋に行つて、わしの歸る迄看護しろ。わしの許しもないのに、また其處を離れでもすると、ひどい目に遭はせるぞ！」  
レベッカは立ち去つた。これより先、彼女は懇願に懇願を重ねた末、辛つとアフリードを説きつけ

て櫓を出して貰つたのである。そしてアフリードは負傷したアイヴンホトの枕邊で、彼女を働かせる事にしたのである。これは又レベッカ自身の本望とする所であつた。心が聴くて早くも自分達の危険な地位を察し、偶發したあらゆる安全の方法を利用するに機敏だつたレベッカは、この不信心な城中に一人の僧侶の現はれた事をアフリードから聞き知つて、そしてそれに或る望みを掛けたのである。彼女はその僧侶と思はれる者に言葉を掛けて、捕虜の爲め盡力して貰ふ積りで、その歸りを見張つてゐたのである。それがどんな不首尾に終つたかは、讀者のたつた今知られた通りである。

(二十七)

おぞましき者よ 汝は

悲歎と、恥と罪の行ひの外何をか語り得る？

汝の所業は證されたり——汝は汝の運命を知れり、

されどいざ、汝の物語を、始めよ、始めよ。

……  
さあれ我は異なれる歎きを持ちてり、

更に烈しき煩ひと憂ひとを。

我が惱める心を慰め給へ、

我が苦患を忍びて聞きたまへ、

かくて、助くる友のあらずとも——

いとせめて耳傾むくる人だにあらしめ給へ。

(クラブの「裁きの間」)

アーフリードは、嚇したり喚き立てたりして、レベッカを脱出して来た部屋へ追ひ返すと、今度は嫌がるセドリックを、とある狭い部屋に連れ込んで、その扉に用心深く錠を下ろした。それから戸棚から葡萄酒の入った罎と二個の酒盃とを出して来て、卓子の上に置き、物を訊ねるといふよりは寧ろ極めつけると云つた調子でかう言つた、「坊さん、あんたはサクソン人だな、——さうでないなどとは言はさないよ、」と、セドリックが容易に答へさうにないのを見て取ると、更に言葉を纏ぎ足した、「わしの郷言葉はわしの耳に氣持よく響く、尤も高慢なノルマン人がこの棲處の一番賤しい仕事をさせてゐる、可哀さうな賤しい奴隷共の口からでもなきや滅多に聞かぬがな、坊さん、あんたはサクソン人だ——サクソン人で神様の僕たと云ふ外には自由の體の人だな——あんたの訛はわしの耳に氣持よく聞える。」

「ぢやあ、サクソンの坊主はこの城には來ないのかな？」とセドリックは訊いた、「捨てられ、苦しめられた人達を慰めるのが、彼等の義務であつたと思ふが。」

「サクソンの坊さんは來ない——いや假令來られても、同國人の呻きを聞くよりは、自分達の征服者

の食卓で酒盛騒ぎをする方を好く——と、兎に角あの人達の事を噂には聞いてゐる——が、わしの事は何にも言へませぬ。この城では、十年間、フロン・ド・ブーフの夜毎の酒盛に加つたノルマンの生臭坊主以外、坊さんは誰一人入られなんだ、而もその生臭坊主も閻魔の廳に行つてから大分になる。——だがあんたはサクソンだ——サクソンの坊さんだな、わしはあんたに訊きたい事がある。」

「わしはサクソン人だ、」とセドリックは答へた、「が、僧侶の名に恥ぢる者なのだ。どうか引き留めずに行かせておくれ——誓つて又戻つて來るから、でなけりや、もつとお前さんの懺悔を聴く値打のある同宗の教父を一人寄越すから。」

「でもまあ一寸待たつしやれ、坊さんが今聞いてござるこの聲も、やがて間もなく冷たい土で覆はれるだらう、してわしはこの世にゐる間中獸のやうにして生きてゐたが、せめて土に入る時はそんなにして入りたくない。だがわしの懺悔は恐ろしい物語だ。酒でも飲まなくちや話す力も出ない。」彼女はかう言つて盃に酒を注いだ、そして恐ろしい勢ひで、がぶく飲んだ、一滴をも餘さずに飲み乾さうとするかのやうに。「これを飲むとぼうつとする、」と、飲み終つて上の方を見ながら言つた、「でも、ちつとも慰められない——坊さん、わしの懺悔を聞いて、數石に尻餅をつきたくなかつたら、一杯御相伴さつしやれ。」セドリックはこの不吉な酒宴で彼女の爲めに乾盃するのは避けたかつたのであるが、彼女が彼に示した身振りは如何にも焦慮と絶望とを表はしてゐたので、彼は老婆の請ひを容れて、大きな酒盃でその挑みに應へた、彼女は彼の鄭重なのに心和げられたやうに、膝を進めて話し續けた。

「わしはな、坊さん、あんたの今見なさるやうな、淺ましい女に生れついたのでぢやないのだ。わしは自由で、幸福で、尊敬されて、可愛がられて、好かれもしたもんだ。そのわしも今は慘めな落ちぶれた奴隷さ——未だ美しかった時分は此處の城主の情慾の慰み者——花の盛りが過ぎてからといふものは、彼奴等の輕蔑、嘲笑、憎惡の的なのだ。坊さん、あんたは眞逆、わしが人間を憎む、中でも、わしをこんな變り果てた身にした種族を憎むと言つても、不審がりはなさるまいね。あんたの前にあるこの皺くちやの老妻婆が——力ない呪ひを口にしてゐる心の中の怒りを洩らしてゐなければならぬ。この婆が、昔はトールキルストーンの貴族セーンの娘で、わしの一蟹で一千の家來が震へたもんだといふ事を忘れられようか！」

「お前さんがトールキル・ウルフガンガーの娘」と、セドリックは思はず後へ退りながら言つた、「お前さんが——あのお前さんが——わしの父の仲好しで戦友だつた、あのサクソン貴族の娘！」

「あんたのお父さんの仲好し！」とアフリードは鸚鵡返しに叫んだ、「では『サクソン人』と言はれるセドリックさんがわしの前に立つてゐらつしやるのだ、ロザードのヘリワード様には、たつた一人の息子しかなかつたし、その獨り息子の名は同國人の間によく知られてゐるからな。だが若しあんたがロザードのセドリックさんだとすると、この坊さんのやうな風體は一體どうしたものだな——あんたは祖國を救ふことを絶望した餘り、寺の蔭に壓迫を逃れる隱家を求めなすつたのかい。」

「わしが誰であらうと構はぬ、不幸な御老女、さあお前さんの怖ろしい罪深い身の上話を續けなさい——罪深いに相違ない——生き存らへてそんな事を話すといふことにすら罪がある。」

「ある——ある、深い、暗い、呪はれる罪がある——わしの胸に重荷のやうに掛つてる罪——この後地獄の劫火を幾ら浴びても淨める事の出来ない罪がある。——さうさな、わしの父や兄弟達の貴い純潔い血で汚された、此處の部屋々々で——此處のその部屋々々で、その人々を殺したものの情婦として、奴隷とも、慰み者ともなつて、生きたと云ふことは、つまり、わしが命の空氣を吸ふ度毎に、その一呼吸々々を罪惡と呪ひにする事だつた。」

「淺ましい——」とセドリックは叫んだ。「而もお前さんのお父さんの友人達が——眞のサクソン魂を持つた人々が、孰れもお前さんの父さんの靈や、その勇敢な息子達の靈の爲めに弔ひの歌を唱へる時、ウルリカも殺されたものと思つて、その祈りの中に入れることを忘れなかつたのに——又みんなが死者を悼み敬つたのに、お前さんは今迄生き存らへて我々の憎惡と呪咀とを受けるのだ——お前さんは生き存らへて一番近い、一番大事な人々を殺した惡黨の暴虐者と一緒になつたのだ——あの、貴いトールキル・ウルフガンガー家の男が生き残つては危險だと云ふので、幼兒の血までも流した程の奴——其奴とお前さんはおめく／＼生きて一緒になつてゐたのだ、不義の戀の絆につながれてゐたのだ！」

「本當に不義の絆で、戀の絆ではないぞよ！」と老婆は答へた。「戀はこの穢れた圓天井の部屋を訪れる位なら、寧ろ地獄を訪ねるだらうよ。——いや、それだけで少くともわしは我れと我身を責める譯には行かない——フロン・ド・ブーフや彼奴の種族に對する憎しみは、彼奴と罪の交りをしてゐる時

でさへ、深く／＼わしの魂に喰ひ入つてゐた。」

「お前さんは彼奴を憎んで、而もおめ／＼と生きてゐた。浅ましい！ 短刀はなかつたか——ナイフもなかつたか！——針もなかつたか！——そんな生活を喜んでゐたやうでは、所詮ノルマン城の祕密が墓場の祕密のやうであるといふ事が、お前さんにはよかつたのだ。わしが夢にでもトキルの娘が生きてゐて自分の父を殺した者と穢れた交りをしてゐると知つたなら、眞のサクソン人のわしの劍が密夫の腕に抱かれてゐる時でさへ、お前を探し出して殺したらうものを！」

「あなたは本當にトキルの名の爲めに、その正義の刃を揮ひなすつただらうか？」とウルリカは言つた（もう今はアフリードといふ彼女の假りの名を捨て、も宜いから、實名を擧げたのであるが）。「若しさうだつたらあなたは噂に違はぬ眞のサクソン人だ！ この呪はれた城壁内でさへ、——全くあなたのお言葉通り、こゝでは罪惡も計り知る事の出来ない祕密の中に包まれて了ふが、その此處でさへセドリックの名は疾うから響いてゐる、そして淺ましい落ち下つたこのわしも、未だ我々の不幸な民族の仇を討つ人が生きてゐるといふ事を考へては喜んだものだ。——わしにも亦時節が來て讐を打つた事があつた——わしは我々の敵共の内輪争ひを煽動して熱狂した宴樂を刃傷騒ぎにさせてやつた——わしは彼奴等の血潮が流れるのを見た——わしは彼奴等が死に瀕して呻くのを聞いた！——セドリックさんわしを御覽——この穢い色香失せた顔にも未だ何處かトキルの面影が残つてゐないかなあ。」

「ウルリカ、そんな事を訊いてくれるな、」とセドリックは憎惡の交つた悲しげな口調で答へた、「その面影は、惡魔が命の絶えた死體を活かした時、死人の墓から現はれて來るものそつくりだ。」

「それはそれでいゝ。だが、今こそかういふ惡魔のやうな顔でも、老フロン・ド・ブーフとその子レジナルとを不和にさせる事が出來た頃は、光の精の假面を被つてゐたものだ！ それから後の事は恐らく地獄の闇が包み隠すだらうさ、だが怨念といふものはどうしてもその闇の帳を引き拂つて、死者を喚び起して聲高く喋らせたいと思ふことを、臆げにでも通じないでは措かないものだ。あの暴虐な父とその野蠻な子との間には、長いこといぶり勝ちな不和の焰が燃えてゐた——長い間わしはこつそりその有るまじい憎惡の火を焚きつけてゐた——それは或る亂れた酒宴の席で燃え上つて、わしを窘しめてゐた奴は己の食卓で己の子の手に倒れたのだ——この圓天井が隠してゐる祕密つて、先づざつとこんなものさ！——いま／＼しい圓天井め、粉々に砕けつちまへ！」と言つて、彼女は天井を見上げながら、更に言ひ足した、「やい、圓天井め！ どつと落ちて、恐ろしい祕密を承知してゐる奴等を、みんな一緒に埋めてくれる！」

「さても罪深い哀れな女だ！」とセドリックは言つた。「で、お前さんを手籠めにした者が死んでから、お前さんの運命はどうなつたのだ。」

「それは察しておくれ、訊いておくれでない。——こゝに——こゝにわしは、年の割合よりは老けて、顔が氣味悪い程醜くなる程住んでゐた——わしがその昔自分の命ずるが儘になつて其處で嘲られ、辱しめられて、そして昔は餘程廣く活動の出來たわしの復讐も、今は僅かに不平だら／＼な奴等のとる

に足らぬ意地悪仕事か、それとも力の無い醜婆しこばの無駄な、氣にも留められぬ詛いひか、そんな程度に止とめなくてはならないやうに成つて了つた——昔は自分も加つたその酒宴の響こやう、新しい暴虐いひの犠牲けいせいの叫び聲こゑやら、呻うき聲こゑやらを、今は寂しい櫓うから聞いてゐるやうな運命となつた。」

「ウルリカ、お前が實際報酬を得たその所業と同じ位にお前の罪惡からもよい報を得ぬのを今も尙ほ胸にくよくよ悔くんでゐるらしいが、それなのに、どうしてこの法衣を纏まとつてゐる者に言葉を掛けようといふ氣になつたのだ？ 考へても御覽、あの聖きいエドワード様（エドワードは神、傳説によると、王は「王信からこの名が起つた」云々云々病氣に手をふれて治した最初の王だ云々云々である）御自身が例へ人間の姿を假かりりて此處へ現はれられても、お前さんの爲めに何をなさる事が出来よう？ この懺悔王は天の神から肉體からだの腫物を淨きめる力は授たまかつて居まられたが、靈魂たまの天刑病はたゞ神様御自身のみが治療出来るのだ。」

「でも、まあ怒りつばい嚴格な豫言者さん、わしの傍を離れずにおくれ、と彼女は叫んだ、「さあ、わしの孤獨の寂しさに、どつと押し寄せるかうした新しい恐ろしい思ひの末はどうなるか、話せるものなら、話しておくれ——ずつと前にした行ひが、何故新しい抗し難い恐怖となつて目の前にちらつくのだらうね？ 神様がこの世でこんな口に言へない情けない運命を授けて下さつた者には、あの世ではどんな運命を作つてゐて下さるのだ？ この頃寝ても醒めても、心に浮ぶ恐ろしい豫想を忍ぶ位くらいなら、未だ洗禮を受けなかつたわし達の先祖が信じた神々様、ヤーデン様（前にもあつたオーデインの神、この外後にあつた神々は昔基督教以前の異や、ハーサ様や、ザーンボック様や、ミスタ様や、それからスコギユラ様に預つた方が

ましたわい！」

「わしは僧侶でない、と、セドリックは、この罪と淺ましさと絶望との悲惨な光景から、忌いましさを目に逸そらしながら、言つた、「わしは、僧侶の衣服こそ纏まとへ、僧侶ではない。」

「坊さんでも、俗人でも、兎に角わしはあんたに會あつて、この二十年間、神様を畏れ、人間を重んずる人を始めて見た、それにあんたはわしを絶望させるのかな？」

「わしはお前さんに悔くいる事を命ずる、とセドリックは言つた。「唯祈禱と悔悛くとに頼れ、そして神様のお恕ゆるしに會へと祈る！ だがわしはもうこれ以上お前さんと一緒にゐるわけに行かない、又もたたくもない。」

「でも、今暫しばらくくゐておくれ！ 今わしを置いてお行きなさるな、わしの父の友達の息子さん、わしの一生いそを操あやつつて來た惡魔に誘惑されて、ついお前の無情な嘲からりの仇かたを討うちたくなつていけないから。サクソンのセドリックが、こんなに假裝して城内に入つたところを、フロン・ド・ブーフに見附つけられても、お前の命にさし障りがないと思つてゐるのかえ？——もう彼奴の眼は鷹が餌食をねらつてゐるやうにお前の上に輝かがいてゐるんだよ。」

「それはさうでもない、わしの舌が心にもない事を一言も言はない中に、わしを嘴くちばりや爪で裂き殺してくれ。わしはサクソンとして死なう——言葉は眞實で、行ひは公明でな——お前のやうなものを行つて了しまへッ！ わしに觸ふるな、わしを引き留めるなッ！——フロン・ド・ブーフ自身を見たつて、こんな

にまで墮落した賤しいお前を見るよりは厭でもない。」  
 「そんならさうでいゝさ」とウルリカはもう彼を引き留めようとはせずと言つた、「何處へでも勝手に行くがよい、自分の徳の優れたのを鼻に掛けて、自分の前にある哀れな女が、自分の父さんの友達の娘だといふ事を、忘れるがよい。——行きたい處へ行きなさい——わしはな、自分の苦しみの爲めに、人間界に見捨てられるならば——わしが助けを當てにしたつてちつとも差支へない筈の人々に見捨てられるならば——わしの復讐にでも矢張りその人は助けを貸してくれまい！——誰にも助けて貰ひたくないが、誰も彼もわしがこれから思ひ切つてやつける行ひを聞いて耳が熱るだらうよ！——さやうなら！——お前の輕蔑は未だわしを、わしの同種族に結びつけてあるやうに見えた最後の索をも切つて了つた——わしの悲しみが同種族の同情を引くかも知れないといふ考へを奪つて了つた。」  
 「ウルリカ」とセドリックはこの哀訴に心和げられて、言つた、「お前さんは、そんなに多くの罪惡や、そんなに多くの艱難の中をくゞつて生きるやうに毅然として、忍び耐へて來たのか、そして、お前さんが自分の罪に目覺めるやうになつた今、後悔がお前さんに、ずつと相應しい業となつた今、始めめて絶望しようと言ふのか。」

「セドリックさん」とウルリカは答へた、「あなたは未だ人の情といふものをあまり知らないな。わしが行つたやうに行ふにも、わしが考へたやうに考へるにも、烈しい復讐の欲念、自分に力があるといふ誇らしい感じを交へた、狂はん許りの享樂慾が要るのだ、忍ぶことも出来ず又更に防ぐ力を支へることも出来ない程に、人の心情を陶醉させる幾盃かの酒が要るのだ、そんな力はもう疾づくになくなつてしまつた——年を取つては何の快樂もない、皺が寄つては人を動かす力もない、復讐さへが無力な呪ひに消えて行く。その時悔恨が、過去に對する空な後悔と、未來に對する絶望と交つて、その蝮蛇の鎌首を擡げて來るのさ！——それから、一切のその他の強い衝動が止んで了つた時、わし達は、地獄の鬼のやうになつて、悔恨を感じるかも知れないが、悔い改めることなどは決してない——だが、お前の言葉でわしの身内に新しい魂が目を覺ましたわい——お前の言はしやつた事は尤もだ、死なうと覺悟した者には出來ぬ事はない！——お前はわしに復讐の手段を教へてくれた、屹度わしはその通りにやつて見せるから。復讐の念はこれ迄外のものと一緒に、又それと競争する情慾と一緒に、この瘦せ枯れた胸に巢を喰つてゐた——今後はわしは全く復讐の塊となる、お前にさへ、ウルリカの生涯はどうであつても、その死は貴族トキルの娘に恥ぢなかつたと言はしてみせる。この呪はれた城を包圍する一軍勢が城外にゐる、——急いで行つてあの人々の攻撃の指揮をさつしやれ、そして天守閣の東角にある櫓から赤い旗を振るのを見たら、ノルマン共の處へ烈しく押し寄せさつしやれ——彼奴等はその時城内でする事が澤山あつて、外へは手が廻りかねる、お前さんは弓で射られようと射石機で打たれようと、平氣で城壁を乗つ取られませう。——行つて下さい、お頼みぢや——お前さんはお前さんの運に任せ、わしはわしの運に任せてなあ。」  
 セドリックはこのやうに彼女が驪ろに告げた所のその決心を、尙ほも進んで吟味したかつたのである。



が、折悪しく丁度その時フロン・ド・ブーフの殿めしい聲でかう叫んでゐるのが聞えたのであつた。「あののらくら坊主は何處に引つ掛つてゐるのだ？ こんな處をうろついて、わしの家來共の間に謀叛を企んだりしようものなら、屹度、奴を殉教者にしてやるから！」

「悪黨つていふ奴はなんてまあよく物を當てることか！」とウルリカは言つた。「だがあんな者に構つてゐなざるな、お前さんの味方の處へ出てお行きなさい——サクソンの吶喊の聲をお擧げなさい、そして彼奴等には、歌ひたけりや、勝手に口等がロロ（ロロは初めてノルマンディー侯に擧げられたノルマンディー人で武勇絶叫んだ）の軍歌を歌はせるがい、わしは復讐にそのの後句をつけさせてみせる！」

老女はかう言ふと、潜り戸を脱けて姿を消した、そしてそれと入れ代りにレジナル・フロン・ド・ブーフがこの部屋に入つて來た。セドリックは、厭々ながら兎に角この傲慢な領主にお辭儀をした、先方はこれに返して一寸頭を下げたのみであつた。

「御坊、そなたの悔罪者は大分長い懺悔をしをつたな——まあそれもよからう、懺悔の爲納めだからな。そなたは彼等に引導を渡してくれたかな？」

「あの方々は自分達が誰の掌中に陥つたかを知つた瞬間から、萬一の事を豫期してゐた事が分りました、」とセドリックは操られるだけのフランス語で言つた。

「これはどうした事だ、御坊、そなたの言葉にはサクソン語の氣があるやうだが。」

「愚僧は、バートンの聖ウィットホルドの寺で育ち申した。」

「さやうか、」と城主は言つた、「ノルマン人であつた方がそなたにもよかつたし、又わしの目的にもずつと適つたのだ、が、今は必要に迫られて使者を選んで居られない。あのバートンの聖ウィットホルド寺は掠奪するだけの骨折り甲斐のある仔梟の巢だ。法衣がこのサクソン坊主に鎖帷子と同じ位に、餘り保護を與へない時節がやがて來るだらう。」

「神様が御守護下されるでございませう、」とセドリックは怒りに聲を震はせながら言つた、併しフロン・ド・ブーフは恐怖の爲めだらうと思つて、

「は、あ、そなたはもう我々の兵共がそなた等の寺の厨や酒倉に入つてゐると夢想してゐるのだな。だがわしに一肌脱いでくれ、さうすると、他の者にはどんな事が起らうと、そなただけは安全な自分の殻の中にある蝸牛のやうに、そなたの部屋で安全に寝させておいてやる。」

「御命令を仰しやつて下さい、」とセドリックは湧き立つ胸の思ひを抑へて言つた。

「では、この廊下を通つてわしに隨いて來い、裏門から出してやるからな。」  
そしてフロン・ド・ブーフはこの僧侶と許り思ひ込んだ男の前を大跨おほまたに歩みながら、果して貰ひたいと思つた役目を次のやうによく教へ込んだ。

「御坊、そなたにも見えよう、向うに大膽にもこのトキルストーンの城を包圍した、サクソンの豚の群がある——彼等に御坊がこの城砦の弱みに就いて何でもお氣に附かれた事とか、何かその外にこの城には二十四時間だけ彼等を喰ひとめて置く事が出来る備へがあるといふやうな事を聞かせてやつ

て貰ひたい。それからこの手紙を持つて行つて貰はう——だが一寸待つた——御坊、讀めるかな？」

「愚僧は日課經の外は皆目駄目でございます」とセドリックは答へた、「それからその文字も存じてゐます、何しろその聖典をちやんと謄記して居りますからな、有難やマリヤ様にウイトホールド上人様！」

「わしの目的には愈々持つて來いの使者だ。——この手紙をフィリップ・ド・マルヴォアザンの城に持參して貰ひたい。わしの處から持つて來たもので、侍侍ブリアン・ド・ボア・ギルベールが書いたものだとお言ひなさい、そしてわしからマルヴォアザンに、人馬の及ぶ限りの大急行でヨークにそれを届けて貰ひたいと頼んでゐるといふ事もな。それから彼に、我々は一人も缺けず、胸壁の背後に、確かに、達者でゐると傳へて下さい——いや、我々の槍旗の閃きや、我々の馬の足音にさへ、何時も逃げ出す浪士共の一團を今は却つて、我々が恐れて胸壁の背後に隠れなくてはならないとは、恥かしいわい！——なんと御坊、そなたの業で何とかして、我々の友人達が部下の槍騎兵を繰り出すまで、かの悪者共が今ゐる處を動けないやうにしてくれまいか。わしの復讐は目覺めてゐる、それを満腹する迄は眠らない準なのだ！」

「愚僧の守護神に誓つて」とセドリックは彼の役目に適はしい程度以上に力を籠めて言つた、「又イングラントに生れてイングラントに死んだあらゆる聖に誓つて、あなたの命令に従ひませう！——一人のサクソンだとして、若し愚僧が彼等を其處に喰ひ留める業と力とを持つてゐますれば、この城壁の前か

ら動かせは致しません。」

「エッ！ 貴僧はがらりと調子を變へられたな、まるで、サクソンの豚共を殺す魂膽でもあるかのやうに、簡単に言ひなされる、それとも貴僧はあの豚共に縁のある身ではないか。」

セドリックは即座に空とぼける術を心得てゐなかつた。で、この際ワンバのもつと頓智の利く頭からの暗示があれば大變好かつたのである。が、古い諺にもある通り、必要は發明の才を磨くとやらで、彼は頭巾の蔭から、件の人々が國からも寺からも破門された浮浪人だといふ事などを何かぶつくと呟いた。

「本當に、御坊は全くの事を言はれたわい——わしはあの悪者共が、向うの鹽辛い海峡（英國海峡のこと。その南に云ふのはノルマンデイを指す）の南に生れたも同然、裕福な僧から剃ぎ取ることもあるといふ事を失念してゐた。彼等が解の樹に縛りつけられ、無理やりに供養の歌を唱へさせられながら、その間に旅囊や頭陀袋など奪ひ取られたといふのは聖アイヴスの和尚ではなかつたかな？——いや、たしか——その惡戯はわし達の騎士仲間の、ミッドルトンのガルティエが致したのだつたつけ。だが、聖ビーズ寺の御堂から小さい盃や燭臺や大きな聖餐の盃などを奪つたのは、サクソンだつたぢやないかな？」

「彼等は不信心な人々でした」とセドリックが答へた。

「さうぢや、して彼等は、そなた等が通夜や朝の祈りに忙しいと觸れこんでゐる時に、度々の祕密な酒盛の爲めに貯へてあるおいしい葡萄酒やビールを、悉皆飲み乾して了つた！——御坊、そなたは是

非とも左様な神聖を遣す罪の怨みを報いねばならない。」

「わしは本當に是非ともその怨みを報いねばならない、」と、セドリックは呟いた、「ワイトホールド上人こそ、わしの胸を御存じです。」

フロン・ド・ブーフは、斯くして、裏門迄案内して行つた、そして、たつた一枚の板を渡つて濠を越えて、二人は小さい外堡に着いた、其處は十分に固めた非常口から廣野と往來が出来るのである。

「ではお行きなさい、そして若し御坊がわしの使をして下さるなら、そして若し果して此處へ戻つて參られたなら、サクソンの肉がシェフィールドの屠殺場にゐる豚の肉も同様、安つばいものだといふ事を見せて上げよう、そして、よつく聽かれよ、そなたはなかく愉快な僧のやうだ——」で、この攻撃の後にこゝへ參られよ、さすればそなたの寺全體をびしよ濡れにする程のマルヴァアジー酒(普通マイ云つて、強い)を飲ませて進ぜよう。」

「必ずまたお會ひ致しませう、」とセドリックは答へた。

「當座に何か持ち合せのものを、」と、ノルマンは言葉を續けた、そして二人が裏門で別れる時、セドリックの厭がる手に無理やりに金貨を一枚掴ませて、言ひ足した、「お忘れなさるな、萬一そなたがこの用を足せなかつた時は、頭巾も皮も引剥いでやるから。」

「そんな目に遭ひましても苦しくございません、」とセドリックは裏門を出ながら、そして自由の野原へと足も輕げにつかく歩みながら、答へた、「若し、今度お會ひする節、愚僧が貴方からもつといふ物を頂戴いたすだけの御用に立ちませんでしたら、——それから城の方を振り返りながら、金貨をくれた者の方へそれを投げつけて、同時にかう叫んだ、「人非人奴、貴様の金なんざあ貴様と一緒になくなつちまへ——」

フロン・ド・ブーフはこの言葉を瞭然(はつきり)は聞かなかつた、が、振舞は怪しいと思つた——「射手共、」と

外側の胸壁にゐる見張りの者達を呼んで、「向うに行く坊主に一矢射通してやれ！——だが待て、」と家來共が今矢を引かうとした時彼は言つた、「それは無益だ——我々には差當りもつといふ算段はないのだから、今のところ彼奴を信用せにやらぬ、眞逆彼奴にわしを裏切る勇氣はあるまい——極く悪く行つたところで高が犬小屋にちやんと入れてあるあのサクソンの犬共をやつとけるだけの事だ。

——うんさうだ！ おい牢番、チャイルズ、ロザードのセドリックをわしが面前に引き出せい、それから彼の仲間の、今一人の下郎もな——確かコニングスポローとか言つたな——それアセルステインと申す奴、それとも何とか言つたつな？ 名前さへノルマン騎士の口には手數の掛る奴等だ、それにまるで、鹽豚の味が致すやうだわい。——ジョン親王も仰せられたやうに、あの味を洗ひ流す爲めに、わしにも酒饅をくれ——うん、武器部屋に置いておけ、そして彼處へ囚人を引いて行け。」

彼の命令は行はれた、そして、彼自身や彼の剛勇によつて得られた數多の分捕品を掛けてある、そのゴシック風の部屋に入ると、彼の眼に映つたのは大きな櫛の卓子の上の一饅の酒と、四人の家來に護られたかの二人のサクソンの捕虜とであつた。フロン・ド・ブーフは先づ酒をぐつと一杯飲つて、それ

から捕虜に言葉を掛けた、——ワンバが帽子を眉深に被つた様子、衣服の變化、暗い斷々の光、それから城主がセドリックの顔貌をよく知らない事、(セドリックは近邊にゐるノルマン人等を避けて、滅多に自分自身の領地外に出なかつた、)それ等の爲めに、彼は己の捕虜中最も重要な者の逃亡して了つたことを發見するに到らなかつたのである。

「イングラン드의勇者達」と、フロン・ド・ブーフは口を開いた、「トールキルストーンの御馳走はどんなかな?——でもそち等は、アンジュ家の一親王の饗宴を愚弄致したに對して、その無禮や生意氣は何に相當するか氣附いてゐるかな? ジョン親王の過分の御饗應にそち等はいかやうに御報いしたか忘れたか。——神佛に誓つて、若しそち等がいつと多額の身代金を支拂はなければ、この窓の鐵棒からそち達の足を逆さに吊し、鳶や鴉が其方等を骸骨にする迄曝らしてやるわい!——これ申せ、サクソンの犬共——其方等の役にも立たぬ命をいくらに買はうといふのか、ロザードの奴輩、さあ幾らだ?」

「一文も出さぬわい、」と憐れなワンバは答へた——「足で吊すなど、吐すが、俺の腦は、子供の帽が初めて俺の頭に載つかつてから、逆さだといふ話だ、だから俺を逆さにすりや恐らく腦が亦舊に戻るかも知れぬわい。」

「これはどうぢや!」と、フロン・ド・ブーフは言つた、「何者を此處へ連れて參つたのだ?」  
そして彼は手の甲でセドリックの帽子を幫間の頭から叩き落した、そして彼の襟を掻開くと、隠し切

れぬ奴隷の印、頸に巻いた銀の喉當が現はれた。

「チャイルズ——クレメント——えい、下郎共奴!」と、烈火のやうに怒つたノルマンは喚き立てた、「貴様達は何者を此處へ連れて參つたのだ?」

「それは私が存じてゐる、」と、丁度その時この部屋へ入つて來たド・ブラシーが言つた。「此奴はセドリックの下郎で、先日上席争ひで、ヨークのアイザックとあの勇ましい小競合をした奴だ。」

「わしがこれ等兩人の爲めに極りをつけよう、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「若し此奴の主人及びこのコニングスボローの豚が、自分等の命乞ひにたと金を出すのをいやがれば、わしは二人共同絞首臺に上せて絞めつけてやる。セドリック等の財産は彼等が引き渡し得るものゝ中で最も些細のものだ、彼等は亦、この城を取り圍んでゐる鳥合の衆と一緒に連れ去り、彼等の我が物顔の特權の引渡しに調印し、そして農奴及び家來として、我々の配下にならなくてはならない、まさに始まらうとする新時代に於て、若し我々が彼等の鼻の息をその儘にして置けば、彼奴等は餘りに幸福過ぎるといふものだ。——行け、」と彼は二人の家來に向つて言つた、「本物のセドリックをこゝへ連れて來い、今度だけは貴様達の過ちを許してやる、馬鹿者の幫間をサクソンの郷士と取り違へただけの事だからな。」  
「ふん、だが、」とワンバは言つた、「殿様は我々の間には郷士よりも馬鹿の幫間の方が多くゐる事がお分りになられませう。」

「この悪者は何を吐してゐるのだ?」とフロン・ド・ブーフは自分の從者の方を見て言つた、その從者

は躊躇ひながら忌々しげに、若し目の當りにゐるこの男がセドリックでなければ、彼はどうなつたものか知らないといふ彼等の考へを吃り／＼言つた。

「畜生！」とド・ブラシーは叫んだ。「彼奴は坊主の法衣を着て逃亡したに違ひないぞ！」

「畜生！」とフロンド・ブーフもこの聲に應じて言つた。「では、わしが裏門に案内して、わしのこの手で放して遣つたのがロザードの豚奴であつたか！——して貴様は、」とワンバの方を向いて言つた。「貴様の愚かさは貴様よりもつとひどい馬鹿者の智慧を出し抜くことが出来た——わしは貴様に僧侶の位を授けてやる——うぬが爲めにうぬが脳天を刺つてやらう！——さあ、者共に此奴の頭から脳天を裂き出させてやらう、それから胸壁から此奴を眞逆様に投げ落させてやらう——貴様の商賣はおどける事だ、どうぢや今はおどけられないかな？」

「騎士様、貴方は手前をお言葉よりもよく處分して下さいます、」と哀れなワンバは泣き聲で言つた、彼の道化の癖は、死が目前に迫つてゐる時にさへ、決して失せはしなかつた。

「若し唯今仰せになられた赤帽子を手前に下さいますれば、手前をたゞの坊さんから大僧正に昇進させて下さるわけでございます。」

「可哀さうに此奴は、」とド・ブラシーは言つた、「自分の天職で死ぬ決心をしてゐる。——フロンド・ブーフ殿、此奴を殺してはなりません。此奴を私にお譲り下さい、私の傭兵團の玩具に致すから。——曲者、どうぢや？ 勇氣を出して、わしと一緒に戦ひに行くか？」

「さやう、御主人の許しがございますればお供致します、」とワンバは言つた、「何故つて、御覽下さいませ、御主人の許しが出なくちや（と、頸の喉當に觸りながら）此奴を外すわけに参りません。」

「おう、ノルマンの鋸は直ぐにサクソンの喉當を斷ち切つてしまはうぞ、」とド・ブラシーが言つた。

「はい、騎士様。」とワンバは言つた。「して其處からかういふ諺が出て來ます——」

ノルマンの鋸はイングラントの櫛にあてられ、

イングラントの頸にはノルマンの靴

ノルマンの匙はイングラントの皿に、

そしてイングラントはノルマンの思ひの儘に治められる、

イングラントの幸福な世はイングラントがこの四つを免れる迄

二度とは決して戻つて來まい。」

「ド・ブラシー殿、」とフロンド・ブーフが言つた、「貴方は破滅が大口を開けて我々を待つてゐる最中に、そんな處に立つて馬鹿者のたはごとを傾聽してゐられるとは結構な事だ！ 貴方は我々が出し抜かれてゐる事がお分りにならないのか、我々の目論んだ城外の味方と通ずるといふ手段は、貴方が愚かにも、兄弟附合ひをしようとするその染め分け着の紳士（ワンバ）に裏をかゝれたのだといふ事がお分りならないのか。我々は即刻烈しく襲はれると云ふ事以外にどんなことが期待せられるのか。」

「では胸壁に参らう、」とド・ブラシーは答へた。「一體貴方は何時私が戦争の思想を形に現はす彫刻師である事を御覽なすつた、向うにゐる寺侍を呼び寄せて、寺侍團の爲めに戦つた半分許りでも宜しい、一生懸命に戦つて貰はう——貴方は貴方の大きな軀を防壁となさい——私には私流に貧弱な努力をおさせ下さい、すればな、かのサクソンの浪士共がトールキルストーン城に登るのは、雲に登らうとするのと同然だ、それとも、貴方がかの山賊共と談判なさるお氣なら、何故、酒饅の事許り氣に掛けてゐるらしい、この郷士に調停をお頼みなさらぬ？——これ、サクソン、」とアセルステインに呼び掛けて、盃を渡しながら、語を續けた、「この貴い酒で喉を澆げ、そして元氣を奮ひ起して、そなたの身の自由の爲めにどうするつもりか言ふが、いゝ。」

「どんな貧弱な男でも、」とアセルステインは答へた、「これを與へられるとどんな剛毅な男にでもならう。——私を仲間の者達と一緒に放免してくれ、一千マークの身代金を拂はう。」

「でその上に、神の平和、王の平和に叛いて、この城の周りを取り圍んでゐる、あの人間の屑共の退却を我々に保證するか、」とフロン・ド・ブーフが言つた。

「私の及ぶ限り、彼等を引き上げさせよう、それにセドリック殿も力を盡して私に助力して下さる事は確かである。」

「そんなら我々も同意だ、」と、フロン・ド・ブーフは言つた——「一千マークの支拂で、そなたや彼等は自由放免となり、又兩方共兵を退いて平和となる。これサクソン、これは些細な身代金だ、そなたはそなた達の身代りにこれ位の金しか受取らない我々の穩當さを感謝するが、いゝ。だが、いゝか、この放免は猶太人アイザックの身にまでは及ばないぞ。」

「して又猶太人アイザックの娘迄にも及ばぬのだ、」と今彼等と一緒になつた寺侍が言つた。

「この二人は、孰れもこのサクソンの仲間には入つてゐないのだ、」とフロン・ド・ブーフは駄目を押し

た。「若し私の仲間が、そなた等の勝手に言ふ通り彼の不信者共と交際をしてゐたなら、私は基督教徒とは名乗られぬわい、」とアセルステインは答へた。

「して又今の身代金はローエナ姫のを含んではゐない、」とド・ブラシーが言つた。「私は美しい獲物を、威かされた爲めに双にも血塗らず、むざ／＼手放したとは決して言はれたくないのだ。」

「して又、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「我々の談判はこの憐れな幫間には關係してゐない、此奴は、冗談を眞面目に變へる凡ゆる悪者共への見せしめに、私の手許に留めて置く。」

「ローエナ姫は、」と、アセルステインは、ひどく眞面目な顔をして言つた、「私の許嫁なのだ。私は姫を手放すことを承知する位なら寧ろ野馬に曳きずられよう、奴隷のワンバは今日セドリック殿の命を助けてくれた——彼の髪の毛一本でも損はれる位なら寧ろ私の髪を失くす。」

「お前の許嫁だと？——ローエナ姫がお前如き下郎の許嫁だと？」とド・ブラシーは呶鳴つた、「こりやサクソン、お前はお前等の七王國時代がまた戻つて來ると夢みてゐるのだな。よく聞け、アンジュー

家の親王方は貴様のやうな血統の者等にあのお家の被後見者(ローエ)を授けはしないのだ。」  
 「高慢なノルマン、私の血統は乞食同然のフランス人(ド・ブラシー及びその部下の傭兵團を指す)よりも生粹まじらぬで古い源もとから出てゐるのだ、彼奴等の生計はその詰らない旗の下に集まつた泥棒共の血を賣つて漸く立てゝゐるのぢやないか。王者、しかも、戦争には強く會議には賢明おぼに在おしたその王者こそ私の祖先だつた。貴様等の郎黨の數より遙かに多くの者共を、毎日々々、その廣間で饗應したものだ。その臣下の名は吟遊樂人ミンストレルに歌はれ、そして彼等の守る掟は賢者の集りで記録され、彼等の骨は聖ひじりの祈禱のうちに埋葬され、その塚の上にはお寺が建立されたものだ。」

「ド・ブラシー殿、やられましたな、」とフロンド・ブーフは、仲間の者が受けた手痛い竹箆しつぺがへ返ししにひどく興がつて、言つた、「このサクソンは、見事に貴方に、一本くらはした。」

「捕虜としては全く見事にな、」とド・ブラシーはさりげなく言つた、「まあ考へて見ろ、手を縛られてゐる者は、せめて舌だけでも自由に使はねばなるまい。——だがそなたはさうべら／＼答へても、」とアセルステインに向つて、「ローエナ姫の自由を贏かち得るわけには行かぬぞ。」

これに對して、どんなに面白からうと、どんな題目だらうと、何時も喋るよりも長い間既に喋つたアセルステインは、更に答へなかつた。この會話は一人の僕しもべがやつて來たので妨げられた。而してその僕しもべは一人の僧が裏門の所で入城を乞うてゐると告げた。

410  
 「一體全體今度は本物の坊主か、それとも又別の贖物いんぎものか、」と、フロンド・ブーフは言つた、「奴隷共、その者を吟味しろ——もしそち達が二度目の騙りにうまくしてやられたら、そち達の眼玉をくり抜いて、燃える石炭を眼窩めのおなへ突つ込んでやるからさう思へ。」

「殿様、若しこれが本當の坊さんでなければ、手前はどんなお怒りを受けようと構ひません、」とチャイルズは言つた、「楯持のジョセリンがその者をよく存じてゐまして、ジョルヴォール僧正に仕へる僧、アンブローズであると保證致すでございます。」

「お入れ致せ、」とフロンド・ブーフは言つた、「十中の八九、彼の快活な主人より音信おとづれを齎あづらして參つたものに相違なからう。僧侶共が、斯く恚ほしにこの國中を横行してゐるのは、確かに惡魔が安息日を守つて、彼等が勤めを解かれたのだと見える。この捕虜共を連れて行け、そしてサクソン、今そなたの聞いた事を篤と考へて見るが、い。」

「私は同じ幽閉でも、」とアセルステインは言つた、「私の身分相應に、又身代金談判中の者に相當するやうに、食事と寢床とに適當の注意を拂つて、それに應はしい禮を盡して戴きたい。その上、そなた等の中で我こそと思ふ者は私の自由をこんなに侵害した事に對し身を以て私に應答すべきだと思ふ。この挑戦は既に給仕頭からそなた等に傳達された筈だ、そなた等はそれを受けてゐる以上、義理にも應じなくてはなるまい——さあ私の手袋(決闘を挑む印、相手が手袋を取り上げることを挑戦に應ずるのである)は此處に置くぞ。」

「わしは自分の捕虜の挑戦に應じない、」と、フロンド・ブーフは言つた、「そして又、モオリス・ド・ブラシー殿、貴方もなさるまい。——チャイルズ、」と更に語を繼いだ、「その郷士の手袋を向うの枝の

出た又角またつのの尖に掛けて置き、彼が放免せられる迄さうして置くがよい。その時になつてもまだ小癩にも決闘を申し込む勇氣があるか、乃至は私に不法の捕虜となつたなどと、斷言する氣があれば、一騎打にでも家來共を引き連れてでも、又は徒歩かちでも馬上でもこれ迄一度も敵に試合を拒んだ事のないこの私に彼は話すだらう！」

そこで、サクソンの捕虜は連れ去られた、とそれと引きかへに家來達は恐ろしく狼狽してゐるらしい僧アンブローズを案内して來た。

「これこそ本物のデウス・ゾーピスクム（ラテン語で「神政を護りたまへかし」の意であるが此處では單に「僧侶」の意）とワンバはその僧と通りすがりに言つた、「外の者はみんな贖物に過ぎなかつた。」

「おゝ聖母様！」と、その僧は其處に集まつてゐる騎士達に聲を掛けた、「愚僧はとう／＼安全の身となり、基督教徒に保護されるやうになりました。」

「そなたの身は安全だ、」とド・ブラシーは答へた、「して基督教と云へば、此處には猶太人を非常に憎む強い領主レジナル・フロン・ド・ブーフ殿も居られるし、サラセン人を殺すのが商賣の、立派な侍、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿も居られるし、若しかういふのが基督教の立派な印しるしでなけりや、その外にはこれほどこのお二人が立派な基督教徒であるといふ印しるしになるものを存じません。」

「あなた方は我々の教父、ジョルヴォールの僧正エイマ様の友達であり、同盟者でございます、」と、僧はド・ブシーの答の調子を少しも氣に掛けずに言つた、「あなた方は騎士の誓約から申しても、聖い

仁愛から申しても、僧正をお助けしないでは居られますまい、何故と仰しやれば、あの貴い聖オーガスチンが、その著『神都論』中で申した事に——。」

「悪魔が言つた事に、だらう！」とフロン・ド・ブーフは遮つた、「といふよりも寧ろ、御身が言つた事にか？ 御坊。わし達は教父様達から聖書の句など聞くひまはないのだ。」

「マリア様！」とアンブローズは突然叫んだ、「この罰當りの俗人達はなんといふ怒りおどつぽい事だらう！——だが勇敢な騎士様方、まあお聞き下さいまし、或る殺人鬼共が、神様を畏れることも、教會を尊ぶことも投げ捨て、聖い法王の教書も顧みず、又シベキス・スワーデンテ・ディアボロー（ラテン語、若し何人でも悪魔に説伏せられて一の意、尚ほ、この後に「僧侶に暴行を加へるならば」と云ふ意味の事があるのである）——」

「御坊、」と寺侍は言つた、「もうみんな分つた、いや大抵推量致した——さあ明らかに言ふがよい、御坊の主の僧正は捕虜になつたのか、して誰にだ？」

「確かに僧正様は悪魔共ペリアルの手に捕はれてゐます、この森を荒し廻つてゐる者共の手に、『わが受膏者頭に油を注いで、聖列に入れられた者、キリストもその一例』（舊約聖書、詩篇）といふ御聖文を汚す者共の手に。」

「方々、こゝに又我々の劍を用ゐる新しい理由が出來ましたぞ、」とフロン・ド・ブーフは仲間かたぐの者を振り返りながら言つた、「さうして、我々の處に何の援助の軍勢も着かないのに、却つて、ジョルヴォールの僧正から我々の助けを求めてゐるではありませんか。まさかの時にはこれ等ののらくら坊主共から



随分助けられるのですからな！　だが仰しやい御坊、きつぱり仰しやい、そなたの御主人は我々に何を望まれるのだな？」

「恐れながら」とアンブローズは言つた、「無法の者共が愚僧の既に引用致しました御聖文に叛いて、私の事へまつる僧正様に手を下しまして、悪魔共が僧正様の旅囊や頭陀袋を剝ぎ、精鍊した純金の二百マークを奪ひ取つた上、而もその外に多額の金子を要求して、それを出さぬ中は僧正様を彼等異教の手から離さうと致しません。でございますから、僧正様には、自分の親友としまして貴方様かたに、彼等の要求する身代金をお拂ひ下さるなり、武力に訴へるなりして、そこは御適宜に、自分をお救ひ下さいますようにと御願ひになるのでございます。」

「あの僧正奴、鬼に攫はれて了へ！」とフロン・ド・ブーフが言つた、「彼奴は朝酒をしたゝか飲つゝけたと見える。いつお前の主人は、ノルマンの領主が、自分の十倍も重い金袋を持つてゐる坊主を救ふ爲めに、自分の財布の口を開けたといふ話を聞いたのだ——そして我々は此處で、今我々の人數の十倍もの敵に取り巻かれて、襲撃を今か／＼とはら／＼して待つてゐる場合なのに、彼奴を自由の身にする爲めに、わし等はいかに勇者だとして、それで何をする事が出来るのだ？」

「して、さうお急ぎ遊ばさずに、愚僧に一寸喋る暇をお與へ下さい、それは愚僧が今お話し申し上げようと思つてゐた事なのでございますが、情けない事に、愚僧は年を取つてゐますので、かう云ふ忌はしい攻合ひを見ると、老人の頭は直き狂つて了ふのでございます。けれども、彼等が野營して、土堤を築いてこの城に對抗するのは確實でございます。」

「胸壁へ參らう！」とド・ブラシーが叫んだ、「そしてあの悪者共が、城外で何をしてゐるか見届けようぢやないか。」かう言ひながら、彼は張出櫓に通ずる格子窓を開けるや否や、そこから部屋の人々から叫んだ——「全く！　この老僧こそ本當の消息を齎らしたのだ！——彼奴等は小楯や大楯を持ち出してゐる、そして射手共は森のはづれに霰の降る前の黒雲のやうに群つてゐる。」

レジナル・フロン・ド・ブーフも亦野原を覗いて見た、そして直ちに腰の喇叭を引擡んで、一吹き長く高く吹いてから、家來共に城壁の上の持場々々につくやうに命令した。

「ド・ブラシー殿、壁の一番低い東側にお氣を附けなさい——ポア・ギルベール殿、貴方は御職掌柄どう攻撃し、どう防禦すべきか、よく御存じの筈だ、西側に御目を配られよ——私は外堡を受持つことにしよう。だが各々方、一方だけに主力を傾けるのは考へもの değildir、我々は今日は凡ゆる方面に活躍しなくてはならない、攻撃の最も烈しい場所は何處にでも居合はす者達が早速加勢したり、救助したりするやうに、出来るだけ兵力を集中しなければならぬ。こつちの人數は少ない、だが敏活と勇氣とはこの不足を補ふ事が出来よう、高が土百姓相手の戦だもの。」

「ではございますが、騎士様方」と教父アンブローズは、防禦の用意のどさくさ騒ぎの最中に叫んだ、「どなた様もジョルヴォールのエイマ僧正の御傳言をお聴き下さらないのでございませうか。——どうぞお願ひだ、愚僧の申す事をお聞き下さいまし、レジナル様！」

「お前の願ひは天に行つて喋るがいゝ」と猛きノルマンは言つた、「地上では、我々はそんな事に耳を傾ける暇がないのだ。——おーい！ それ、アンセルムー ぐら／＼煮え返る瀝青や油をあの不敵な逆賊共の頭に注ぐ用意が出来たかどうか見て来い——弩組に矢が不足してゐないか氣を附ける。——老牛の頭のついたわしの旗を押し立てい——悪者共は今日誰を相手にしなくてはならないか、直ぐ分らう！」

「ではございませうが、殿様」と例の老僧は、尙ほも注意を惹かんものと、撓まず言ひ續けた、「愚僧の服従の誓約をお考へ下さいまし、そして愚僧に僧正様の使ひの役目を果させて下さいまし。」

「このよく喋る老耄奴を連れて行け」とフロン・ド・ブーフが言つた、「禮拜堂に押し籠めて、この騒動の済むまで、珠數をつまぐらせて置け。聖母讚美の祈禱や、主の祈りを聞くのは、トールキルストーンの御堂に鎮座遊ばす尊者共には珍しい事だらう、どうせ石でこさへたものぢやもの、今迄こんなに尊ばれた事はなからう。」

「御尊像に不敬の言をお吐き召さるな、レジナル殿」とド・ブラシーはたしなめた、「我々も今日は、向うの烏合の衆が解散しない中は、この尊者方のお助けも要らう。」

「わしは彼等から少しも援助を期待しない」とフロン・ド・ブーフは答へた、「胸壁から彼等(尊者共の像を意味す)を、悪者共の頭上に抛りつけると云ふのなら別だが。一隊のさうだ全部を倒すに足る程のクリストファー尊者が、あちらに重々しきさうに歩いてゐた。」

そのクリストファー尊者と緋名された寺侍は、かれこれする間、殘虐なフロン・ド・ブーフや彼の部下の激し易い仲間の者よりも一層氣を配つて、攻め手の行動を視察してゐた。

「本當に」と彼は言つた、「彼の者達は、どんなに訓練を受けても、かうまであらうとは思はなかつた程に規律正しく進む。各々方は如何に巧みに彼等が樹とか叢とかをみんな利用して身をかばひ、我の弩矢を、まともに受けるのを避けてゐるか御覽になつたか。彼等の間には軍旗も槍旗も見附からない、私は胸の金鎖を賭けて言ふが、確かに彼等は、誰か戦争の實際に通じた騎士か貴族かに指揮されてゐる。」

「うむ、見える／＼」とド・ブラシーは言つた、「騎士の飾毛が揺れてゐる、甲冑がびか／＼輝いてゐる。あの向うの黒の甲冑を着た丈の高き男を御覽なさい、續く烏合の衆を指揮するに忙しい、——確かに、彼こそアシユビーの試合で、フロン・ド・ブーフ殿、貴方を倒した、我々が『黒いのろま』と呼びました當人だと思ふが。」

「彼奴がわしの怨みを晴らさせに此處へ參るとは、慥々以て好都合だ」とフロン・ド・ブーフは言つた。「彼奴は折角自分の物と極まつた試合の褒美を、留まつて争はうともしないなど、少しく卑怯な奴に相違ない。わしはもう少しで、世の騎士や貴族がその敵を探すやうな場所で彼を探さうとして無駄をするところだつた、その彼が向うの悪徒の郷士共の間に姿を見せるとは實に嬉しい事だ。」

敵は今にも攻撃を始める形勢にあつたので、皆押し黙つて、誰もこれ以上口を利く者がなかつた。

騎士は夫々自分の持場に歸つた、そして彼等の集め得た少人数の家來、而も數の上では城壁の全區域を護るに不適當であるほどの少人数の家來を率ゐて、今にも來さうな攻撃を落着き拂つて待つてゐた。

(二十八)

この彷徨へる種族は、他の人の世と斷たれて、

而も世の秘術に精通するを誇る。

彼等が往來する海、森、荒野は

己れの秘めたる寶を彼等が知れるを見、

顧みられぬ草、又花は、

彼等に摘まるゝ時夢にだに見ぬ力を顯す。

(猶太人)

讀者諸君がこの重大な物語の残りを了解せられる上にどうしても必要な或る事件をお知らせする爲めに、話は是非數頁の間逆戻りしなくてはならない。諸君の御聰明さはいふ事を實際たやすく豫想されたかも知れない、即ちアイヴンホーが卒倒して、全世界に見棄てられたやうに見えた時、レベッカは父に懇願して、やつとその同意を得るや、この雄々しい若武者を試合場から、當時この猶太人がアシュビーの郊外で當分假りの宿としてゐた家まで運んで行つたのである。

アイザックは根が親切な、恩に感ずる男であつたから、一體なら外のどんな場合にも、この程度に彼を説き伏せる事はさう難かしい事ではなかつたのだ。が、彼も亦日頃迫害されてゐる同族人の偏見と、疑ひ易い小心とを持つてゐたので、彼を説服するには、先づこの偏見と小心とから取り掛らねばならなかつた。

「おゝ神様！」と彼は叫んだ、「あれは立派な青年だ、あの青年の金目な刺繡をした皮ジャケットやら、高價な甲冑やらからだ、血が垂れるのを見ると、まるでわしの心臓から血の出るやうな思ひがする——だがあの青年をわしの家に運ぶ事は！ 娘、お前はよつく考へて見たのかい？ あの方は基督教徒だ、我々の掟によると、我々は商賣上の利益關係以外に異邦人と交渉してはなるまいて。」

「さう云ふ風に仰しやるものぢやございませぬ、お父様」とレベッカは言つた、「私達は成程宴會や遊山などに、基督教徒と交つてはなりません、けれど怪我や災難の時には、異邦人も猶太人の兄弟になりますわ。」

「わしはヤコブ・ベン・チュデラ先生(十二世紀の有名な猶太の旅行家チュデラのペンジャミンの事であらう)がそれに就いてどういふ意見を持つてゐられるか知りた、とアイザックは答へた——「が兎に角、あの立派な青年はこの儘血を流させて死なしてはならない。セスとルーベンに言ひつけて、アシュビーまで運ばせるがよい。」

「いえ、あれ達の手であの方を私の吊臺(つりだい)にお乗せ申しませう、とレベッカは言つた、「そして私は馬で

歸ることに致します。」

「そんな事をすりやイシユマエルやエドム(バレスタインの南、猶太人の敵の住んでゐる地方)の犬共の目にお前を曝さにやらぬから、」とアイザックは騎士や従者の群の方に疑ひ深い眼を投げながら囁いた。が、レベッカは、最早自分の慈悲深い目的を實行するのに忙しくて、彼の言つた言葉などは耳に入らなかつた。でアイザックは遂に彼女の外套の袖を掴み、せかくした聲で、また叫んだ——「飛んでもない事——若しあの青年が死んだらどうする！——若しわし達が預つてゐるうちに死にでもしたら、わし達は彼を殺したと思はれないか、そして群集にずた／＼に引き裂かれやしないか。」

「お父様、あの方は死には致しません、」とレベッカは、アイザックの掴んでゐた袖をそつと振り切るやうにして、言つた——「私達が見棄てさへしなければ、あの方は死にはいたしません。そして若しあの方に若しものことでもあつたなら、神様や人間に私達が本當に責任を負ふべきでございますわ。」

「いや、」と、アイザックは掴んでゐる手を緩めながら言つた、「あの青年の滴る血を見るのは、わしの財布からそれだけの金貨がこぼれでもするやうに、悲しいのだ。そして今は天國にごさるビザンチウムのマナッセス先生のお娘ミリアム様のお教へで、お前を醫術に巧みにして戴いた事もよく知つてゐる、又お前が藥草の妙法や、仙丹の効力を辨へてゐる事もよく知つてゐる。では、お前の心の行くやうになさい——お前は、いゝ娘だ、天福だ、王冠だ、そしてわしに、わしの家に、又わしの先祖の人々にとつて喜びの歌だ。」

けれども、アイザックの杞憂は杞憂に終らなかつた、彼の娘は寛大な、恩を知る慈悲心の爲めに、却つてアシユビーに歸る途中、ブリアン・ド・ボア・ギルベールに穢らはしい凝視を受けることになつた。

即ち、寺侍は途中二回迄彼等の傍を往つたり來たりして、その都度この美しい猶太の娘に大膽な熱い秋波を送るのであつた、そして我々は既に前章に於て見たやうに、彼女の美が起した嘆賞の結果は、偶々彼女がああ放肆な淫樂の徒の手に陥つた時に現はれたのである。

レベッカは時を移さず患者を彼等の假りの宿に移させて、早速手づから彼の傷を驗べて縛帯してやつた。傳奇小説やロマンチックな小唄などを讀まれた最も若い方々でも、この所謂暗黒時代の頃には、女性（性）が外科醫の秘術を教はる事の如何に數多かつたか、又雄々しい騎士がその身の傷を彼女の治療に委せ、そして彼女の明眸が、その手篤い看護にもまして尙ほ一層深く彼の胸に沁み入るといふ事の如何に數多かつたか、必ずや思ひ出されるに相違ない。

所が猶太人には、各部族に互つて、男でも女でも醫術を心得、且つ行ふ者が多く、當時の帝王や有力な城主さへ負傷したとか、病氣に罹つたとかした時には、よくこの卑しんだ種族の誰か經驗を積んだ賢者の醫療に身を任せるのであつた。猶太の普通の醫者の助けもそれに劣らず熱心に求められた、尤も、猶太の夫子は秘學、とりわけイスラエルの賢人達の研究にその名と起原とを持つてゐた神祕の術（猶太人の神祕魔法の秘術、カバラミは）に、深く通じてゐるといふ一般的の考へが、基督教徒の間に行き互つて（猶太語で「傳統的學問」を云ふ意である）、深く通じてゐるといふ一般的の考へが、基督教徒の間に行き互つてゐたからであるが。そして又夫子達は超自然的技術にもさうした熟達を持つてゐた。がそれは彼等

の民族が受けた憎悪を少しも増さないばかりか、(實際何の爲めに憎悪を増す必要があつたらう、そんな筈はないのである)却つてその惡意害心を含む輕蔑の念を減じたのである。猶太人の魔法使は猶太人の高利貸と同じく憎悪の對象であつたかも知れぬが、併し決して同等に賤しみ輕んぜられる筈はなかつた。それに又彼等が行つたと言はれる驚くべき治療を考へて見ると、猶太人が彼等獨特の或る醫術の祕法を持つてゐたといふ事もまた領られるのである。そして彼等はそれを彼等の境遇から生ずる排他的な精神から、自分達の周圍にゐる基督教徒には知らさないやうに、多大の注意を拂つてゐた。

美しいレベッカは幼い時から注意して育てられ、當時猶太人の子女の受くべき凡ゆる知識を授けられたが、彼女の敏い偉おほいさしい智力は、よくそれを學び修めて、それを整頓し、それを擴大して、彼女の年齢としても、女性としても、更に彼女の生活する時代としても、不相應な程の進歩を見せたのである。

彼女の醫藥及び醫術の知識は、彼等仲間の最も有名な或る醫師の娘で年寄つた猶太女の許で修得されたのである。その女はレベッカを我子のやうに愛して、自分も同じ娘の時代に、同じ可愛い娘として、その賢明な父から遺された祕法を、彼女に傳へたと信じられてゐた。彼女、ミリアムの運命は、實に當時の狂信の犠牲と成らねばならなかつたが、(彼女は魔法を使ふ者として暗殺された)併し彼女の祕法は彼女の敏い弟子であるレベッカの手に長く生き残つた。

斯く美にも智にも恵まれたレベッカは同族の人々に廣く尊敬され、嘆美された。彼等は殆んど彼女を聖書中に出て來るあの天賦の才ある女達の一人と見做さん許りであつた。彼女の父は、彼女の才能に

對する尊敬心から、又それにいつかしら彼の限りない愛情も交つて、同族の習慣では普通婦女子に許されない程の自由を彼女に許し、又たつた今述べたやうに、屢々自分の意見はさて措いても、彼女の意見を採つて行動するのであつた。

アイヴンホーはアイザックの家に着いた時、試合場で奮戦中の多量の出血の爲め、今尚ほ人事不省の状態にあつた。レベッカは傷を調べた、そしてそこに彼女の醫術に照らして二三の療法を施してから、父に向ひ、非常な出血の爲め少々熱の心配はあるが、若し幸ひにその熱を避けることが出来たなら、そして若しミリアムの塗藥ぬりぐすりがその効目きりめを失はなかつたなら、この客は生命に關するやうな心配はなく、明日皆と一緒に無事にヨークまで行く事も出来ようと言つた。アイザックはこの言葉を聞いて、少し呆然としたやうであつた。彼の慈悲心もアシニビあしにびで覺おぼえつけたのであつたのである。でなければ、まあ精々この傷ついた基督教徒を自分が今滞在してゐる家に、家主の猶太人には一切の費用を自分がちやんと支拂ふからと請合つて置いて、後に残して養生させたかつたのである。けれどもこれに對して、レベッカは色々な理由を擧げて反對した。此處にはその中アイザックが取分け重要視した二つだけを述べることにしてしよう。その一つは、あの大事な祕法が、人に發見される虞おそれがあるから、どんな事があつても、この貴重な塗藥の瓶を假令同族でも他の醫師の手には渡したくないといふ事と、今一つは、この傷ついた騎士、アイヴンホーのキルフレッドはリチャード獅子心王の無比の寵臣であるから、他日この王が歸國された場合、王の弟ジョン親王にその叛逆の志を遂げるに必要な金銀かねねを融通したアイザックは、リチャ

1ドの寵愛を受けてゐる有力な保護者を大いに必要とするといふ事とであつた。

「お前の言ふのは至極尤もな事だ、」とアイザックはこの手強い論に打ち負かされて言つた——「尊いミリアムの秘法を洩らしたら、それこそ天の神様の御機嫌を損ふだらう、何故と云ふに、天のお授け下さる賜物は、それが金貨何百タレント(一タレントは昔、希臘や猶太の目方及び貨幣の名で、時と處に依つて異つてゐたが、シチツカ・タレントは約二千四百五十圓許りである)銀貨何千シケル(希臘、猶太の貨幣の名で、約日本の壹圓位)であらうと、又それが名醫の秘傳であらうと、むやみに他人に濫費すべきものぢやないからな——いや確かにそれ等は天の神様から特にそれを賜はつた者だけが傳へ保存すべきものだからな。それからイングランドのナザレ人が獅子心王と呼んでゐる人に萬一わしが、その人の弟と取引してゐたといふ事が知れたなら、確かにわしに取つては王の手に入るよりは、エドム(パレスの南東、山嶽の多い地方)の強い獅子の手に陥る方が増しだらう。そんならお前の意見に耳をかす事として、この若者をヨークまで一緒に連れて行かう、そして病氣の治る迄わしの家をお前の家としよう。で若し獅子心王が、この頃噂の立つてゐるやうに、この國に歸つて來られたなら、その時にはこのアイザックのキルフレッド様こそ、お前の父が王の御不興をひどく蒙つた節、屹度防壁となつて護つて下さるだらう、して若し王の御歸國がないにせよ、このキルフレッド様は、それでも、昨日や今日のやうに、槍や劍の力で金銀を得なすつた時、わし達の費用を拂つて下さらう。何しろこの若者は立派な方だからな、それに自分で指定した日は守りなざるし、借りたものは返しなざるし、イスラエル人で、わしの父の家の子でさへ(アイザック自身のこと)強い悪者やベリアルの子達(惡魔)に取り巻かれてゐる時には、救つて下さるからな。」

アイザックが漸く自分の合ふる處に氣が附いたのは、夕暮の幕のもう閉ぢようとする頃であつた。彼は人事不省の状態から恢復した時、自然に伴ふ混亂した印象を浮べながら、斷々の假睡から目覺めた。彼は暫しの間試合場で倒れる前の事情をはずきり記憶に呼び起す事も、又は自分が前の日に關係した出來事の連絡を認める事も少しも出來なかつた。傷口の痛みは非常な身體の衰弱と疲勞に伴つて、互に與へたり與へられたりした打撃や、雙方から突進し合つて、倒したり倒されたりした乗馬や、喊聲や劍戟の響やそれから入り亂れた闘ひの凡ゆる無暗な喧しきなどの記憶と入り交つて感ぜられた。彼は手を伸ばして、病床に懸つてゐる帳を取りのけようとした、それは傷の痛みで容易ではなかつたが、それでも、少しは側の方へ動かすことが出來た。

ところが、彼は自分が見事に裝飾された一室に寝てゐるのを見て非常に驚いた。休むには椅子の代りにクッションがあり、その他の點でも多分に東洋風を帯びてゐたので、彼は自分が昏睡中に、再びパレストインの地へ送り返されたのではないかと、疑ひ始めたのである。この印象は、帳が側へ引かれて、ヨーロッパ趣味よりも東洋趣味を多分に加へた立派な衣裳を着た一人の女性が、黒奴の僕を従れて、帳の蔭の扉から靜かに入つて來た時に、一層強められたのである。

病める騎士がこの美しい幻影に言葉を掛けようとするや彼女は華奢な指を紅玉の唇に當て、黙つてゐらつしやいといふ合圖をした、その間に、僕は、彼の方に近寄つて、着物を解いて彼の横腹を出

した、そしてこの愛らしい猶太の娘は繻帯が具合よくなつてゐて、傷口がだん／＼快方に向つてゐるのを見て、さも満足した様子であつた。彼女はやさしくも又嚴かな率直さと慇懃<sup>いんじん</sup>さを現はして、傷の手当を施した。その態度は實に立派であつて、もつと文明な時代に於てさへ、傷口の手当など、女性の優美を傷つけるらしい所があるのに、それを立派に防いでゐた。斯くも若く美しい人が病床の看護に、いや異性の傷の手當に従事してゐるといふ考へは、或る情け深い者が、苦痛を和らげ、死の打撃を避けるやうな有効な救ひを捧げてゐるのだといふ考への内に、溶けて姿を消してしまつたのである。レベッカはヘブライ語で老僕に「二言三言<sup>ことごと</sup>簡単な指圖を與へた、そして同じやうな場合に屢々彼女の助手となつたこの老僕は、無言のまゝ命ぜられた通りにした。

聞き知らぬ言葉の抑揚も、他の者の口から出たらどんなに耳障りに響くかも知れなかつたのであるが、一度この美しいレベッカの唇から出ると、何か恵み深い仙女の發した咒文<sup>じゆもん</sup>を想はせるあのロマンチックな心地よい感銘を與へた。それは實際耳には解し難いが、併しそれに伴ふ音聲の快さと様子の温和さから、人の胸を動かすのであつた。尙ほ、進んで訊ねようともせず、アイワンホーは黙つて二人のするが儘に任せて、彼等が彼の恢復に最も適當だと思つた手段を取らせた、が、手当がすんで、この親切な醫者が其處を退らうとした時、アイワンホーは事の由來を詮索したくて耐らなくなつた。——

「淑女、」と、彼は、東方の諸國を旅する中に知るやうになつた、そして今自分の前に立つてゐるこの頭巾を被り、カフタン(土耳古人などの着る長い袖の下着)を着た少女に一番解りさうだと思つたアラビア語で

口を開いた——「淑女、どうぞ、お情けに」

併し此處で彼はこの美しい女醫者に遮られた、彼女が微笑むと、どことなく瞑想的な憂鬱の漂つてゐる顔に一寸驚か<sup>おどろ</sup>浮ぶのであつた、——「騎士様、私はイングランドの者でございます、私の衣裳や血統は異國のものでございます、けれども、どうぞイングランドの言葉で仰しやつて下さいませ。」  
「貴い少女よ、」——再びアイワンホーの騎士は言ひ出した、そして再びレベッカは急いで彼を押しとどめた。

「騎士様、私に貴いなどと云ふ言葉をお使ひ下さいますな。で、早速お打ち明け申しますが、このあなたの腰元は哀れな猶太の娘でございます、あなた様か<sup>せんたう</sup>つ先達<sup>せんたう</sup>てお救ひ下さいました、あのヨークのアイザックの娘でございます。父や父一家の者達か、あなた様の今の御容態には、是非なくてはならないやうな、注意深い御看護を致しますのは當然の事でございます。」

美しいローエナ姫に心を捧げた騎士が、今の今迄愛らしいレベッカの美貌や、艶姿<sup>あですがた</sup>や、明眸<sup>あきめ</sup>などに見とれてゐた時に懐いたやうな情を姫は全然平氣でゐたかどうかそれは分らない、——レベッカの眸は、長い絹糸のやうな睫毛<sup>まつげ</sup>に包まれてその輝きが遮られ、いはば柔<sup>やはらか</sup>みを添へられてゐた。そしてそれは吟遊樂人<sup>インストレル</sup>なら素聲<sup>ソウセイ</sup>の樹蔭<sup>ジュイネ</sup>越しに光を放つてゐる、夕の星にも喩<sup>たと</sup>へたであらう。併しアイワンホーは餘りに立派なカトリック教徒であつたので、猶太人の娘に對してローエナ姫に對すると同じやうな感情を懐くことはなかつた。これをレベッカは豫め知つてゐた、そしてたゞこの爲めに彼女は急いで自分の父

の名前や血統を告げたのである、けれども——この美しい賢いアイザックの娘とて女の弱さをいさゝかも持たないといふ譯はなかつたので——アイヴンホーがこれ迄その見知らぬ恩人に向けてゐた慇懃な嘆稱の眼付、而も優しみを全然交へないのではなかつたその眼付が、今遽かに變つて冷たい、落着いた、平氣な態度、而も思ひ設けぬ方面、劣等種族の者から受けた慇懃に對する感謝の念を示す位みの感情しか現はさない態度になつたのを見ては、さすがのレベッカも内心深い溜息をつかない譯にはいかなかつたのである。それはアイヴンホーの以前の振舞が青年の常に美に對して拂ふ普通の獻心的な敬意以上のものを示し、今急にさうでなくなつたからではなくて、それは、レベッカが、さうした青年の敬意を受ける権利が自分には有るといふことを多少認めてゐたのに、今自分の身の上を打ち明けた唯一言が、憐れな自分をさうした敬意など、とても受ける事の出来ない、卑しい階級に黜ける爲めの咒文として働くといふ事を、無念とも口惜しとも思つたからである。

併し、レベッカの穩かで淡泊した心根は、アイヴンホーがその時代と宗教の持つ世間一般の偏見に陥つた事を咎めはしなかつた。それ所か、この美しい猶太娘は、自分の患者が今や自分を、定罪の民(神に見はなされた民、即ち猶太人)——その民と止むを得ない附合以外にはどんな交際をしてもそれは不面目とされてゐた——の一人と看做したとは感じたけれども、而も彼の安全と恢復とに前と變らぬ辛抱強い獻身的な注意を拂ふ事を止めなかつた。彼女は自分達一家が必要に迫られてヨークに立ち退くといふ事や、父が彼を其處へ移して、健康の恢復するまで自分の家で看護する決心だといふ事などを語つた。アイヴンホーはこの計畫を非常に嫌ふ様子だつた、自分の恩人にこの上心配を掛けるのは不本意だといふのである。

「アシュビーか、アシュビーの附近かに、誰ぞサクソンの郷士か、それとも金持の百姓でもいゝが、負傷した同國人を再び甲冑が着けられるやうになる迄、同居させて下さる方はあるまいか、」と彼は言つた——「サクソン人が建てゝゐる寺で收容してくれる處はあるまいか——それともバートン迄連れて行つて下さる譯には行くまいか、彼處へ參れば縁續きの、聖ウイットホールド寺の長老、ヨールセオフが厚遇してくれる事萬々間違ひないが。」

レベッカは顔に淋しい微笑を浮べて言つた、「幾らでもございませう、この邊の一番悪い宿舎でも確かに卑しい猶太人の住居よりはあなた様のお住居に適しくございませう。でも騎士様、あなた様の醫者にお暇を出されたのでございませねば、お宿をお變へ遊ばしてはなりません。私達の國の者は、よく御存知の通り、傷を加へる事は出来ませんけれど、癒す事なら出来ます、とりわけ、私達一家には、ソロモンの時代から傳はつてゐる祕傳がございまして、その効目は騎士様も既にお驗し遊ばしたところでございます。大不列顛の四海内でナザレ人の——騎士様、御免遊ばせ——基督教徒のお醫者に誰一人一ヶ月以内で甲冑を着けられるやうにおさせ申す方はございません。」

「してそなたなら、どれ位早く甲冑に耐へられるやうな體になるのだ、」とアイヴンホーはもどかしげに言つた。



「若し私のお指圖申すことを、辛抱して守つてさへ下されば、八日間以内には。」

「聖母マリア様に掛けて（若し此處で聖母様の御名を口に出しても罪でなければな）、今はわしにしても、如何なる眞の騎士にしても、床に就いてゐるべき場合でない、で若し、少女よ、そなたが今の言葉を果してくれるなら、わしは手に入り次第、お禮として銀貨をわしの甲に一杯進ぜよう。」

「屹度お約束を果して御覽に入れます、そして今日から八日目には、必ず甲冑を着けられるやうにおさせ申します、若し、今仰しやいました銀貨の代りに、たゞ一つ私の願ひを叶へて下さいませならば。」

「わしの身に叶ふ事ならば、して眞の基督教の騎士がそなたの種族の者に叶へてもやつてよい事ならば、喜んでまた感謝してその願ひをお容れしよう。」

「いゝえ、私はたゞ猶太人でも、天父様——猶太人と異邦人と兩方共お造り遊ばした天父様——の祝福以外の報酬を望まないで、基督教の方のお世話が出来るといふ事を、これから後もどうぞ信じて戴きたいと思ふだけでございます。」

「少女よ、それを疑ふのは罪惡だ、わしは、そなたが八日目には甲冑に耐へられるやうにしてくれと、心から信じて、もう躊躇もせねば、疑ひもせず、そなたの胸にお委せしよう。ところで、そなたに世間の消息を少々お訊ねしたいのだが、サクソン貴族のセドリックやその一家の者は何としたらう？——あの愛らしい姫は、——彼はローエナの名を猶太人の家と言ふ事を厭ふかのやうに言ひ遊つた——

「姫とは、試合の女王に指名されたあの姫の事だが、何としたらう？」

「そして騎士様、あなた様に選ばれて、あなた様の御膽力にも劣らぬ賞讃を受けられた御判断で、あの名譽ある地位を獲られたお方でございませう、」とレベッカは答へた。

アイヴンホーの蒼白めた顔にもさすがにさつと紅の色が差した、うつかりしてローエナ姫に寄せてゐる深い思ひを、それを隠さうとしてした拙ない試みの爲め、却つて漏らして了つたことを感じたからである。

「いや實は姫よりもジョン親王の事を聞き度かつたのだ、それから忠實な従者の事も少々。あれは今何故わしに侍いてゐないのだらう？」

「どうぞ私に醫者としての權威を振はせて下さいませ、」とレベッカは答へた、「そしてその知りたいと仰しやる事について私が御報告申し上げる間、何にも仰しやらず、興奮遊ばすやうな考へ事も、お避けなさいませよう命じさせて下さいませ。ジョン親王様は試合を解散されますと、この國の分限者と思はれてゐる人々から、手段が正しからうと正しくあるまいと、搾れるだけのお金を集めて、それからお味方の貴族、騎士、僧侶などを引き連れて、ヨークへと大急ぎで御出發なさいました。世間では専ら御兄君の王位を奪ふ御計畫だと取沙汰致して居ります。」

「イン格蘭ドにたつた一人でも眞の家來が居つたなら、王位を衛る爲めに、一撃喰はずに置かないのだが、」とアイヴンホーは床の上に起き上つて言つた。「わしはリチャード王の御爲めに彼等の中の精銳と戦つてやる——さうだ、大義の爲めに、一人なり二人なりを相手に取つて！」

「けれどさう遊ばす事が出来る爲めには、」とレベッカは彼の肩にそつと手を置いて言つた、「今は私の指圖を守つて、静かにしてゐらつしやらねばなりません。」

「本當だ、少女、この騒がしい時勢が許すだけの安靜はな。——してセドリックとその一家は？」

「セドリック様の御家令がほんの一寸前いらしつて、」と猶太娘は言つた、「急いで息を切りながらいらしつて、父からお飼ひになつてゐる羊の毛の代金をお貰ひになりました、その節その方から、セドリック様とコニングスボローのアセルステイン様とが非常に御不興で、ジョン親王様の御宿所を出られて、お歸りになるところだと承りました。」

「御宴には誰か婦人も一緒に参られたか。」

「ローエナ姫は、」と、レベッカは訊ねられたよりももつと精しくそれに答へて言つた、「ローエナ姫は親王様の御宴にはいらつしやいませんでした、そして、御家令の話によりますと、只今後日者セドリック様と御一緒にロザウウッドへお戻りの旅ださうでございます。それから貴方の忠實な従者ガースさんには——」

「おゝ！」と騎士は思はず聲を擧げた、「そなたはあの者の名を御存知か？——いや知つて居られる筈だ、」と言つて、直ぐに語を繼ぎ足した、「ようく知つても居られよう、わしはそなたの寛大な氣象から、今漸く悟つたのだが、彼が直き昨日百ゼチンズ受取つたのは、そなたのお手からであつたのだもの。」

「それを仰しやつては下さいますな、」とレベッカは眞赤になりながら言つた、「本當に口といふものは、心が好んで隠さうとする事を、直きに漏らして了ふものでございます。」

「併し、あの金を、」とアイワンホーは嚴然と言ひ放つた、「そなたの父に返却すると否とはわしの名譽に關はることだ。」

「それなら八日経つて後に、どうなりと御随意に遊ばしませ、けれど今は御恢復を長引かすやうな事は何にもお考へ遊ばしてはなりません、又仰しやつてもいけません。」

「ではさうしよ、そなたの言ひつけを守らぬのは恩知らずの所以であらうから。が、たつた一言可哀さうなガースの事を訊かせておくれ、さうしたらお訊ねすることはやめる。」

「お氣の毒に、騎士様、あの人はセドリック様のお言ひつけで監禁の身となりました、」と猶太少女は答へた——そしてそれから、彼女の言葉がキルフレッドに與へた悲しみを見て取ると、直ぐに言葉を繼いで言つた、「けれども家令オスワルド様の仰しやるには、若し御主人の御不興を又重ねるやうな事が起らぬ以上、必ずセドリック様はガースをお赦しなさらう、元々忠實な奴隸で、氣に入りの奴ではあるし、それにセドリック様の御息様が、お愛しい許りに今度の不始末を仕出かしたに過ぎないのだから、との事でございます。そしてその上に、自分と自分の仲間達、わけても幫間のワンバなどは、セドリック様のお怒りがどうしてもお解けにならぬその節は、ガースに途中で逃亡させる決心だのとこのでございます。」

「神よ、願はくは彼等の目的を果させ給へ」とアイブンホーは念じた、「だが、わしはわしに親切を示してくれた人を誰でも破滅させるやうな運命に生れて来たやうに思はれてならない。わしを引き立てて名を揚げさせて下すつた我が君王陛下に對して、そなたも知る通り、最も御恩恵を蒙られた御弟君は王位を覬つて、干戈を動かさうとして居られる、——わしの敬慕は却つて女性中最も美しい方に遠慮と勞苦をおさせ申す——又わしの父は今この哀れな奴隷を、たゞわしを愛しわしに忠實に仕へた許りに、不機嫌で殺し兼ねぬ様子だ！ 少女よ、そなたはどういふ不運な奴に親切を盡してゐるかお分りだ、スロッドハウンド犬のやうにわしの足跡を追うて来る不幸が、そなたをも亦捲き添へにせぬ内に、早くわしを放すがいい、それが賢いといふものだ。」

「いえ、騎士様、貴方様は今この御衰弱今のお悲しみの爲めに天意の在る所を御勘違ひ遊ばすのでございませぬ。貴方様は御國が強い腕と眞の心との助けを、最も必要とした時、御歸國なされました、そして貴方様の敵、王様の敵の誇りを、その者等が最も鼻を高くしてゐた時に、お躰に成りました、そしてお受け遊ばした災難の事でございますが、天の神様が貴方様に、この國の最も賤まれる者の間にさへ、救助者と醫者とを下し給うたといふ事がお分りになりませんか？——ですから、勇氣をお奮ひ遊ばせ、そして、今は、いざといふ場合に腕を奮つて何か驚くべき事を國民の前で行ふ爲めに保護せられてゐるのだとお信じ遊ばしませ。御機嫌よろしう——それから後ほどリュートベンにお藥を届けさせますように。」

アイブンホーはレベッカのこの言ひ分を成程と思つた、で、その指圖に従つた。リュートベンが服せた藥は鎮靜催眠の效を持つてゐて、病人を深い安らかな眠りに誘うた。翌朝この親切な醫師は、彼に發熱の徴候が全然なくなつて、旅の疲れを受けたにしても大丈夫な事を知つた。

彼は試合場から乗せられて来た馬吊臺に再び乗せられ、安樂に道中の出来るやうに凡ゆる注意を拂はれた。が、たつた一つの或る事情の爲めに、レベッカがいくら懇願してもこの負傷した騎士の取扱ひに十分の注意を拂ふことは出来なかつた。アイザックは、自分が掠奪好きのノルマン貴族にも又サクソンの浪士にも等しく好箇の獲物と思はれさうな事に氣附いて、ジューヴェナル(ローマの詩人)の「第十諷詩」の金持の旅人のやうに、絶えず盜賊の恐怖が目先にちらつてゐた。それで彼は旅路を非常に急いで殆んど足も休めねば、食事も碌に取らなかつた、で彼よりも數時間先に立出たが、聖ウィットホールド寺で緩く御馳走を食べたりして暇取つたセドリックやアセルステインの一行を間もなく追ひ越した。而もミリアム膏が效いたのか、それともアイブンホーの體質が強かつたのか、この急ぎの道中にも彼の親切な醫師が氣遣つたやうには體に障りはなかつた。

けれども、今一つの見方から言ふと、この猶太人の急ぎ旅は少々上首尾過ぎたものとなつた。彼が今度の道中に主張した速さは、彼と護衛に雇つた同行者等との間に一度ならず口諍ひを醸したのである。この連中はサクソン人で、ノルマン人が懶惰大食といふ汚名を被せた安樂美食の民族的愛好を缺

く者では決してなかつた。今、シャイロックの地位(シヤイクスビヤの「ヴェニス」の商人「第二幕第五場十四行」の文句、)を逆に行つて、彼等は金持の猶太人を喰物にする積りでこの仕事を請合つたが、さてその猶太人に是非云々の速さで進めと言ひ張られて、當てが外れて見ると甚だしく不愉快になつて來たのである。彼等は又この強行軍で自分等の馬を損ずる危険があると抗議を申し込んだ。そして最後に、アイザックとその従者との間には、食事毎に飲むことを許される葡萄酒やビールの量の事で恐ろしい仲違ひが出来たのである。こんな譯で、愈々危険の心配が近づいて、アイザックの恐れてゐたものが彼の身の上に振りかゝつて來さうに見えた時、彼はこの不満々々の傭兵共に捨てられて了つたのである。それと云ふのも、その傭兵共の歸服を得るに必要な手段を用ゐないで、しかもその保護を頼みにしてゐたからである。

この慘ましい状態で猶太人が、その娘や負傷してゐる病人と共に、セドリックに出會ひ、そしてその後間もなくド・ブラシー等の手中に陥つた事は既に述べた通りである。初めは、兇賊共も吊臺に殆んど注意を拂はなかつた、若し、ド・ブラシーが好奇心に驅られて、(ローエナ姫は面帕を掛けてゐて分らなかつたので、)ひよつとしたら自分の企圖の目的物がこの中に入つてゐるのではないかと感じて覗き込まなかつたなら、その儘後に取り残された事であらう。併しド・ブラシーはその吊臺に一人の負傷した騎士が乗つてゐて、自らアイザックのキルフレッドと名乗られた時、その驚きは一通りでなかつた。キルフレッドは又、的切りサクソンの盜賊の手中に陥つたのだらうと考へたので、自分の名を名乗つた方が、自分の爲めにも亦味方の人々の爲めにも、好都合かも知れないと思つて、明らさまに本名を名のつたのである。

437

幸ひにもド・ブラシーはその野蠻輕薄な中にも未だ、騎士の名譽といふ心持を全然失つてはゐなかつた。で、この防衛術さへもない騎士に危害を加へる事も控へたし、又領地争ひの相手と知つたら、どんな事情があつても殺すに躊躇しないだらう、フロン・ド・ブーフに密告する事も等しく思ひ止まつた。が又一方、試合場の出來事や、この前キルフレッドが父の家を逐はれたといふ事があつて、世間に浮名を唄はれた通り、ローエナ姫に婿と選ばれた者を釋放する事は、ド・ブラシーの雅量の程度では迎も出來なかつた。善と惡との中間の處置が、彼の採る事が出来る唯一のものであつた。そこで彼は自分の従者二名に命じて、この吊臺の傍に付き添はせ、何人をもこれに近づく事を禁じた。そして若し問ふ者があつたら、ローエナ姫の空吊臺を使つて、格闘の際に負傷した仲間の一人を搬ぶのだと言へと命令した。愈々トキルス・ストーンに到着するや、寺侍や、この城の主が一人は猶太人の財寶の事に、他はその娘の事に、それ／＼自分の計畫に熱中してゐる間に、ド・ブラシーの従者等はアイザック・ブーフを、今も尙ほ負傷した仲間といふ名目で、遠く離れた一室へ運び去つたのである。で、後にこの者共はフロン・ド・ブーフに、何故警報を聞くと直ぐ胸壁にやつて來ないかと訊かれた時、右の説明で返答した。「負傷した仲間だ」と！彼は怒りと驚きとの聲で荒々しく答へた。「下郎奴や小地主共が城を攻め圍む程迄に増長するのも、又道化や豚飼ひ共が貴族に挑戦状を送るのも、別に不思議はないのだ、城が

今にも攻め寄せられようとしてゐる際に、兵卒共は病人の看護人に變つて了つたし、自由兵團は死にかけてゐる者の部屋の番人になつてゐるのだもの。——胸壁へ行け、こののらくら共奴！」と邊りの迫持に響き返る程の大聲を張り上げて、叫んだ。「胸壁へ行け、行かぬとこの采配で貴様達の骨を打ち碎いてくれるぞ。」

兵卒は顔を顰めてかう答へた。「自分達は若しあなた様が、死に掛けてゐる人を介抱せよと言ひつけた自分達の主人に斷つて下さるなら、胸壁へ行くことを決して厭ひはいたしません。」

「死に掛けてゐる奴だと、下郎共！」と領主は言葉を返した。「もつと頑強に固守しなけりや、我々が残らず死に掛けてゐる人間になるのだぞ。兎に角この貴様等の卑怯な仲間の守番を交代させよう。——こりや、アフリード——鬼婆——サクソン巫子の悪魔——わしの呼ぶのが聞えないか？——この奴共が武器を執つてゐる間、床に就いてゐる者の介抱をしろ、どうせ介抱してやらねばなるまいからな、——者共、當城に鋼弩が二張ある筈だ、弩曲げ機や、方銃箭もちやんと附いてゐる——お前達と一緒に外堡へ行つて、お前達が各々サクソンの腦天に矢を射通すところを見よう。」

かうした類の者によくある通り、企圖を好み無爲閑散を憎んだこの兵卒達は、命ぜられた通り、喜んで危険な場所へ出掛けて行つた。かうしてアイワンホーの看護はアフリード、即ちウルリカの手で引き渡されたのである。ところが、日頃身に受けた危害の記憶と復讐の希望とで胸を燃やしてゐたウルリカは、直ぐにこの病人の看護をレベッカに譲らうとしたのである。

## (二十九)

向うの物見櫓に登れ、勇ましき兵共よ、

戰場を見よ、而して戦の模様を語れ。

(シルレルの「オルレアンの少女」)

危急の瞬間は往々にして胸襟を開いて親切と愛情とを表はす瞬間でもある。我々は感情が非常に激動すると心に油断を生じ、爲めに、心の穩かな時に、思慮分別で、假令全然押へつける事は出来なくとも、少くも隠してゐるその感情の熱烈さを露はすものである。再びアイワンホーの枕邊に付き添ふ身となつた時、レベッカは、兩人の身邊の事情が全く絶望ではないにしても、非常に危険であるらしい今の場合でさへ、烈しい歡びを心に覺えた自分を見出して、思はず驚いたのである。彼女が病人の脈を取り、その容態を訊ねた時、彼女の手觸りにも、言葉付にも、自分が表はしたかつたそれよりも、ずっと優しい思ひの籠つた物柔かさがあつた。レベッカの口は吃り手は顫へてゐた、が、「おゝそなたであつたか、優しい處女、」とこのアイワンホーの冷たい一言に、彼女ははつと我に返つて、自分の胸に感じた歡びが、相互のものでなく又さうである筈のない事に氣づいた彼女は思はずはつと溜息を洩らした、がそれは殆んど相手に聞えなかつた、そして彼女が騎士に容態の事を訊ねる言葉は落着

いた友情の響を帯びてゐた。アイヴンホーは口早に、體の具合はいゝ、思ひの外快方に向つて來たと答へた——

「愛しいレベッカ、」と彼は言つた、「そなたの看護に感謝する。」

「私の事を愛しいレベッカと呼んで下さる、」と少女は心の内で呟いた、「けれども、それにはその言葉にすぐはぬ冷淡な、無頓着な調子が籠つてゐる。この方には御自分の軍馬の方が——御自分の獵犬の方が、賤しめられた猶太の娘よりもよっぽど可愛いのだ！」

「優しい少女よ、」とアイヴンホーは續けて言つた、「わしの心は心配の爲め攪き亂されてゐる、それは到底體の苦しみどころではないのだ。たつた今、わしの看守であつた者達の話で、この身の捕虜である事が分つた、そして、つい今何かの軍務につくように、此處からあちらに行けと彼に命じてゐた高い、嘔聲から推察すると、この身はフロン・ド・ブーフの城中にゐるに相違ない——若しさうなら、この末はどうなるのだらう、いや又どうすればローエナや父を保護する事が出来るだらう？」

「猶太人や猶太娘の名は、一言も言つては下さらない、」とレベッカは又心の内で呟いた、「でも私達はこの方を相手に出来る筈がない、本當にこの方に思ひを寄せた天罰が當つたのだ！」彼女はかう言つて我れと我が身を責めると急いでアイヴンホーに知つてゐるだけの事を告げようとした、が併し自分の知つてゐる事はたゞこれだけに過ぎなかつた——寺侍ボア・ギルベール及び領主フロン・ド・ブーフがこの城内の司令官であると云ふ事、城は外から包圍されてゐるが、誰の爲めには知らないと云ふ事。彼女はそれに附け加へて、城内に一人の基督教の僧侶があるが、その人ならもつと詳しい事を知つてゐるかも知れないと言つた。

「基督教の僧侶！」と騎士は嬉しげに言つた、「その人を此處へ連れて來ておくれ、レベッカ、そなたで出来るなら——病人がお教へを乞うてゐると言つておくれ——そなたの言ひたい事を言つていゝから、その坊さんを連れて來ておくれ——兎に角何かしなくちやならない、いや、何かやつて見なくちやならないのだが、城外の様子が分る迄はどうして決心することが出来る？」

レベッカはアイヴンホーの願ひを容れて、セドリックをこの病める騎士の部屋へ連れて來ようとした。が、この試みが、自分も亦この贗法師を途中で捕へようと見張りをしてゐたアフリードの妨害で失敗に終つた事は、讀者の既に知る通りである。レベッカは使ひの結果をアイヴンホーに傳へる爲め引き返へした。

が、彼等はこの消息の出所を失つたことを残念がつてゐる暇もなく、又、どういふ手段でその補ひをつけようかなどと圖つてゐる暇も餘りなかつた、と云ふのは、大變な防禦準備の爲めに起つた城内の騒ぎ聲が、今や十倍の雑沓喧騒に増大したからである。重々しい、而も急しげな兵卒共の足音は、胸壁を横ぎつたり、様々な張出櫓や、防禦地點へ行く狭いぐる／＼廻はる廊下や、階段に響いたりした。騎士達の部下を勵ましたり、防備方法の指揮をしたりする聲が聞えた、而もその命令する聲は時々甲冑のかち合ふ音や相手の兵卒共の騒がしい叫び聲に打ち消された。これ等の響は凄まじく、まして

二人が恐ろしい出来事を豫覺したところから、尙ほ一層物凄かつたけれども、而もレベッカの勝氣な心は、その怖ろしい時にあつてさへ、一種壯烈な氣がその響と交つてゐる事を感じた。彼女の頬から血の氣は失せたけれど、眼は輝いてゐた、そして恐怖とぞつとするやうな壯絶の念との濃く混つた色を眼に浮べながら、彼女は我れと我が身に眩やくともなく、又病床の騎士に言ひかけるともなく、次の聖書の句を繰り返した、——「矢筒は鳴る——きらく／＼光る槍と楯、——將帥の大聲と吶喊の聲！」

(約百記、三十九章廿三節及び廿五節後半参照)

併しアイヴンホーはあの莊嚴な章句

(約百記、三十九章二十節より二十五節までの間)「その嘶く聲の響は畏るべし、谷

劍に向ふさも退か)にある軍馬のやうであつた、自分の働けないのが齒がゆさに、又この響を魁けに起つ

た闘ひに加はりたといふ熱烈な願望に、顔は熱し輝いてゐた。「この勇ましい戦況を見る爲めに身を曳きずつてなりと、向うの窓へ行くことが出来さへしたら——箭一本でも射れる弓なりと、我々を救ひ出す爲めにたつた一撃でよい、打てる戦斧なりとありさへしたら！ それも駄目だ——それも駄目だ——俺は力もなければ武器もないのだ！」

「氣をお揉み遊ばすな、騎士様」とレベッカは答へた、「あの物音は俄かに止んで了ひました——あの人は戦ひを交へないのかも知れません。」

「そなたは戦争の事をなんにも知らない、」とキルフレッドはもどかしげに言つた、「このばつたり止んだのは外ではない、人々が城壁の上の自分の部屋について、急の襲撃を今か／＼と待つてゐる證據な

のだ、先き聞いた物音は嵐の近づく囁き聲に過ぎない——それは程なく烈しい勢ひで襲つて來よう。向うの窓まで行けさへしたらな！」

「そんな事を遊ばしては、御自分で御自分の體を毀してお了ひになるばかりでございます、」と附添ひは答へた。が、彼の喩へやうのない憂慮の様を見ると、斷乎した口調でかう言ひ足した——「私が格子の所に立つてゐませう、そして外の様子を出来るだけ、あなた様にお話し致します。」

「それはいけない——そんな事をさせはしない！」とアイヴンホーは叫んだ、「どの格子も、どの隙間も、直ぐ射手の的となるだらう。それに又流れ矢が——」

「流れ矢も結構です！」とレベッカは呟きながら、緊かりした足取りで、今話題となつてゐるその窓の方へ行く階段を二つ三つ踏み登つた。

「レベッカ、可愛いレベッカ！」とアイヴンホーは叫んだ、「それは少女の遊戯と違ふぞ——我と負傷や死を求めるやうな事をするな、そんな機會を興へた事を、いつまでもわしに悔い歎かしてくれな。せめて、其處にある古い楯で身を守つて、出来るだけ格子の所に體を出すな。」

不思議な位の敏速にアイヴンホーの指圖に従つて、大きい古楯を、窓の下半部に立て掛けて、それで、身をかばひながら、レベッカは、可なり身を安全にして、城外の形勢を一部分瞰下すことが出来ると共に、アイヴンホーに寄手が強襲の用意をしてゐる様子を告げることが出来た、實際、彼女がかうして占めた位置は、この目的にとりわけ好都合であつた、といふのは、本丸の一角にゐるので、レ

ベッカはたゞに城の廓内くわくうちから外に起る事を見ることが出来た許りでなく、又企てられた攻撃の第一の目標であるらしい外壘をも一目に見渡す事が出来たからである。それは餘り高くも強くもない外側の堡で、つい先程セドリックがフロン・ド・ブーフに出して貰つた裏門を護るものであつた。城の濠はこの外堡を本丸から隔てゝゐたので、萬一この外堡が占領された場合には、假橋を撤して、本丸との往來を斷つことは容易であつた。外堡には城の裏口と差向ひに非常口があり、全體に頑丈な柵が繞らしてあつた。レベッカはこの部署の防禦に配置されてゐる兵の數から、攻圍された側の者がこの外堡の安全を氣遣つてゐるのだと、觀察することが出来た、又これと殆んど眞向うの方面にゐる寄手の勢揃ひから、此處こそ攻撃すべき弱點として選ばれたのだといふ事が、これも亦同じく明白のやうに思はれた。

これ等の模様をレベッカは口早にアイヴンホーに傳へた、そして附足して言つた、「森の端れは射手で縁取られてゐるやうに見えます、ほんの僅かの者しか、その黒い影から出て居りませんが。」

「して、旗印は？」とアイヴンホーは訊ねた。

「旗印といつては何にも見えません。」

「こんな城を襲撃するのに、槍旗も軍旗もないとは餘り變だ！」と騎士は呟いた——「して指揮者として働いてゐるのは誰か見えないか。」

「黒い甲冑を着けた騎士が一番鮮かに目に附きます。その人だけが獨り頭の上から足の先まで武装してゐて、邊りの人達全體の指圖に當つてゐるやうです。」

「その人はどんな紋章を楯に付けてゐる？」

「何やら鐵の棒のやうなものと、黒い楯に青く描いた南京錠とが。」

「何ッ、枷フエツクアロック錠おをに碧い南京錠！」(當時リチャード王は本名を名乗つて公然行動することを憚つてゐた所から、かゝる自由を束縛する具を紋章にしたものであらう)と、アイヴン

ホーは言つた、「誰がそのやうな紋章を付けてゐるか知らぬが、それは今わしの紋章であつて然るべきであらう。銘句モットーは見えないか。」

「かう離れては紋章もやつとでございます。」とレベッカは答へた、「それも陽が楯によく當つた時しか今申し上げたやうには見えません。」

「他に大將はゐないらしいが、」と憂ひ顔の訊手は叫んだ。

「此處から見る事が出来る人々の中には歴々の方の姿は一人もございません。けれども、屹度城の向う側も亦攻撃を受けてゐます。おゝあの人々は今進軍の用意をしてゐるらしい——ザイオンの神様、私達を護つて下さい！——何といふ怖ろしい光景でせう！——眞先に進む人々は皆大きな手楯や板で造つた矢楯を持つてゐます、後に續く同勢は進み／＼弓を引いてゐます。——おゝ弓を擧げます！——モーゼの神様、神様がお作り遊ばした人間をお許し下さいませ！」

レベッカの報告は此處で突然攻撃開始を告げる甲走つた角笛の合圖の音で遮られた。その合圖に應じて直ちに胸壁からノルマンの喇叭の亂奏が聞え、それには鐘鼓(鍋のやうな眞鍮製の調の上に皮を張つた樂器)の太い低い響が交つて敵の挑戦を侮るが如き調子であつた。兩軍の喚聲はこの恐ろしい騒ぎを増した、寄手は、「イン



グランドの聖ジョージ！」と叫び、ノルマンはそれ／＼の大將の鯨波に應じて、「進めド・ブラシー！——ポー・セアン！——ポー・セアン！——フロンド・ブーフ援けに！」と高い叫び聲で、これに應へた。けれどもこの闘ひが決せられるのは叫喚によつてではなかつた、寄手は死にも狂ひの努力で攻め立てたが、圍まれた方の軍勢も、負けず劣らず力強く防戦した。森林地方の慰事で強弓を最も有効に用ゐるやうに仕込まれた射手達は、當時の適切な言葉を用ゐて云ふと、「皆諸共に、」矢を切つて放つたので、護り手がその體をほんの少しでも見せたら最後、何處でも彼等の二十七吋の長矢に射當てられた。この猛烈な矢攻め——それは、霰のやうに繁く烈しく降り注ぎ、而も、それにも拘らず、一本の箭毎にそれ／＼の狙ひがあつて、狭間の矢眼と云はず、窓と云はず、苟も護り手が時折配置された所、また配置されさうな所へは何處へでも、幾本も束になつて飛んで來たが、——その間斷ない矢攻めの爲め、二三の守備兵は撃たれ、數人は傷ついて倒れた。併し、矢も貫く事の出來ない程堅牢な甲冑を頼みに、城壁に身をかばひながら、フロンド・ブーフの家來を始め、味方の面々は、攻撃の烈しさに劣らず、頑強に防戦して、或は強弓を射放し、或は大弓、投石器、その他の飛道具をもつて、雨霰と降り注ぐ箭に應戦した、そして、寄手は仕方なしではあつたが、甚だ無頓着に防いだので、フロンド・ブーフの一黨は、自分達が受けたよりも遙かに多くの損害を寄手に與へたのである。兩軍の箭や飛道具の風切る音を遮るものとは、敵味方それ／＼に何か目立つた損害を負はすか、負ふかした時、どつと起る物凄い喚聲ばかりであつた。

「してわしは床に就いた僧のやうに此處に寢てゐなくてはならないのだ、」とアイワンホーは叫んだ、「わしに自由を與へるか死を與へるかといふ分け目の戦が、他の者達の手に行はれてゐるのに。——今一度、親切な少女よ、窓から覗いて見てくれ、だが下の射手に狙はれぬやう氣を附けなくちやならぬいぞ——今一度覗いておくれ、そして彼等が未だ進撃してゐるかどうか教へておくれ。」

默禱をしてゐた間に不屈の勇氣がいよ／＼強くなつたレベッカは、再び格子の處に、併し下からは見えないやうに體を隠しながら、坐つた。

「何が見える、レベッカ？」傷つける騎士は再び訊ねた。

「矢の雲の外何にも見えません、飛びますこと飛びますこと私の眼の眩む程、そして射るその人の姿を隠す程激しく。」

「それも永くは續く筈がない。こんな堅固な城を乗り取るには、眞物の武器の力で眞直ぐに肉迫しないでは、弓矢ちや石の塀や城壁には殆んど役に立つまい。柳老銃の騎士を探しておくれ、レベッカ、そしてその武者振りを見ておくれ。大將が大將なら、家來も家來だらうからな。」

「あの方の姿は見えません。」

「卑劣な腰拔奴！」とアイワンホーは叫んだ、「風が一番強く吹く時、舵から尻込みするののか。」

「尻込みはしません！ 決してしません！ 今見えます、一隊の人數を率ゐて、外堡の外側の柵門の直き下まで參りました。——あの人々は杭や矢來を引き倒します、柵を斧で切り倒します。——あ

方の高い黒い飾羽毛は群がる兵の上に彼方此方と浮いて、死人の横はる原つばをうろつく大鴉のやうです。——おゝ矢來の一方を破りました——躍り込みます——突出されます！——フロン・ド・ブーフが防ぎ手の頭です、彼の大きな體が人込の中に高く見えます。皆なはまた破れ口に集まります、そして一人づゝ取つ組合つてその道を奪ひ取らうと争つてゐます。本當に！ 烈しい潮流と潮流とが出會つたやうです——逆風にさかまく大海と大海との衝突です！」

彼女は、これ以上こんな恐ろしい光景を見るに堪へないと云ふやうに、つと格子から顔をそむけた。「もう一度外を見ておくれ、レベッカ」とアイヴンホーは彼女が退いた原因を思ひ違ひして言つた、「弓矢は幾らか治まつたに違ひない、今接戦してゐるからには。——もう一度見ておくれ、今度は前程危険ではない。」

レベッカは再び覗いて見た、そして殆んど同時に叫んだ、「おゝ大變な事になりました！ フロン・ド・ブーフと黒装束の騎士とが崩壊口で一騎打をしてゐます。邊りに二人の家來が取り巻いて、その成行を觀てゐます——神様、迫害に悩む者や捕虜の味方をしてお討ち下さい！」彼女はそれから高い悲鳴を擧げて、叫んだ、「あの方が倒される！——あの方が倒される！」

「誰が倒されるのだ？」とアイヴンホーは大聲で叫んだ、「一體どつちが倒れたのだ？」

「黒装束の騎士の方が、」とレベッカは弱々しく答へた、それから直ぐ、又嬉しげな熱した聲で叫んだ——「違ひます——違ひます——有難や！——あの方は起き上りました、そして片腕だけで二十人力

もあるかと思ふ程戦ひます——劍が折れて了ひました——一人の郷士から斧をひつたくります——フロン・ド・ブーフを切つてく切り捲ります——あの大男は、樵夫の斧に伐り倒される榎の樹のやうに屈んでひよろついでゐます——おゝ倒れる——倒れる！」

「フロン・ド・ブーフか、」とアイヴンホーは聲をはずませて訊ねた。

「え、フロン・ド・ブーフです！ 傲慢な寺侍を先頭に家來達がどつと助けに跳出しました——皆な一つになつて掛つたので、あの勇士も詮方なく退きます——皆なはフロン・ド・ブーフを城内に擔ぎ込みます。」

「寄手は柵門を占領して了つたらうな？」

「占領しました——占領しました！ そして城兵を外壁の上へ追ひつめました、中には梯子を掛けるものもあります、蜂のやうに寄りたかつて、互の肩を臺に攀ち登らうとする者もあります、——皆な頭の上に石や、梁や、樹の幹が落ちます、そして負傷者を後に搬ぶと見るまに、新手の軍勢が直ぐ入れ替つて攻撃します——おゝ、神様！ あなたは人間に御自分の御像をお授け遊ばして、こんなに残酷にその同胞の手で傷つけさせてお置きになるとは！」

「そんな事をお考へでない、今はそんな事を考へてゐる場合でないのだ——誰が降伏する？——誰が突進する？」

「梯子は切つて落されました、」とレベッカはがた／＼震へながら答へた、「兵卒達は潰された蛇か蛙の

やうにその下に匍匐つてゐます——城方の方が旗色がよくなりました。」

「神よ、敵を討たしめ給へ！」と騎士は叫んだ、「當てにならぬ郷士共は崩れたのか。」

「いえ／＼！」とレベッカは叫んだ、「あの人は立派に騎士らしく振舞つてゐます——黒装束の騎士はあの大きな斧を掲げて外堡の裏門に近づきました——そらあの方が打ち下ろす雷鳴のやうな斧の音が、この闘ひの騒ぎや、叫び聲に一際高く、お耳に入りませう——石や梁材があの大膽な戦士の上に雨霰と降りかゝつてゐます——あの方はそれを薙の冠毛程にも鳥の羽毛程にも思ひません！」

「ほう、う、」とアイワンホーは嬉しげに床の上に起き上つて言つた、「このイングランドに、そんな手柄の出来る者は一人だけと思つたに！」

「裏門が揺れます、」とレベッカは尙ほも言葉を續けて言つた、「碎けました——あの方の斧でさゝらのやうに打ち割られました——皆は、跳び込みます——外堡は占領されました——お、まあ！——皆は護り手を胸壁から抛り出します——壕の中へ投げ込みます——お、人々よ、お身達も人間ならば、もう抵抗の出来ない者は許してお上げなさい！」

「橋は——城内へ通ずる橋は、——橋は占領したのか？」アイワンホーが叫んだ。

「いゝえ。寺侍は自分達が橋を渡ると橋板を打ち壊してしまひました——護り手の中寺侍と一緒に城内へ逃げた者は殆んどありません——今聞える悲鳴や叫び聲はその他の者の運命を告げてゐるのです——嗚呼！——勝利を見るのは戦争を見るのよりも尙ほ一層見辛いものといふ事が分りました。」

「皆は今何をしてゐる、少女、まあ今一度覗いて見てくれ——今は流血を見て元氣を落してゐる時でない。」

「今の所は戦争も止んでゐます。味方の人々は占領した外堡の内で氣勢を擧げてゐます、そしてあの外堡は敵の射撃からの大變い、隠れ場所となつてゐますので、守備兵はたゞ時たまそれへ箭を四五本放つだけで、まるで本當に相手を傷つける爲めと言ふよりは、寧ろ氣を揉ませる爲めに射るのかと思はれる位でございます。」

「味方の者達は必ずあんなに華々しく始めて、あんなに首尾好く遂げた企圖を斷念しはすまい。——お、斷念はすまい！ わしはあの立派な騎士を——斧で以て櫛の楯や鐵の横木を打ち碎いたあの騎士を信ずる。——あんな向う見ずの武者振りをする事の出来るものが二人とあつたら、」と彼はまた我々と呟いた、「不思議な事だ！——柳錠と、黒地に南京錠——それはどういふ意味か知らん？——レベッカ、何か外にあの黒装束の騎士の特徴は見えないか。」

「何にも見えません、あの方の身に附いてゐるものは皆な夜鴉の羽のやうに眞黒です。それ以上にあの方の目印になるものは何にも見附かりません——けれどあの方が戦争で力をお奮ひになるところを一度見ましたからには、一千人の戦士の間交つてゐらつしつても二度と決して見忘れるやうなことはないと思ひます。あの方は饗宴に招かれてもしたやうな様子で戦闘に突進されます。とても人力とは思はれぬところがございませぬ、敵に打ち下ろす一撃々々には、まるであの勇士の精魂を全部籠めて

あるやうに思はれます。神様、あの方の流血の罪を赦し給へ！——人一人の腕と膽力とが數百の人々をどんなに征服する事が出来るかを見るのは、怖うございますが、でもまた壯快なものでもございます。

「レベッカ、そなたはよく英雄を言ひ現はした。確かに皆なはたゞ元氣を附けるか、さもなければ、壕を越える支度の爲めに一息入れてゐるに過ぎないのだ——あの騎士がそなたの言ふやうな勇士ならば、そんな大將の下に、臆病風の吹く事はない、冷淡に長びく筈はない、雄々しい企てを放棄する筈はない、困難が増して、骨が折れれば、また光榮も増す道理だもの、斷念する筈はない、——わしはわしの家名に誓ひ——輝かしい戀人の名に誓ひ、他日この度のやうな闘ひには、あの勇士と轡を並べて出陣する爲め、十年の幽閉にも堪へ忍ぶだらう！」

「あゝ！」とレベッカは、窓際を去つて傷つける騎士の床に寄り添ひつゝ言つた、「さう無性に戦闘に憧憬れ遊ばしては——今の衰弱してゐるお體を、さうお悶えお唧ち遊ばしては、必ず御恢復の邪魔になりませう——御自分がお受け遊ばした傷も癒えない中に、どうして他の人に傷を負はす期待をお持ち遊ばすことが出来ませう？」

「レベッカ、戦争をしなければ者が、自分の周囲で人々が華々しい手柄を立てゝゐる時に、僧侶か婦人かのやうに、おとなしくしてどうしてゐられるものか、そなたには分らない。戦争の讚美はわし等の食べて生きて行く食物なのだ——大合戦に立つ砂塵はわし等が鼻の息なのだ！ わし等は戦勝や高名を得

る間こそ命があるのだ、それを失つては生きてゐない——生きたいと思はない——少女よ、わし等が誓約し、わし等が貴ぶものを悉く捧げる武士道とはこんなものなのだ。」

「あゝ！ そして騎士様、それは、自惚の鬼神に犠牲を捧げ、モーロク(昔猶太人中、モアブ族の信じた神、彼等はその神の爲めに、自分の子を火中に投じて犠牲に捧げた)の神に捧げようとて火中を通るのとどんな違ひがございませう！——死の神が勇者の槍を折り、その軍馬の逸い足に追ひついて、命を果した時、お流し遊ばしたすべての血——お忍び遊ばしたあらゆる勞苦——御武功故にこぼされたすべての涙、それ等の報酬として騎士様に何が残りませう？」

「何が残る？」とアイワンホーは叫んだ、「譽れた、少女、我が墳墓を飾り、我が家名を輝かす譽れだ。」

「譽れ？」とレベッカは尙ほも言葉を繼いだ、「おゝ、戰士の仄暗い段々朽ち崩れる塚の上に、位牌代りに掲げる錆びた鎖帷子ですか——無學な僧が物問ふ巡禮に讀んで聞かせる事の殆んど出来ない磨滅した碑銘の彫刻ですか——これ等があらゆる優しい愛情の犠牲に對する、或は又他の人々を不幸にする爲めに不幸に送る一生に對する十分な報酬でございませうか、それとも、放浪の詩人の拙い歌には非常な價值があつて、所定めぬ吟遊樂人が、泥酔漢どもの晩酌を賑はす爲めに歌ふ、あの物語歌の主人公になる爲めに、家庭の愛も、優しい愛情も、平和も、幸福も、そのやうにわけもなく捨てられるものなのでせうか。」

「何を言ふ！」と騎士は耐りかねたやうに答へた、「少女、そなたはそなたの知らないものゝ事を言つ

てゐる。そなたは武士道の眞の光を消さうとする、この事あつてこそ始めて氣高い者と卑しい者と、  
 貴い騎士と下司と野蠻人とが區別されるのだ。これが爲めにわし等は高い名譽よりも遙かに生命を輕  
 んずる。これが爲めにわし等は苦痛、辛勞、悩みに打ち勝たうとするのだ。これが爲めに不面目の外如  
 何なる災禍をも恐れぬのだ。そなたは基督教徒でない、レベッカ。そなたには、氣高い處女の戀人が  
 何かその情火を證すやうな壯圖をした時、その處女の胸に高鳴るあの高い感情は分らないのだ。武士  
 道！——なんと、少女、武士道は清く高い愛情の乳母ではないか——迫害に悩む者の支柱、苦情不平  
 の救済者、暴君の權力の馬銜鏈——武士道がなかつたなら貴族は空名に過ぎなからう。自由は武士道  
 の槍、武士道の劍を得て始めてこの上ない守護者を持つのだ。」

「本當に私の生れた種族は、自國の防禦には勇氣を顯はしましたが、しかし未だ一國民であつた間で  
 さへ、神様の御命令か、若しくは自國を護つて他の壓迫を防ぐ爲めかでなければ、戦ひませんでした。  
 喇叭の音はもう猶太を目醒ませません、そしてその賤しめられる子等は今はたゞ敵愾心と武力の壓迫  
 の従順な犠牲に過ぎません。お言葉御尤でございます、騎士様、——ヤコブの神様が、第二のギデオ  
 ン(ヨシユアの死後イスラエル人の長であつた、ミデアン人の手からイスラエルを救ひ出すに力を盡した)なり、新しいマッカビース(その民を率ゐてローマ人に叛旗を翻した猶太人)なりを、  
 選ばれた民の爲めに起たしめ給ふ迄は、戦争や闘ひの事を語るのは、猶太の娘に相應しうはございま  
 せん。」

高潔な處女は悲しい語氣でかう結んだ、その語氣には、同民族の零落の念が色濃く現はれたが、而  
 もそれが彼女には名譽の場合に口を挿む資格がなく、名譽や仁侠の情を懷く事も、現はす事も出来な  
 いと、アイワンホーが見做したのだと思ふ心に、益々深められたらしかつた。

「アイワンホー様はこの胸の中をお察し下さらないにも程がある、」とレベッカは言つた、「私がナザレ  
 人の狂氣じみた武士道を非難したからとて、卑怯な、下賤な魂がその胸に宿つてゐるに違ひないと御  
 推察なさるとは！ 我自身の血を一滴づゝ流して、それで猶太の民を自由の身にする事が出来ますや  
 うに天にお願ひいたします！ いや、それでお父様と、このお父様の恩人とを暴虐者の鎖から放して  
 お上げする事が出来ますやうに、神様にお祈り致します。その時こそこの誇り高い基督教徒は、神に  
 選ばれた民の娘が、未開な寒い北國の何とかいふ詰らない酋長の血統を自慢する、自惚れの強いあのナ  
 ザレの處女(ローエナ)に劣らず、勇ましく死に得るか何うかをお分りになりませうから！」

彼女はそれから傷つける騎士の床の方を見遣つた。  
 「眠つてゐらつしやる。苦惱と元氣の消耗とで體力が盡きて、お疲れなすつたお體は、氣が緩むと直  
 ぐ、つい寢込んで了はれたのだ。あゝ！ これがこの世の見納めかも知れないやうな時に、この方  
 お顔を眺めてそれが罪だらうか——而もそれもほんの束の間の事、それにこのお美しいお顔立が、睡  
 つてゐらつしやる時でさへ、そこを去らない大膽さうな快活さうな御氣色に、再び活氣附けられる事  
 はなからうと思はれる時のやうな？ お顔を眺めたとして罪だらうか、——間もなく鼻孔は腫れ、口は  
 開き、眼は据わり血走る時に、そしてこの誇り高い氣高い騎士がこの呪はしい城の卑しい／＼卑怯者

に踏み躪られ、而も足蹴にされてさへ、身動きも出来ないかも知れぬ時に！——だが、私のお父様は！——おゝ、私のお父様は！ 青年の金髪に見惚れてお父様の白髪を忘れるとは、何といふ不孝な娘でせう！——今度のこの災難を、親よりも先に異邦人の身の上を考へたこの不孝な子に下されたエホバのお怒りの先觸れだと思はないで何としよう？ ユダの滅亡をわすれて、異教徒異邦人の美しさに迷ふ、この不孝な子に！——いつそ、この愚かな戀を心から引き離してはう、裂き捨てるのは血を吐くやうに辛いことなだけれど！」

レベツカは面帕で悉皆面を包んで、騎士の病床から少し離れて、背を向けて坐つた。——今こそ外からは災難が彼女に差し迫つてゐる。内からはあの裏切りしさうな感情が彼女を攻め立てゝゐる。これを防がうとして、彼女は自分の心を固め、固めようと努めてゐるのであつた。

(三十)

この室に近づいて、かの死の床を見よ、

彼の魂の緒の消え行くのは、雲雀が曉の

快い微風と柔かい露の中を、

空に昇り行くやうに

懇ろな人々の嘆きと涙とに護られながら

天に翔り行く静かな靈の臨終ではない！

アンセルムはそれとは違つた光景で、

黄泉に旅立つてゆく。

(古劇より)

攻圍軍の最初の成功に續く静寂の間に、一方はその有利な地位を維持しようとし、他方は防禦の手段を堅固にしようとする準備してゐるうちに、寺侍とド・ブラシーとは城の大廣間であつたらしい評議を開いた。

「フロン・ド・ブーフ殿は何處に居られます！」と、濠の彼方で城塞の防禦を指揮してゐたド・ブラシーは言つた、「人々は彼が殺害されたと申してゐますが。」

「生きてゐます。」と寺侍は冷やかに答へた、「まだ生きてゐますとも。が併し、彼が自分の名の牡牛の頭(彼の名、フロン・ド・ブーフは「牡牛の頭」と云ふ意)と、それを防ぐ十枚の鐵の胸板を着けてゐたとしても、あの恐ろしい斧の打撃に打ち倒されたに違ひありません。けれども今數時間も経つたなら、フロン・ド・ブーフは彼の祖先達の許へ參るでせう——さうすれば、ジョン親王の企てから大事な股肱を奪はれた事になります。」

「してサタンの王國(地獄の)には、また勇敢な味方が一人加はつた譯です。」とド・ブラシーは言つた。「これと云ふも、皆、聖徒や天使を嘲弄したり、聖物や聖者の像を、あの賤しい郷士共の頭上に投げつ

けるやうに命じたりする事から起るのです。」

「途方もない——御身は愚か者だな、」と寺侍は言つた。「御身の迷信はフロンド・ド・ブーフ殿の不信と孰れ劣らずだ。お二人とも、その信仰若しくは不信に對して理由を擧げる事が出来ずまい。」

「大きなお世話だ、寺侍殿、」とド・ブラシーは答へた、「私の事を言はれる時には、ちとお口を慎まれないものだ。聖母マリアにかけて申すが、私は御身や御身の仲間よりも遙かに基督教徒らしい人間だ。何故と云ふに、ザイオンの最も神聖な寺侍團は、その懐に數多の異端者を養つて居り、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿もその一人だと云ふ専らの評判だからな。」

「そのやうな噂をお氣にかけなさるな、」と寺侍は言つた。「それよりも、この城を保持する事を考へようではありませんか。——御身の方では彼の賤しい郷士共の働きぶりはいかゞでした？」

「まるで悪魔の權化てんげのやうでした、」とド・ブラシーは言つた。「彼等は城壁に群つてどつと押し寄せて來ました、その先頭は確かあの弓術試合で賞を獲た曲者に違ひなかつたやうに思ひます。何故と云ふに、私は彼の角笛と飾帶とを見知つてゐますから。して、これがフィッツァーズおやぢめ老爺奴の得意の計略なんです！ あの圖々しい悪者共を咬そのかして、わし等に刃向はむかはせようとするのだ、若し私が矢の通らぬ甲冑を身に着けてゐなかつたら、彼の曲者はわしが獵時かりときの牡鹿でもあるかのやうに、情容赦なさげようしやもなく七度も狙ひ撃つた事でせう。彼奴は大弓の矢で私の甲冑を處嫌はず狙ひ撃ち、丁度私の骨が鐵で出來てゐるやうに遠慮會釋もなく私の肋骨に打ち當てました——若しスペインの鎖帷子くさりかたびらで出來た下着を體

のに着けてゐなかつたら、私は必ず殺されたこととせう。」

「併し御身は御身の持場もてばを維持なされましたか？」と寺侍は言つた。「わし等の方では外堡を失ひました。」

「それは容易ならぬ損失ですな、」とド・ブラシーは言つた。「曲者共は一層猛烈に城を攻める爲めに、身をかばふ物を見出しませう、そして、十分監視致さぬと、何處か手薄な塔の隅か、乃至は締め忘れた窓を見附けて、其處から攻め入るかもしれませぬ。味方の人數は、隅から隅まで防ぐには餘りに少ない、そして、どちらの方を向いても、丁度祭日の寺の矢場の的のやうに、數多の矢に狙はれる事を味方はみんな嘆いてゐます。フロンド・ブーフ殿は死にかゝつて居られますから、わし等は最早彼の牡牛の頭と無類の強力から援助を期待する事は出来ません。ブリアン殿、御身はどう思召されるか、わし等は、仕方がないから生捕つた捕虜を返して、あの曲者共と和解した方がよくはあるまいかと思ふ？」

「何と仰せらるゝ？」と寺侍は叫んだ。「捕虜を返し、物笑ひや呪ひの種とならうと仰しやるのか……抵抗力のない旅人の一隊を夜襲して、その身柄は奪ひ取つたが、豚飼ひや、道化や、人間の屑どもが率ゐる宿無し浪士の群と戦つて金城を防衛する事も出来ない勇猛な戦士として？ 御身の考へは恥辱の至りだ、モオリス・ド・ブラシー殿！ そのやうな卑劣な不名譽な和解を承諾する位なら、この城の滅亡と共にわしの肉體と屈辱とを埋めた方がましだ。」

「さらば、城壁に歸りませう、」と無造作にド・ブラシーは言つた。「トルコ人にしろ、寺侍にしろ、私程命を輕んじた者は一人もない、けれども今此處にわしの四十許りの勇敢な傭兵隊がゐたならばと思ふのは何も不名譽な事ではあるまい？——お、我が勇敢な槍兵達！ 若し御身達の隊長が今日如何に苦しい立場にゐるかを知つたならば、どんなに速かに私は御身達の槍の林の先頭に私の旗印を見た事だらう！ そして、又これ等の烏合の敵兵等は御身等の矛先にどんなに速かに屈してしまふ事だらう！」

「誰に御身が請ひ願ふにしろ、」と寺侍は言つた、「兎に角現在手許にあるだけの兵士を以て出来るだけの防戦をしようではないか——彼等は主としてフロン・ド・ブーフ殿の幕下であつて、數々の無禮と暴虐の行ひの爲めにイングラント人から憎まれてゐる者共だ。」

「一層妙だ、」とド・ブラシーは言つた。「これ等の荒くれた奴隷達は城外の百姓共の復讐を受けるよりは、むしろ彼等の血潮の最後の一滴迄も防戦するでせう。さらば、起つて防戦に取り掛りませう、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿、そして、生きようと死なうと、モオリス・ド・ブラシーが今日こそ氣高い紳士として振舞ふのをお目にかけよう。」

「城壁へ！」と寺侍は叫んだ。それから彼等二人は城を防ぐ爲めに老巧と勇氣の限りを盡さうと、狭間へ上つて行つた。彼等は直ちに最も危険な場所は已に寄せ手が占領した外壁の向ひ側である事を知つた。城はその外壁から濠に依つて全く隔離されてゐた。寄せ手はその障碍物を乗り越さねば外壁

の向ひ側に當る内側の城門を攻撃する事が不可能であつた。併し寄せ手が今までの策略をそのまま踏襲するものとするれば、多分そこに猛襲を試みることに依つて、防禦軍の配慮の中心をこの點に集め、そしてその他の場所に引き起されるあらゆる油斷を利用する手段を採るやうに努めるであらう、と云ふのは、寺侍とド・ブラシーとの二人の意見であつた。さうした災禍を防ぐ爲めに、彼等の人數では城壁に添うて所々に哨兵を置き、互に連絡を取り、危険の迫つた時には何時でも警告を與へ得るやうにする位が關の山であつた、一方彼等はド・ブラシーが内側の門の防禦を指揮し、寺侍は凡そ二十人程の兵士を豫備隊として率ゐ、突然脅かされるかもしれない他の方向へ何時でも駆けつけられるやうにしようとして相談が纏まつた。外壁を失つた事は尙ほ次のやうな不幸な影響を惹き起した、即ち城壁が非常にも高いにも拘らず、城内の軍勢は前のやうに正確に敵の舉動を見る事が出来なくなつたのである。何故と云ふにまばらに生えた藪が外壁の非常門の直ぐ近くまで延びてゐて、寄せ手は藪に身をかはびながら、而も防禦軍に覺られる事さへもなく、適當と思ふだけの軍勢をその藪の中に忍ばせる事が出来たからである。で、どの方向に襲撃があるか全く不明なので、ド・ブラシーと彼の同僚とはあらゆる偶然に起る事件に對して備へをする必要があつた、そして彼等の部下は、如何に勇敢であるとは言へ、何時でも攻撃し、どんな攻撃方法でも用ゐる敵に圍まれた人々が起し勝ちである精神上の氣遣はしい意氣沮喪を経験しないわけには行かなかつた。

さうしてゐる間に、包圍されて危険に瀕した城主は肉體の苦痛と精神の苦悶とに苛まれつゝ床の上



に横はつてゐた。彼はその迷信的な時代の頑迷者流に、ありふれた策を用ゐて苦悶を免れようとはしなかつた。その頑迷者の大部分はその犯した罪を教會に捧げる進物で贖ひ、やがてこの方法に依つて罪を贖へば、神の寛恕を得ると思つて自分の罪に對する恐怖の念を眠らすのが例であつた。かうして購つた安心が眞實の悔悟に伴ふ心の平和と異つてゐるのは、阿片に依つて得た濁つた昏迷が健康な自然な睡眠と異なるのと同様である。併し、それでも尙ほ目覺めた後悔の苦悶よりは望ましい心の状態である。併しフロン・ド・ブーフは冷酷な吝嗇な人間であつて、而も彼のあらゆる惡徳の中で貪慾が最も著しかつた。それで、彼は實や領地を犠牲にして、赦免や罪障消滅を教會や僧侶から購ふよりは、寧ろ教會や僧侶達を無視して、そんなものゝ赦免や罪障消滅は一文の値打もないとするのをまじだと思つた。彼とは異つた種類の不信者である寺侍がその友を評して、フロン・ド・ブーフは、これ迄ある宗教に對して彼の抱く不信や輕蔑に對して如何なる理由をも擧げる事が出来ない、と言つたのは當つてゐない、何故と云ふに城主フロン・ド・ブーフは教會が餘りに高價にその商品を賣り過ぎる事、即ち教會が賣らうとする精神の自由はエルサレムの長（かの罪人なる聖ポロが羅馬の市民である事に驚いた長）の自由のやうに「大金を以て」のみ買はれるもので、碌なものでないと云ふ事を主張したであらうし、又更に、フロン・ド・ブーフは醫者の費用を支拂ふよりは寧ろ醫藥の效能を否定するのをよいと思つたであらうからである。

併しながら大地と彼のあらゆる財寶とが彼の目の前から迂り落ち、彼の殘忍な胸も、地獄のすり石のやうに冷酷ではあるが、來世の物淋しい暗黒を眺めては、戰慄を覺えないわけにいかない時が今や迫つたのである。彼の身體の熱は彼の焦慮と苦惱とを増した、そして彼の死の床には新たに目醒めた様々の恐怖の情が彼の性質の牢乎として抜くことの出来ない頑強さと、こんがらがつて現はれてゐた——その恐ろしい心の状態は、かの地獄に於てのみ見られるものであつて、そこでは希望のない不満や、悔悟のない怨恨や、現在の苦惱の恐ろしさや、それが止む事も、減ずる事もない不安などがあるのみである。

「あの賣僧共は今何處にゐるのか？」と城主は唸るやうに言つた、「あの氣味の悪い茶番狂言にあんな値段をつけた者は誰だ、——あの跣足のカーメル僧共は何處にゐるのだ、彼奴等は父のフロン・ド・ブーフに聖アンの僧院を建て、貰つたのに、その後繼者の自分から幾ルッドもの牧場と數多の肥沃な野原と圍ひ地とを奪つたのだ——あの貪慾な獵犬共は今何處にゐるのか？——きつとビールを貪り飲んだり、誰か吝嗇な奴の臨終の枕邊で彼奴等のまやかしの手品をやつてゐるのだ。——わしは彼奴等の僧院建設者の後繼者だ——親父に寺を建て、貰つた彼奴等は、わしの魂の爲めに成佛を祈らなければならぬ筈だ——わしは——彼奴等は實に恩知らずの曲者共だが！——彼奴等はわしが野原の宿なし犬のやうに懺悔も聞かれず聖餐の禮も受けずに死んで行くのを打ち捨てゝゐるのだ！——寺侍に此方へ來いと言へ——彼奴は僧侶だ、何かの役に立つかもしれない——いや、いや！ 天をも地獄をも輕んずるブリアン・ド・ボア・ギルベールなどに懺悔する位なら惡魔に懺悔した方がましだ。——わしは老人達が祈禱の話をするのを聞いたことがある——彼等自身の口でする祈禱の話——賈坊主に媚びた

り、賄賂を使つたりする必要はないと云ふが——併しわたしには——わたしにはよう出来ない！」  
 その時とぎれ／＼に鋭い聲で彼の床の直ぐ側で叫ぶ者があつた——「レジナル・フロン・ド・ブーフ  
 が生きてゐて、自分に成し得ない事があると言ふのか？」

フロン・ド・ブーフは良心の悩みと神経の興奮の爲めに、彼の獨語の妙に中斷した中に、その當時の  
 迷信の信ずるところに據れば、つまり死に瀕した人々の床を圍み、彼等の考へを迷はし、彼等の永遠  
 の幸福に關する臆想を妨げようとする悪魔の聲を聞いたのである。彼ははげしく身を震はして縮こま  
 つた。併し直ぐにいつもの決斷力を奮ひ起して叫んだ、「其處にゐるのは誰だ？——俺の言葉を夜鴉の  
 やうな調子で眞似ようとするのは一體何物だ？——寢床の前へ出て来て、よく姿を見せろ。」

「わしは御身の悪靈だ、レジナル・フロン・ド・ブーフよ、」とその聲は答へた。

「若しお前が本當に悪魔であるなら、お前の姿をはつきり見せてくれ、」と死に瀕した領主は答へた。  
 俺がお前を見てひるむなぞと思ふな！ 永遠の牢獄にかけて言ふが、わしがこの世の危険と戦つたや  
 うに、今身の周りを飛び廻るこの恐怖と格闘する事が出来さへしたら、俺がその争ひから尻込みした  
 などとは、天國にも地獄にも言はせはしないものを！」

「貴様の罪を考へよ、レジナル・フロン・ド・ブーフ——貴様の反逆を、掠奪を、虐殺を！——あの放  
 蕩無頼のジョン親王を唆かして白髮の父君に背かしたものは誰だ——彼の寛大な兄上に背かしたの  
 は誰だ？」

「お前が悪魔であらうとも、僧侶であらうとも、若しくは何であらうとも、」とフロン・ド・ブーフは答  
 へた、「お前は眞赤な嘘吐きだ！——俺は何もジョン親王を背かせはしない——俺だけではない——五  
 十人の騎士や領主がしたのだ、中部地方の華ともいふべき人達だ——あの人達程立派な槍兵は嘗てな  
 かつた——五十人でした罪を俺一人で負はねばならぬのか？——偽りの悪魔め、俺はお前を物とも思  
 はないぞ！ 出て失せろ、そして二度と再び俺の寢床に近寄るな——若しもお前が人間なら、俺を靜  
 かに死なしておくれ——若し又悪魔なら、お前の来る時には未だ早い。」

「靜かには死なせはしない、」とその聲は應じた。「たとひお前が死んでもお前の犯した人殺しを想ひ  
 起させてやらう——この城に弔した呻吟の聲を——城の床板を彩つた血潮のことを！」

「お前はそんなけちな悪意で俺の心を動かすことは出来ないぞ、」フロン・ド・ブーフは物凄く作り笑  
 ひを浮べて答へた、「あの不信者の猶太人——俺がしたやうに彼奴を片つける事は神様も許される行ひ  
 だ。さもなければ何故にサラセン人の血潮にその手を浸す人々が神聖とせらるゝのか？——俺が斬り殺  
 したサクソンの豚共、彼奴等は我が國の、いや我が血筋の、いや我が君様の仇敵だ。——ハハハハッ！  
 俺の鎧には斬り込む裂け目なんぞありやしないよ——おまへは逃げたのか？——黙つたな？」

「いや、穢らはしい親殺しめ！」と例の聲は答へた、「お前の親父の事を思ひ出せ！——親父の死さ  
 まを思ひ出せ！——あの饗宴の席の事を思ひ出せ、父親の鮮血の而も息子の手で、漲り溢らされたそ  
 の席を！」

「あゝ！」長い沈黙の後に領主は答へた、「お前がそれを知つてゐる以上は、お前は正しく悪の王様だ、そして坊主共が言ふ通り全智全能だ！——俺獨りの胸と、もう一人の胸の中に秘めて置いたと思つたあの秘密——あの妖婦、俺の罪の分擔者。——行け、俺を獨りにしてくれ、悪魔め！して、あのサクソンの鬼婆ウルリカを探せ、俺と彼奴とだけでみた事柄をお前に告げる事が出来るのは、彼奴だけだ。——死人の傷を洗ひ、曲つた死骸を延ばし、その死人に時が来て、自然に死んだ人のやうに見せかけた彼奴の處へ行け——彼奴の處へ行け——彼奴は俺を誘惑した女だ、この所行のけがれた煽動者だ、それにもましてけがれた報賞者だ——彼奴にも俺と同様、この地獄に行く前の苛責を嘗めさせろ！」

「あの女は既にそれを味つてゐる、」フロン・ド・ブーフの寢床の前に進み出ながらウルリカが言つた、「あの女はこの悔悟の盃をずつと前から飲んで來たが、お前がそれを引き受けるのをみたら、その苦さが幾らか甘くなつたぞ。——そんなに齒を喰ひしぼるな、フロン・ド・ブーフ——眼をぐる／＼廻すな——手を振りしぼるな、威すやうな身振りでその手を俺の方へ振るな！——お前のそのフロン・ド・ブーフといふ姓を、初めて獲てやつたお前の名高い先祖の手のやうに、唯一撃で山の牡牛の頭蓋骨を打ち割ることの出來たその手も、今は俺の手と同様、弱り果てゝ力なくなつたわい！」

「穢らはしい人殺し婆め！」と、フロン・ド・ブーフは答へた。「忌々しい梟め！ではお前は自分でその手傳をして城の没落するのを見て喜びたくてやつて來たのだな？」

「さうだ、レジナル・フロン・ド・ブーフ、」と彼女は答へた、「それはウルリカだ！——殺されたトーキル・ウルフガンガーの娘だ！——殺された息子達の姉だ！——お前とお前の父の家に、わしの父と、兄弟と、家名と、名聲と、すべてフロン・ド・ブーフの名に依つて失つた一切を要求するのはウルリカだ！——わしの蒙つた害悪を考へてみるがいゝ、フロン・ド・ブーフ、そしてわしが本當を言つてゐないかどうか答へるがいゝ。今まではお前がわしの悪靈であつた、これからはわしがお前の悪靈にならう——わしは死の間際までお前につき纏ふぞ。」

「憎らしい悍婆め！」とフロン・ド・ブーフは答へた、「その瞬間をお前なぞに見せはしない——おーい！——ヂャイルズ、クレメント、それからユースタス！——セント・モアとステイヴン！——この忌々しい鬼婆を捕へろ、そして狭間から眞逆様に抛り投げろ——彼奴は俺達をサクソン人に裏切つたのだ。」

「おーい！——セント・モア！——クレメント！——不實の畜生ども、何處でぐ／＼してゐるのだ？」  
「彼奴等をもう一度呼んで御覽、勇敢な領主さん、」物凄く嘲弄の笑を浮べて妖婆は言つた、「お前の手下を身の周りに呼び集めるがいゝ、そしてぶら／＼してゐる奴等を鞭打つなり、牢屋へぶち込むなりするがいゝ——だが、覺えてお置き、大將、」突然調子を變へて彼女は續けた、「お前は彼奴等の手から答も、助けも、服従も獲られやしない。——あの恐ろしい物音を聞くがいゝ。」その時、再び始められた攻撃と防禦との雄叫びが城の狭間から物凄く響いて來たからである。「あの鯨波に、お前の家は没落して行くのだ——フロン・ド・ブーフの威力の、血で塗り固められた建物はその礎からぐらついて

来た、而も彼奴が一番賤しんでゐた仇敵の眼の前で！——サクソン人が、レジナルド！——賤しめられてゐたサクソン人が、お前の城壁を攻撃してゐるのだぞ！——お前は何か故疲れ果てた牝鹿のやうに、此處に横はつてゐるのだ、サクソン人がお前の城塞へ押し寄せて来たのに。」

「神よ、悪魔よ！」と傷ついた騎士は叫んだ。「お、亂闘の眞只中に歩いて行き、俺の名に相應はしい死方をする唯一瞬時の力さへあつたらなあ！」

「そんな事を考へなさんな、勇敢な戦士さん！」と彼女は答へた、「お前には決して武士としての死方をさせてはやらない、お前は百姓達が周りの蔽ひ物に火をかけた時、洞穴の中にある狐のやうに死なしてやるんだ。」

「憎々しい妖婆め！ お前は嘘つきだ、」とフロン・ド・ブーフは叫んだ。「俺の家來達は勇敢に戦ひ、

——俺の城壁は高くて頑丈だ、——俺の戦友達はサクソンの全軍をも恐れはしない、假令彼奴等がヘンジスト(五世紀の頃英國のケントに王国を建てたサクソンの一酋長、ホーサはその弟)やホーサに指揮されてゐたとて！——寺侍と傭兵との鬨の聲が戰場の上に空高く立ち昇るのが聞える！——して、俺の名譽にかけて、わし等が防戦の喜びの爲めに、輝く狼煙を揚げる時には、お前は體も骨も残らず焼いてしまつてやるぞ。俺は生き残つて、お前が地上の火から地獄の業火へ飛び込んでゆくのを見るだらう、その地獄は未だ嘗てお前のやうな極悪非道な悪魔を送つて寄越した事はないわい！」

ウルリカは答へた、「證據を見る迄さう思つてゐるが、いや、いや！」彼女はふと口を噤んで

からまた言葉を續けた、「今にもお前の運命を知らせてやるぞ、それはお前の力も、權力も、勇氣も、避ける事の出来ない運命だ、それはこの纖弱い腕で、お前の爲めに用意したものはあるが。——それからもう眞黒に折り重つてこの室に渦巻いてゐるこの燻つてゐる息詰るやうな煙に氣が附いたか？——お前は唯お前の張り裂けようとする眼が眩んだ爲めだと思つたのか——お前の息詰る呼吸のつらさの爲めだと思つたのか？——いや、いや、フロン・ド・ブーフ、外の原因があるのだぞ——お前はこの室の下にある薪の倉庫を覚えてゐるか？」

「あまめ！」と彼は憤怒の餘り叫んだ、「うぬがそれへ火をつけやがつたな？——たしかに！ うぬがつけた！ 城は今焔に包まれてゐる！」

「少くとも、焔は素早く立ち昇つて行く、恐ろしい沈着さを以てウルリカは言つた。「そしてこれから直ぐ寄せ手に、火を消さうとする敵に向つて、今のうちに、うんと攻め立てるといふ警告の合圖をしてやる。——ではさやうなら、フロン・ド・ブーフ！——ミスター、スコギユラ、ザネボック、昔のサクソンの鬼神達——僧侶達の言葉では悪魔達よ——どうぞ、お前のいまはの床に慰め人の代役を勤め給はんことを！ その役目をウルリカは今、辭退するのだ！——だが、若しお前が、ウルリカも自分と同じ暗い岸邊に行くのだといふことを知つて、慰めになるのなら、さう思ふがい。それは、お前の罪の同伴者であつたやうに、天罰の同伴者として行くのだ、——さやうなら、親殺しよ、永久におさらばだ！——この圓天井の一つ／＼の石が舌を持つて、その親殺しの汚名を、お前の耳に響かせてく

れるやうに——

さう言ひながら、彼女は部屋を立ち去つた。そして、フロン・ド・ブーフは、彼女が扉に錠をかけた、而も二重錠をかけた時に、重々しい鍵の響を聞くことが出来た。かうして彼は逃亡の望みの最も微かな機會さへ絶ち切られたのである。苦悶の極點に達した彼は自分の家來と同僚とを呼んだ——「ステイーウンとセント・モーアー——クレメントとチャイルズ——俺は此處で助ける者もなく焼け死んでしまふ——助けに来てくれ——助けに！ 勇敢なボア・ギルベール、剛膽なド・ブラシー——呼んでゐるのはフロン・ド・ブーフだ——お前達の主人だぞ、この裏切者の従者ども——お前達の友人だぞ——お前達の戦友だぞ、お前達、嘘つきの眞實のない騎士ども——叛逆者に當然なあらゆる呪咀がお前達の卑怯な頭の上に下るぞ、お前達は俺がこんなにみじめに死んでゆくのを、捨て、置かうとするのか——あいつ等は俺の言ふ事を聞いてはくれない——あいつらは俺の言ふ事が聞えないのだ——俺の聲は戦ひのざわめきのうちに紛れてしまふのだ。——煙は益々濃く渦巻いて来る——火はもう下の床に燃え移つた——お、天の空氣を唯一息だけでも吸ひたいなあ、たとへその代りに卽座に死ぬるにしても——そして、絶望の爲めに狂亂して、この哀れな者は時としては戦士達の叫びに聲を合せたり、時としては自分に、人類に、そして天國に迄も呪咀の言葉を浴せかけた。——「紅の焰が、濃い煙の中から仄めいて来るわい！」と彼は叫んだ、「悪魔が得意の旗印を掲げて、俺の方へ攻め寄せてくる、——忌はしい精靈よ、退け——俺は友達と一緒にでなくてはお前のお供はしないぞ——この

城壁を護つてゐるものは、みんなお前のものだ——フロン・ド・ブーフだけが選び出されて、唯獨り行くと思ふのか？——馬鹿——あの不信な寺侍も——放蕩無頼なド・ブラシーも——あの穢らしい人殺し賣女のウルリカも——俺の陰謀を手傳つた人々も——俺の捕虜になつたサクソンの犬ども、呪はれた猶太人ども——今迄に没落の道を辿つた立派な仲間の者ども——みんな俺の後について来るんだぞ——ハハハハッ——そして彼は圓天井が響き返す迄、狂氣じみた大きな聲で笑つた。「そこで笑ふのは誰だ！」と、急に別な氣分に變つてフロン・ド・ブーフは叫んだ、何故と言ふに戦ひの騒ぎも、彼の狂氣じみた笑ひ聲の反響が、彼の耳に戻つて来るのを妨げはしなかつたから——「そこで笑ふのは誰だ？——ウルリカ、お前か？——言へ、鬼婆め、言つたら俺はお前を許してやるぞ——何故つて唯お前と地獄の惡魔だけがこんな時に笑ふ事が出来るからだ。退け！ 退け！」

が併し、この瀆神者で親殺しである者の死の床の描寫をこれ以上進めることは、神慮に背く結果になるであらう。

(三十一)

も一度崩れ口へ、味方の者共、も一度、  
さもなくばわがイングラント人の死骸で  
城壁を埋めてくれい、

こら、立派な郷士等よ、

汝等の手足はイングランドで造られたものだ、今こそ

牧場で養つた元氣を出して——

さすがは育ち甲斐があるなど

われらに證言させる。

(「ヘンリ五世」)

セドリックは、ウルリカの言葉をさほど信じてもゐなかつたが、その約束を黒装束の騎士とロックスライとに傳へることを忘れなかつた。いざと云ふ時には彼等の進入を容易にすることが出来るやうな味方が城中にゐるのを知つて、彼等は大いに喜んだ。そして、彼等は残酷なフロン・ド・ブーフの手にある捕虜たちを解放する唯一の手段として、如何なる不利な事情があらうとも、一たび強襲を試みなければならぬといふセドリックの意見に直ちに同意した。

「アルフレッド大王の血筋(ローエナ)が危くされようとしてゐるのだ、」とセドリックは言つた。

「高貴な姫君の名譽は風前の燈火だ、」と黒装束の騎士は言つた。

「そして又、私の飾帯にある聖クリストファー様の御像(みざう)にかけて、」と赤心を籠めて郷士は言つた、

「あの風の静かな味勝なワンスの安全の爲めだけでも、私はどんな危険を冒さうと、彼の頭の毛一筋で

も傷つけさせは致しません。」

「わしもその所存だ、」と和尚は言つた。「はて皆様！ わしは堅く信じてゐますが、幫間は——と言つても、その仲間の間でも相當幅をきかし、その技(わざ)にも長じ、一杯の酒に一片の燻肉と同じ位ゐる風味を添へることの出来る幫間の事を言ふのだが——實際、そのやうな幫間には、彼の爲めに祈りを捧げ、危難の際には彼の爲めに戦ふやうな賢い僧侶に不自由さしてはなりません、わしは彼の爲めに彌撒(みさ)を唱へたり、槍を振つたりするつもりだ。」

さう言ひながら彼は、恰も牧童がその軽い杖を振り廻すやうに、重い戟(ほこ)を頭の上に振りまはした。

「その通りだ、和尚様、」と黒装束の騎士は言つた。「眞實だ、聖ダンスタン様が御自身で言はれたやうに眞實だ。——さて、ロックスライ殿、セドリック殿がこんどの攻撃の指揮をなさるのが、よろしくはないかな？」

「なか／＼もつて、」とセドリックは答へた。「この不幸な土地にノルマン人の建てましたこの暴虐の棲家(すまか)を、どうして攻め取るか、又は防ぐか、私はまだ一度も研究したことがございません。私は先頭の一人となつて戦ふでございます。でも、私が戦略に於て、又城砦の攻撃に於て、あまり物慣れぬ兵士であることは、各々方がよく御存じの通りでございます。」

「セドリック殿がさう申さるゝ上は、」とロックスライが言つた、「私は喜んで弓兵隊の指揮を身に引き受けるでございます。若しも城内の兵士どもが城壁の上に現はれてもクリスマスの豚の燻製(ちんち)に丁子

香をふりかけるやうに、其奴等に味方の矢を射かけることが出来ませんでしたら、私は自分のあの寄宿所の木に吊り下げられても苦しくはございませぬ。」

「よくも言はれた、勇敢な郷士殿、」と黒装束の騎士は言った。「若しも私がこの戦に指揮をする資格があると思し召されるなら、そして又、これ等の勇敢な將卒の間に眞の騎士——と私自身を呼んでも差支へあるまいと考へるが——のあとに進んでついて来るだけの人があるなら、私は自分の経験から學び得た限りの祕術を盡して、この城壁の攻撃の指圖を致さう。」

指揮者の役割がかう云ふ風に定まつたので、彼等は先づ第一回の攻撃を開始した。その結果は讀者が既に知つてゐる通りである。

外堡を奪ひ取つた時、黒装束の騎士はその吉報をロックスリイに傳へ、同時に、敵がその兵力を集中して突然進出し、一度失つた外堡を再び奪ひ還すことのないやうに、城を嚴重に監視することを彼に要求した。これこそ騎士の専ら避けたいと望んでゐたことである。と云ふのは、彼の率ゐる兵士達は訓練のない速成の志願兵達で、武装も不完全なら訓練も行き届いてゐないといふ風だつたので、防禦攻撃兩方の武器を十分に備へてゐる老練なノルマンの兵士達——寄せ手の熱誠と元氣とに對抗して、完全な訓練と武器の不斷の使用から起るあらゆる自信を抱いてゐたその兵士達——の突然の攻撃に會つては、非常な不利に陥らなければならぬといふことを彼は知つてゐたからである。

濠を渡らうとしたのである。これは相當の時間を要する仕事であつたけれども、また一方ではウルリカをして彼等の爲めに敵を牽制する計畫——それは何であるかは分らないが——を實行せしめる餘裕を與へたので、首領達はそれほど遺憾にも思はなかつた。

併し筏が出来上ると、「今はもう一刻も猶豫すべきではない、」と黒装束の騎士は言った。「日は段々西に沈んで行く——併し、わしには責任のある仕事があつて、この上一日も各々と留まることは出来かねるのだ。尚ほその上、急いで目的を果さなければ、騎兵の一隊がヨークから来て我々を襲撃する虞れがある。そこで、御身等のうちの誰か、ロックスリイのところに行つて、城の本門へ矢を一齊に浴せかけ、恰もそこを攻撃しようとするかのやうに進み出よと傳へて欲しいのだ。して御身達、眞のイングランド魂を持つ者達よ、わしに加勢して、彼方の城門が開かれるや否や濠の上に筏を眞直ぐに渡す用意をせよ。わしのあとに勇ましく續いてくれ、そして城の表壁の非常口を打ち破る手助けをせよ。この働きを好まぬ者達、若しくは十分その武装の出来て居らぬ者達は外堡の頂きに登り、弓弦を耳の高さまで引き絞<sup>しぼ</sup>り、城壁に登ると見える者は、如何なる者も御身等の矢で打ち滅すやうに努められよ——セドリック殿、貴殿は残りの者達の指圖をお引き受け下さるか？」

「とんだこと、ヘリワード(キリアム一世の代のイ  
ングランドの愛國者)の靈にかけて！」とセドリックは言った。「指圖はわしには出来ないが、行けと仰しやる處には、何處でもいゝ眞先に行きます。若しそれが嘘だつたら、子孫々、死んだ後までもわしを呪はれるとも苦しくはござらぬ——戦こそわしの持ち前だ、戦の先陣

に立つ事こそ、わしに適はしいことなのです。」

「しかしながら、セドリック殿、よくお考へ下さい！」と騎士は言った、「貴方は鎖帷子も胸甲も持たず、その軽い兜と、小さい丸楯と劍との他には、何もものないではございませんか。」

「却つて好都合です！」とセドリックは答へた、「その爲め一層軽々と城壁に攀ぢ上ることが出来る。して、騎士殿、わしの自慢をお許し下さい、わしは今日サクソン人の裸の胸がノルマン人の胸甲と同様、大膽に戦場に曝されるのを御覽に入れませう。」

「では、どうぞ、」と騎士は言った、「扉を開け放つて、浮橋をお掛け下さい。」

外堡の内側の壁から濠に通じ、且つ城の表壁の非常口と相對する位置にある小門が今や突然開かれた。それから假橋がどつと投げ出されるや、やがて水上にその影が閃いた。と、それが城と外堡との間に横はり、二人の人が肩を並べて濠を渡ることが出来る不安定な通路となつた。不意を襲ふことの大切なことを十分知つてゐる黒裝束の騎士は、セドリックをすぐ後に従へ、身を躍らせて橋に乗り、對岸に達した。こゝで彼は斧を揮つて城門を打ち碎き始めた。彼は一部分敵の放つた矢や石を以前の跳橋のあとによつて防いだ、この橋は寺侍が外堡から退却する時、その跳橋を上げる分銅を小門の上部につけたまゝ、彼が破壊したのである。黒裝束の騎士の従者達は何もさうした身を護る物を持たなかつた。二人は弩の矢で直ちに射殺され、更に二人は濠の中へ打ち倒され、他の者達は外堡の中へ引き返した。

セドリックと黒裝束の騎士との位地は今や全く危険であつた。そして外堡内の弓兵達の不斷の援助がなかつたならば、尙ほ一層危険に陥つたであらう。弓兵達は狭間の上に絶えず、矢の雨を降らせ、其處に乗つてゐる敵兵の注意を外らし、自分等の二人の首領に矢弾の嵐を免れしめたのである。さもなかつたなら二人はその嵐の下に打ち倒されて了つたに違ひない。併し彼等の状態はとても危険で、刻一刻とその度は高まつて行つた。

「意氣地なしども！」とド・ブラシーは周囲の部下に叫んだ。「貴様達はあの二匹の犬を城壁の下から追ひ拂ふことも出来ないで、それで弩兵と云へるか？——どうにも出来ないのなら、狭間から笠石を抛り投げろ——鶴嘴と槓杵を握れ、そしてあの大きな笠石を崩し落せ、」と言ひながら、胸壁から突き出てゐる重い、彫刻のしてある石を指さした。

この瞬間に、寄せ手はウルリカからセドリックに合圖して置いた塔の方角に赤い旗の翻へるのを認めた。剛膽な郷士ロックスリイが一番先にそれに氣附いた、彼は攻撃の進行を見たくて堪らず、外堡へ急いで行くところであつたので。

「起てッ！」彼は叫んだ、「起て、イングランドの爲めに！——攻めかゝれ、勇敢な郷士達！——何故お前達は騎士殿とセドリック殿とが、唯二人進むのをぼんやり眺めてゐるのだ？——突き進め——氣狂ひ和尚、お前が念珠禱の爲めに戦ふことが出来るのを示せ——進め、勇敢な郷士達！——城は我等の物だ、城内に味方がゐるぞ——あの旗を見る、あれは約束の合圖だ——トキルストーンは我々のも



のだぞ！——名譽を思へ、戦利品を思へ——もう一息だ、やがて城は我等のものだ。」  
 さう言ふや、彼はその強弓を引き絞つて、ド・ブラシーの命令で、狭間の一つから岩石を外して、セドリックと黒装束の騎士の頭上に突き落さうとしてゐた一人の武士の胸には、つしと一本の箭を射込んだ。第の兵士がその瀕死の兵士の手から鐵挺をもぎとり、それで笠石をこね上げて外さうとした途端に、彼は頭に一本矢を射貫かれて、どうと狭間から濠の中へ轉げ落ちた。兵卒達は、縮み上つてしまつた、何故と云ふにどんな甲冑もこの怖るべき射手にかゝつては何の效力もないやうに思はれたからである。

「貴様達は尻込みするのか、卑怯者！」とド・ブラシーは叫んだ。「やい！——その槓杆を俺に渡せ。」  
 と言つて、それを引つたくるが早いか、彼はゆるめられた笠石を再び動かした。それは可なりの重さがあつて、若し投げ落されたら、先頭の二人の攻撃者を庇つてゐた跳橋の残りを破壊するばかりか、二人が渡つた粗末な板橋をも打ち沈めたであらう。すべての人は危険を覺つた、そして最も大膽な者も、あの豪膽な和尚自身さへも筏の上に足を踏み出すことを控へた。三度ロックスリイはその矢をド・ブラシーに放つた、そして三度共矢は騎士の堅固な甲冑の爲めに弾き返された。

「忌々しいスペイン銅の甲だ！」とロックスリイは言つた。「イングラントの鍛冶屋が鍛へたのだつたら、丁度絹でも貫くかのやうに、この矢が透つたであらうものを。」彼はそれから嘯鳴り出した、「同僚達！ 友人達！ セドリック殿！ お引き返しなさい、そして城の倒るゝにお任せなさい。」

彼の警告の聲は聞かれなかつた、何故なれば、黒装束の騎士が城門に加へる攻撃が引き起す物音は、二十挺の喇叭の音も打ち消したであらうほど大きかつたからである。忠實なガースはセドリックにその危険な運命を告げ、彼と運命を共にする爲めに板橋の上に躍り出た。然し若し寺侍の聲がド・ブラシーの耳もと近くに聞えなかつたなら、ガースの警告は既に遅過ぎたであらう、巨大な笠石は既にゆらゆらとよるめいたし、矢張り笠石をこね上げてゐたド・ブラシーはその目的を達したであらう。けれども、實際は寺侍が次のやうに言ふ言葉がド・ブラシーの耳もとに聞えた爲めにさうは運ばれなかつた——

「萬事休すだ、ド・ブラシー殿、城は燃えてゐます。」

「何を言はれるのだ、氣でも狂はれたのか、」と騎士は答へた。

「西側はすつかり足早な焰に包まれてゐます。私は消防に努めましたが無駄でした。」

彼の性格の根柢となつてゐる嚴格な冷靜さをもつて、ブリアンド・ボア・ギルベールはこの恐ろしい報告を傳へた。併し聞いて驚いた同僚は、寺侍と同じやうに、冷靜にその報告を受取ることは出来なかつた。

「天に在す聖者達よ！」ド・ブラシーは言つた。「いかゞ致したらいゝでせう？ 私はリモージュの聖ニコラス様に純金の燭臺を獻ずることを誓ひます。」——

「誓ひなぞはお止めなさい、」と寺侍は言つた、「まあ私の言ふことをお聞きなさい。突撃と見せかけで御身の部下を進めるのだ。そして城門を開けるのだ——かの浮橋には唯二人しかるません、彼奴等

を濠の中へ投げ込んで、外堡へ進撃するのだ。私は正門から撃つて出て、外堡を外側から攻撃する考へだ。そして若し私達はその位置を取り返すことが出来たなら、援兵の来るまで、或はせめて彼等が相當の餘裕を私達に與へるまで、確かに防戦することが出来るでせう。」

「よくも思ひつかれた、」とド・ブラシーは言つた。「では、私は私の役目を勤めませう、——寺侍殿、貴殿はよもや私をあやまりは致されまいな？」

「唇齒の間柄、決してあやまりは致さぬ！」と、ボア・ギルベールは言つた。「けれども、お急ぎなさい、必ず！」

ド・ブラシーは急いで部下を呼び集め、そして城門へ押し寄せ、時をおかず、門を開かせた。併し、その門が開くか開かないかに、黒装束の騎士の怪力は、ド・ブラシーとその部下を物ともせず城内へ押し切つて入つた。先頭に進んだ二人は立ちどころに倒れた、そして他の者達は退かすまいとする指揮者の努力にも拘らず逃げ足になつた。

「この犬共！」とド・ブラシーは叫んだ、「貴様達はたつた二人の人間に我々の唯一の安全への道を奪はせるのか？」

「あれは悪魔だ！」眞黒な敵の打撃に尻込しながら、一人の古參の武士が言つた。

「たとひ彼が悪魔であらうとも、」とド・ブラシーは答へた、「貴様達は彼奴から逃れて地獄の淵へ跳び込まうとするのか？——城は我等の背後に燃えてゐる、卑怯者共！——絶望も貴様達に勇氣を與へな

いのか、でなきや俺を進ませろ！ 俺が自分でこの勇士と雌雄を決しよう。」

ド・ブラシーはその日、あの恐ろしい内亂時代に贏ち得た名聲を、立派に且つ雄々しく保持した。城門から入ると圓天井の通路がある、その中でこの二人の怖るべき勇士は今や一騎打をしたのである、彼等が互に交はす猛烈な打撃はこの通路を鳴りどよめかした、ド・ブラシーは彼の劍をもつて、黒装束の騎士は重い斧をもつて戦つた。遂にノルマン人が一撃を受けた、それは彼の楯によつて、幾分力が弱められた、何故と云ふに、若しさうでなかつたらド・ブラシーの手足は再び動かなくなつたであらう、といつてもその打撃は怖ろしい勢ひで彼の兜に降つたので、彼は敷石の床の上に大の字なりに打ち倒れたのである。

「降參せい、ド・ブラシー、」黒装束の勇士は、彼の上に身を屈めて、彼の兜の鏑に、騎士が敵に止めを刺す時に用ゐる怖ろしい短劍を擬しながら言つた、(そしてその劍は慈悲の短劍と呼ばれてゐた、)——「助かるにせよ助からぬにせよ、降參せい、モオリス・ド・ブラシー、さもないと御身は忽ち死骸とならうぞ。」

ド・ブラシーは幽かな聲で答へた。「私は名の知れない相手に降服はしない。貴殿の名を名乗られよ、さもなければ存分に私を處理なされよ——モオリス・ド・ブラシーは名もない雑兵の手に捕はれたと言はれたくはない。」

黒装束の騎士は何事かを敗北者の耳に囁いた。

「助かるにせよ助からないにせよ、私は眞の捕虜として、御身に降服しよう、」と彼の厳格な斷乎たる頑強さの調子を、澁々ながら深い服従のそれに代へて、このノルマン人は答へた。

「外堡の處へ行け、」命令するやうな調子で、勝利者は言つた、「そしてそこで私の次の命令を待て。」  
「けれども先づ、私の言ふことをお聞き下さい、」とド・ブラシーは言つた、「それは御身にとつても知る必要のあることだ。アイヴンホーのキルフレッドは負傷して捕虜となつてゐる、今直ぐ助け出さないと、燃えさかる城の中で焼け死ぬだらう。」

「アイヴンホーのキルフレッドが！」と黒装束の騎士は叫んだ——「捕虜、そして焼け死ぬ！——若し彼の頭の毛一筋でも焦すやうなことがあつたら城中の者總ての命をもつて、その償ひをしてくれるぞ——私を彼の部屋へ案内しろ。」

「あそこの廻り階段をお登りなさい、」とド・ブラシーは言つた。すると彼の部屋に參られます——私の案内を受け納れて下さいますか？」と素直な聲で、彼は付け加へた。

「いや、外堡へ行け、そこで私の命令を待て。私は御身を信用せぬ、ド・ブラシー。」

この果し合ひとその後でこの短い會話が取り交はされてゐる間に、セドリックは、一隊の兵士の先頭に立つて、城門が開かれるのを見るや否や橋を押し渡り、意氣沮喪して絶望してゐるド・ブラシーの家來どもを逐ひ退けて突き進んだ。その中で彼の和尙が特に際立つて見えた。そのうちには助命を乞ふ者もあれば、空しく抵抗を試みる者もあつた。が大部分の者は城の中庭の方へ逃げた。ド・ブラシーは

地面から身を起して、物悲しさうな眼付で彼の征服者の方をちらと見た。「彼は私を信用しない、」と彼は繰り返した。「併し私はこれ迄彼の信頼に値しただらうか？」彼はそれから劍を床から拾ひ上げ、服従の印として兜を脱ぎ、そして、外堡の方へ行く途中で出會つたロックスライに劍を渡した。

火の手が増し加はるにつれて、その兆候はやがて、アイヴンホーが猶太女レベッカの看護を受けてゐる部屋の中にも現はれるやうになつた。彼はその前から戦の物音によつて短い睡眠を破られてゐた。そして、彼の熱心な頼みによつて、攻撃の成行を見まもつて、彼に報告する爲めに再び窓際に立つた彼の附添人は、くすぶる、息詰るやうな煙の増して來るにつれて、しばらくの間は、看病も報告も、どちらの役目も果すことが出来なかつた。終に部屋の中に渦巻き込んだ煙の雲や——戦の響にも紛れなく聞える水を求める叫びは、彼等をして新しい危険の近づいたことを感ぜしめた。

「城が燃えてゐますわ、」とレベッカは言つた。「燃えてゐますわ！——どうしたら助かることが出来ませう？」

「お逃げ、レベッカ、わたしには關はずお逃げ、」とアイヴンホーは言つた。「どんな人力もわしを救けることは出来ないのだから。」

「私は逃げはいたしません、」とレベッカは言つた、「生きるも死ぬるも、私達は共にいたさせう——でも、神様！——私のお父様、私のお父様——お父様の運命はどうなるのでせう！」

この瞬間に部屋の扉がさつと開いて、寺侍が現はれた。——見るも物凄しい姿である、何故といふに

彼の黄金色の甲冑は破れて、血に塗れ、そして兜の前立は一部分は撈ぎ取られ、一部分は焼かれてゐた。「とうとうお前を見附けたぞ、」と彼はレベッカに言った。「お前と喜びも悲しみも共にせうとの約束を、わしが違へぬと云ふことをお前に證明してみせよう——身の安全を計るには唯一條の道しかない、わしはそれをお前に知らさうと思つて、數多の危険を冒してわざとこゝまで來たのだ——立て、そして直ぐわしのあとについて來い。」

レベッカは答へた——「一人ではついては参りません。若しあなたが女からお生れになつたのなら——若しあなたが心に露程の慈悲の念があたりなら——若しあなたの心があなたの鎧の胸板のやうに堅くないのなら——私の年老つた父をお助け下さい、——この傷ついた騎士様をお助け下さい。」

「騎士だつて、」と持ち前の冷靜さをもつて寺侍は答へた、「レベッカ、騎士はその運命を逃れることは出來ない、たとひそれが劍の形で來ようと、炎の形で來ようと——また猶太人などが何處でどんな風にその運命に遭はうと、さやうなことに頓着するものはあるまい。」

「狂氣武士、」とレベッカは言つた、「お前なんかに助けて貰ふよりは、火焰の中で死んだ方が餘程ましだ！」

「こんどはお前の自由にはさせないのだ、レベッカ——お前は一度は俺を欺いたが、決して二度とその手には乗らないぞ。」

さう言つて、彼は怯える少女に掴みかゝつた。彼女はけたまほしい叫び聲をあげた。彼はそんな叫

び聲には頓着もせず、又アイヴンホーが彼に浴せる脅迫や挑戦の言葉などには耳も假さずに、レベッカを兩手に抱へて部屋の外に連れ出した。

「寺の犬——教團の恥さらしめ——その少女を離せ！ ポア・ギルベールの反逆者、このアイヴンホーが貴様に命ずるのだ！——卑怯者め、俺はきつと貴様の心臓の血を残らず流してやるぞ。」

「御身が叫ばれなかつたなら、」とこの時、部屋に入つて來た黒装束の騎士が言つた、「御身を見附けることも出來なかつたであらう、キルフレッド殿。」

「若し貴方が眞の騎士でおありなら、」とキルフレッドは言つた、「私の事などはどうでもよい——あの強奪者の後を追ひかけて下さい——それからローエナ姫をお助け下さい——セドリック殿の身を守つて下さい。」

「いづれ追々には、」柳錠紋の騎士は答へた、「が先づ御身を救ふのが第一だ。」

そしてアイヴンホーを引き抱へて、寺侍がレベッカを運び去つたと同様、樂々と彼を運び出して、城門まで行き、そこでその重荷を二人の郷士の看護に委ねて、彼は再び他の捕虜の救助に手傳ふ爲めに城内へ駆け戻つた。

一つの櫓は今や眞赤な焰に包まれ、窓や矢間から物凄い焰を吐き出してゐた。併し他の場所では、城壁の非常な厚さと部屋々々の圓天井とが、火焰の暴威をせきとめて、人間の怒りが周圍の何處の猛火も及ばぬ程の勢ひで、なほも凱歌を奏してゐた。何故なら寄せ手は城の防禦軍を部屋から部屋へと

追ひまくり、そして暴虐なフロン・ド・ブーフの部下に對して、長い間抱いてゐた復讐の念を、敵の流血によつて存分に満たしてゐたからである。守備軍の大部分は極力抵抗を試みた——極く少數の者は助命を請うた——が誰一人も助命せられなかつた。空氣は呻き聲と武器のかち合ふ音とで満たされた——床の上は絶望に陥り、死に瀕した者共の血潮で沁るほどであつた。

この混亂の場所を通つて、セドリックはローエナの搜索に努め、忠實なガースは、このどさくさの間をセドリックのすぐ後に従いて、主人に向けられる矢弾を外らさうと努めながら、自分自身の安全は顧みなかつた。サクソンの郷士セドリックは幸ひにも彼の被後見人の部屋に達することが出来た、丁度その時彼女は助かる望みを全く投げ捨て、苦悶しながら、十字架を胸に當てたまふ、近づく死を待つてゐた。彼は姫をガースに渡して、無事に外堡に連れ行かせた。そこに行く道は今や敵の影もなく、しかも焔によつて遮られてもゐなかつた。かくして忠勇なセドリックは、彼の友であるアセルステインの搜索に馳せ向つた、彼はどんな危険を冒しても、このサクソン王朝の最後の芽生えを救はうと決心したのである。併しセドリックが彼自身囚はれてゐたあの古い廣間まで進まないうちに、ワンバの工夫に富んだ天才は、彼自身と逆境に陥つた彼の友とを解放することが出来たのである。

戦の物音がその烈しさの絶頂に達した時、この幫間は肺のあらん限りの力を出して叫び始めた、「萬歳！ 楽しいイン格蘭ド萬歳！——城は奪つたぞ！」そして廣間に散らばつてゐる錆びた鎧の二三の破片を互に打ち合はせて、この叫びを一層怖ろしいものにした。

外の、控への部屋に詰めて、既に驚いてゐた一人の番人が、ワンバの立てた物音にびつくりして、扉を開け放したまふ、寺侍のところへ走つて行つて敵軍が古い廣間に闖入したことを告げた。そのうちに捕虜達は難なく次の間に逃れ、そしてそこから戦の最後の場所となつた城の中庭へ逃げた。ここには兇猛な寺侍が馬に跨がつて、乗馬と徒歩の數人の守備兵に取り巻かれてゐた、彼等は自分達に残された安全に退却する最後の機會を得る爲めに、この有名な大將と力を合はせてゐたのである。跳橋は既に彼の命令で降されてゐたが、しかし通路は鎖されてゐた。何となれば、今まで矢で城のこの方面のみを悩ましてゐた弓兵隊は、火が起り、橋が降されるのを見ると、守備兵の遁走を防ぐと共に、城が焼け落ちる前に自分の分捕品の分け前を手に入れようとして入口に群がつて來たからである。一方、小門から入つた寄せ手は今や中庭へと押し出して、残りの防禦軍を遮り無二攻撃するので、防禦軍はかうして腹背一時に敵を引き受ける事になつた。

併し、城の殘兵どもは、絶望の爲めに、却つて活氣つき、彼等の不敵な首領に勵まされて、有らんかぎりの勇氣を奮つて戦つた。そして十分に武裝してゐたので、數に於ては遙かに劣つてはゐたが、一度ならず、寄せ手の軍を逐ひ返すことが出来た。レベッカは、寺侍配下のサラセン奴隸の一人が乗つてゐる馬の背の前の方に跨つて、その小團隊の眞中にゐた。そして、ボア・ギルベールは、血腥い戦の混亂のうちにあつて、尙ほ彼女の安全の爲めに凡ゆる注意を怠らなかつた。幾度となく彼は彼女の傍に來た、そして彼自身の防禦を怠つても、彼女の前に自分の三角形の鋼鐵の桶を翳した。そして

時々彼女の側から離れ、雄叫びの聲を揚げて突進し、寄せ手の一番の先手を打ち倒し、忽ち駆け戻つては、彼女の馬の手綱を取るのであつた。

讀者諸君の既に知られる通り、非常に懶惰ではあるが、卑怯者ではないアセルステインは、寺侍がこんな大切に保護する婦人の姿を見て、それがローエナ姫であつて、その騎士があらゆる抵抗を冒して、その姫を奪ひ去らうとしてゐるところであると確信したのである。

「聖エドワードの靈にかけて、」と彼は言つた、「私は彼女をあの高慢な騎士の手から救ふ、そして彼奴をばこの手にかけて殺して見せる！」

「あなたのなさることをよく考へて御覽なさい、」とワンバが言つた。「あわてる手は蛙を魚と間違へて掴むと申します——幫間の印である杖にかけて申しますが、あれは決してローエナ姫ではございませぬ、あの長い黒い頭髮を御覽なさい——若しもあなたが白と黒との見分けがつかない位ならば、あなたが大將になつても、私は決して家來にはなりません——私は誰の爲めかをも分らずに骨を折るわけには参りませぬ。——その上あなたは鎧兜もありませんか！——よくお考へなさい、絹のボンネットで鋼鐵の刃を防いだ例はございませぬ。——身勝手な人が水に入ると溺れるばかりです。——神御身を守れかし、最も勇敢なアセルステイン殿、」——今までサクソンの軍服を押へてゐた手をゆるめながら彼は言ひ終つた。

一人の兵士がいまはの際まで掴んでゐて、今放したばかりの鎧才が、その死人の側に横はつてゐる

のを鋪床から引つ掴んだり——寺侍の一團の中へ飛び込んだり、そして續けざまに右左に薙ぎ立て、一振りごとに兵士を打ち倒したりすることは、今や異常な憤怒に驅られたアセルステインの強力にとつては、真に一瞬間の仕事であつた。彼は忽ちボア・ギルベールの二ヤードの隔りにまで迫るや、大音を揚げて彼に挑戦した。

「退け、偽り根性の寺侍め！ その女を離せ、貴様はその女に手を觸れてはならないぞ——退け、人殺しの偽善な盜賊隊の頭め！」

「犬め！」と齒を噛み鳴らしながら寺侍は言つた、「ザイオンの神聖な寺侍團を罵る方法を、貴様に教へてやらう、」かう言つて彼は、馬首を半ばめぐらし、半圓を描いて、サクソン人の方に進み寄つた。そして鎧の上に突つ立つて、馬より高く身を起しながら、勢ひするどく、アセルステインの頭上に恐ろしい一撃を加へた。

成程ワンバが言つた通り、絹の帽子では鋼の刃は防げなかつた。寺侍の武器はひどく鋭利だつたので、強靱なひだのある鎧矛の柄をば柳の小枝でもあるやうに粉微塵に打ち砕いた。その鎧矛を不運なサクソン人は騎士の打撃を受け止めに振り上げたのである。が寺侍の武器は彼の頭上を深く斬り下げて、彼を地上に横へて了つた。

「はゝあ！ うまく寝たな！」ボア・ギルベールは叫んだ、「寺侍を誹謗する者は皆この通りだぞ！」アセルステインの横死によつて、捲き起された敵の意氣沮喪に乘じ、「助かりたいと思ふ者は俺のあと

について来い！」と聲高く叫びながら、彼等を遮り止めようとする弓兵達を逐ひ散らしつゝ、彼は跳橋を押し渡つたのである。彼は馬に跨つたサラセン人と五六人の兵士とを率ゐてゐた。矢が繁く寺侍とその部下とに向つて射られたので、彼等の退却は危険であつた。併し、彼は難なく外堡へ駆け廻つて出ることが出来た。彼の以前の計畫によつて、この外堡をド・ブラシーが占領してゐるかも知れないと彼は想像したのである。

「ド・ブラシー殿！ ド・ブラシー殿！」と彼は叫んだ、「貴殿はそこに居られるのか？」

「私はこゝにゐます、」とド・ブラシーは答へた、「けれど私は捕虜なんです。」

「貴殿をお救ひすることが出来ますか？」とボア・ギルベールは叫んだ。

「出来ません、」とド・ブラシーは答へた。「助かるにせよ助からぬにせよ、私は降服いたしました。私は立派に捕虜となりませう。貴方はお逃げなさい——危険な人物が放たれてゐます——海を越えてイングランドの彼方へお行きなさい——もうこれ以上を言ふことは出来ません。」

「よろしい、」と寺侍は答へた、「若し貴方がこゝに止まられるおつもりなら、私がすでに立派に約束を果したことを覚えてゐて下さい。危険な人物など何處にでもゐるがよろしい、私が思ふには、テンブルストウの教堂の城壁は、十分に私を庇つてくれるでせう、青鷲がその巢に歸るやうに、私も亦そこへ行かうと思ひます。」

かう語り終ると、彼はその従者達と共に馳せ去つた。

馬に乗つてゐなかつた城中の人々は、寺侍が去つて後も矢張り寄せ手に對して必死に戦つたが、それは彼等がいくら逃れる望みを持つてゐた爲め、と言ふよりは、寧ろ助命を乞うても駄目だと思つたからである。焰は城のあらゆる部分に速かに擴がりつゝあつた、その時、その焰を最初に點じたウルリカが、櫓の上に現はれた、古の復讐の女神の一人のやうな姿をして、まだ異教徒であつた頃の、サクソン人の吟遊樂人によつて戦場で歌はれたやうな軍歌を囀鳴りながら。彼女の長い亂れた白髪は、帽子も冠らない頭から後に垂れてゐた。復讐の念を、十分満足させた酔ふやうな喜びが、狂氣じみた眼光の中にもちらついてゐた。そして彼女は手に持つた捲糸竿を縦横に振り廻した。恰も彼女が人間の生命の糸を紡いだり縮めたりする、運命の女神（希臘の神話では、運命の女神はクロイソ、ラキシス、アツロポス、それが切る）の一人でもあるやうに。彼女がこの戦火と殺戮の場所であつた歌つた野蠻な讚歌の中、いくつかの狂ほしい聯句は傳統の力で今日迄も保存されてゐる。——

輝ける鋼を磨け、

白龍の息子等よ！ （昔、白龍はサクソンの人の戦の象徴である）

炬火を點せ、

ヘンジスト（サク）の娘よ！

鋼は饗宴の肉切りの爲めには輝かず、

そは堅く、廣く、鋭く尖れり。  
炬火は婚禮の部屋には行かず、  
そは燐光もて青く輝き閃めく。  
鋼を磨け、烏は鳴き騒ぐ！

炬火を黠せ、ツエルネボックはわめき叫ぶ！  
鋼を磨け、龍の息子等よ！

炬火を黠せ、ヘンジストの娘よ！

二

黒雲は郷士の城の上に低くかゝれり。

鷺は叫ぶ——彼は雲の胸に乗れり。

叫ぶなかれ、灰色なる黒雲の騎者よ、

饗宴は用意されたり！

ブルハラ（ブルハラはスカンディナヴ  
イア神話中の武人の樂園）の少女等は前方を眺む、

ヘンジストの族は彼等の許に賓客を送り出す。

汝等の黒き捲毛をうち振れ、ブルハラ（ブルハラはスカンディナヴ  
イア神話中の武人の樂園）の少女等よ！

音高く手鼓打ちて喜べ！

數々の偲おぼれる歩みは汝等の廣間へぞ向ふ、  
數々の兜つけたる頭もまた。

三

夕暮はほの暗く郷士の城の上にかゝれり、

黒雲はその周りに群り來る。

やがてそは勇士の血の如く紅とならん！

森の破壊者（火）は、その赤き蠶たてがみを雲に向けて打ち振らん！

宮殿を皎々と焼き盡す彼は、

赤き、廣き、且つ黒すめる

彼の燃え輝く旗の手を廣々と

勇士等の鬪ふ上に打ち振ふ。

彼の喜びは打ち合ふ劍と破れし圓楯とにあり。

彼は傷口より温かく迸る血潮を駭ることを好む！

四

すべてのものは滅ぶべし！

劍は兜をうち破る。



堅き鎧は槍もて貫かる。  
 火は王侯の住居をば焼き盡す、  
 軍器は戦場の墻壁をば打ち倒す。  
 すべてのもものは滅ぶべし！  
 ヘンジストの族は逝けり——  
 ホーサの名は今はなし！  
 されば汝等の運命を恐るゝなかれ、劍の子等よ！  
 汝等の双をして醇酒の如く血潮を飲ましめよ。  
 殺戮の饗宴にたのしめよ、  
 輝く廣間の燈火の蔭に！  
 汝の血の温かき間は汝の双も強からん  
 憐れみをも恐れをも投げ捨てよ、  
 復讐は唯一瞬のことに過ぎざれば。  
 強き憎しみすら消ゆべし！  
 我もまた滅ぶべし！

激しい火の手は今やあらゆる障碍物に打ち勝ち、燃え盛る巨大な炬火となつて、夕暮の空へと立ち登り、遠く廣く隣りの國からさへ望まれた。數知れぬ塔が燃え盛る屋根と垂木と共に倒壊した。それで闘士等も中庭には居られなくなつた。最早残り少なくなつた防禦軍は、四方に散つて附近の森林に逃げ込んだ。勝利者達は、大きな隊をなして集まり來り、多少恐れながらも亦驚きの念をまじへて、火焰を凝視した。その火焰の光で彼等自身の隊伍や武器が暗赤色にきらめいた。歡喜の餘り兩手を打ち振りながら、恰も自分で起した火災の女王として君臨するかのやうに、高い足場を選んで立ち上つたサクソン人ウルリカの狂亂した姿が暫くの間はつきりと見えてゐた。遂に、怖ろしい響と共に櫓全體が崩壊した、そして彼女は彼女の暴君を呑んだ焰の中に滅びて了つた。恐怖に満ちた沈黙が武装した見物人等の囁きを封じて了つた。彼等は數分の間、十字を切るより他には指一本も動かさなかつた。その時ロックスライの聲が聞えた、「よろこび叫べ、郷士達よ！——暴虐者の巢窟は最早滅びた！ 各各ハートヒル街道の樹の下の會合の場所へ戦利品を運んで行け。夜の明け方に我々はそこで我々の軍勢に公平に分配しよう、この偉大な復讐の仕事に加はつた我々の尊敬すべき同盟者達にも分けることにしよう。」

(三十二)

實に如何なる國家もその政綱がなくてはならぬ。

王國には勅令、都市にはその掟が。

森を彷徨ふ猛き浪士すら、

尙ほ且禮儀を守るところがある。

\* アダムが緑の裳着けて以來

人と人との睦み合つて住むのは、

法がその睦まじさを益々堅めるために

つくられたからだ。

(\*アダムは人間の祖、初めは全裸體であつたが、後耻を知り、無花果の葉を纏り合せてその腰部をかくした。それを無花果の葉のエプロンと云ひ傳へてゐる。創世記 三章七節参照)

(古劇より)

曙の光が櫛の森の空地の上に射し初めて、緑の枝は眞珠のやうな露の玉で輝いてゐた。牝鹿はその仔を丈の高い羊齒の隠家から緑の森の一層廣々とした道の方へ連れて行つた。そこには自分の家族の先頭に立つて進んでゆく立派な牡鹿を見張つたり、遮つたりする獵師は一人もゐなかつた。

浪士達は悉くハートヒル街道の寄合所の樹のまはりに集まつてゐた。そこで彼等は城攻めの疲れを癒やす爲めに一夜を過したのである。中には酒で、中には眠りで癒やした者もあつたが、多くはその日の出来事を聞いたり、語つたり、或は彼等の勝利の結果、自分達の首領の處置に委せられた分捕品

の山を數へたりして自ら慰めたのである。

戦利品は實に莫大なものであつた。何故かと云ふに、失ふところは非常に多かつたけれども、多量の胸甲や、立派な甲冑や、素晴らしい衣類などが、豪膽な浪士達の努力によつて確實に占領されたからであつた。彼等はさうした報酬が眼の前には如何なる危険にも脅やかされなかつたのである。併し彼等の社會の法律はひどく嚴重であつたので、公共の所有として、彼等の首領の處置に委ねられた戦利品の一部分でも敢へて占有しようとするものはなかつた。

會合の場所は年經た櫛の木の下であつた。とは云へこの物語の初めの方でロックスライがガスとワソバとを導いて行つたあの樹ではなく、亡ぼされたトキルストーントキルストーンの城から、半哩ばかりのところにある森の圓形になつた空地の中心にある樹であつた。こゝへロックスライは彼の席を占めた——芝生の玉座が巨大な櫛の木の扭ち曲つた枝の下に盛り上つてゐた、そして森の住者達は彼の周りに集まつてゐた。彼は自分の右手にある座席を黒裝束の騎士に與へ、左手の場所をセドリックにあてた。

「各々方、私の身勝手をお許し下さい、」と彼は言つた、「併しこの林間の空地では私は君主であり——こゝは私の王國なのです。若し私が自分の領内で何人にか席をゆづつたなら、これらの荒々しい家來達は、私の權力を蔑ろにするでせう。——ところで、各々方、誰か我々の牧師を見かけはなさらなかつたか？ あの短衣(本當の僧侶でない者は短い僧服を着てゐた)の僧は何處にゐますか？ 忙しい朝を迎へるには基督教徒達にとつて、彌撒が一番よいのですが。」——誰もコプマンハーストの僧侶を見た者はなかつた。

「まさかゐないことはあるまいが、」と浪士の首領は言つた、「私はあの愉快な僧侶が少しおそくなつたのは酒瓶のせみだと思ふ、城が落ちてから彼を見かけたのは誰だ？」

「私こそ、」とミラーは言つた、「あの人が、厩こしやみにあるあらゆる聖者の靈にかけて、フロン・ド・ブーフのガスコーニュの酒の樽を味はふのだと言ひながら、穴藏の戸口の前に忙しさに、うろくしてゐるのを見かけました。」

「さらば、この世にある限りの聖者達に、」と首領は言つた、「彼があまり多く酒樽を平げて、城の滅亡と共に死んだといふやうなことのありませんようにお祈り致します！——行け、ミラー！——十分な人数をつれて行つて、お前が最後に彼を見かけた場所を捜して見ろ——濠から水を汲んで燻くすぶり居る焼け跡に注ぎかけろ——私は石を一つく掘り返して、我が短衣の和尚を見附けないではおかな。」

興味ある戦利品の分配が始まらうとしてゐる時に、この命令を實行しようと急ぎ去つた人数の多いことは、いかにこの軍勢が、自分等の精神上の教父の安全を冀つてゐるかをよく證明したものである。

「この間に、そろく始めるでしょう、」ロックスリイは言つた。「と云ふわけは、この大膽な振舞が諸方に弘まつたなら、ド・ブラシーヤ、マルヴォアザンの部下や、他のフロン・ド・ブーフの味方が、我々を攻めに押しかけて来るだらうから、適當時にこの附近から退いて、安全を計るのがよからうと思ふ。」

「セドリック殿、」セドリックの方へ振り向きながら、彼は言つた、「その戦利品は二つの部分に分けてませう。貴方が御自分に一番ふさはしいと思はれる方をお選びなさい、そしてこの冒険に於て、我々に味方をしてくれた貴方の部下に酬むらいるやうにして下さい。」

「親切な郷士殿、」とセドリックは言つた。「私の胸は悲しみの爲めにつぶれるばかりだ。あの氣高いコニングスボローのアセルステインは最早この世にはゐない——あの聖徒の列に加へられたエドワード懺悔王の最後の血筋がなあ！ 望みは彼と共に死して再び歸る時期はあるまい——火花は彼の血潮によつて打ち消され、いかなる人の息吹いきぶきも再びそれを點とますことは出来ない！ 私の手許にゐる僅かの人數を除いては、他の大部分の部下が、彼の名譽の亡骸なきがらをその最後の宿所へ運びゆかうとして、私の臨席を待ち焦がれてゐるのだ。ローエナ姫はロザードへ歸ることを望まれる、それには十分な軍兵をもつて護衛して上げなければなるまい。私はもつと早くこの場所を立ち去らねばならなかつたのだ。併し、私は待つてゐた——それは何も戦利品を受取りたい爲めではないのだ、と云ふわけは、神も聖ワイトホールドも見そなはせ！ 私も部下の何人も金銭などに指も觸れたくはない、——私はたゞ貴方等に救はれた生命と名譽とに對して、貴方と貴方の大膽な郷士達に、お禮を述べたいばかりに待つてゐたのです。」

「けれども、」と浪士の首領は言つた、「わし達は高々半分ばかり仕事をしただけだ——戦利品の中から貴方の隣人と家來衆とに酬むらゆるに足るだけお取り下さい。」

「私は私自身の財産の中から、彼等に酬むらゆることが出來ます、」とセドリックは答へた。

「そして中には、」とワンバは答へた、「自分で自分に酬ゆるに足るほど賢い者もございません。といつて、彼等はみんな全くの空手で歸るといふのではありません。わし等は皆までは馬鹿の眞似をいたしません。」

「それは御随意だ、」とロックスリイは言つた、「我等の法律は唯我等のみを束縛するのだ。」

「だがお前、氣の毒な奴、」ふり向いて幫間を抱き寄せながらセドリックは言つた、「どうしてお前にお禮をしたらよからう、わしに代つて虜ともなり、死出の旅路に就くことをすら恐れなかつたお前に！ 誰もかれもわしを見捨て、了つた時に、あはれな幫間だけが捨てなかつたとは！」

かう語つた時、荒々しい郷士の眼には涙が宿つてゐた——それはアセルステインの死に對してさへ起らなかつた感情が今現はれたのである。併し彼のかゝへの幫間の、半ば本能的な愛着のうちには、悲しみそのものよりも、もつと烈しく彼の感情を喚び起す何ものかどあつた。

「あゝ、」主人に抱かれてゐた身を振りほどきながら、幫間は言つた、「若しあんたが目の中の水で、わしの骨折りに酬いるのなら、幫間も貰ひ泣きをしなくてはなりません、したらわしの商賣はどうなるのでございませう？——だけど、をぢさん、若しあんたがほんとにわしを喜ばさうと思ひなされるなら、どうぞわしの遊び仲間のガースを許してやつて下さい、あいつ奴は一週間ほどあんたの手から抜け出して御子息様にお仕へ致しました。」

「彼を許せ！」とセドリックは叫んだ。「わしは彼を許しもある、又お禮もするつもりだ。——ガース

よ、跪け。」豚飼ひは忽ち主人の足許に跪いた。「お前は最早奴隷でも農奴でもないぞ。」杖で彼に觸りながらセドリックは言つた。「お前はもう野原でのやうに自由な人間だぞ、都會でも、田舎でも、森でも、俺はヨールブラガムの領地の中から一ハイド（往時イングランドで一家族を養ふに足る地積で、六〇の四段二十四歩に相當す）の土地をお前にわけてやらう、俺や、俺の子々孫々から、お前や、お前の子々孫々まで、今後永久に。してこの約束は神かけて間違ひないぞ！」

ガースは最早農奴でなく、自由民でその上地所持となつたので、急に立ち上つて、そして二度までも自分の身の丈程も高く地面から跳び上つた。

彼は叫んだ、「自由民の首から頸輪をとる鍛冶屋と鑪！——旦那様！ わしの力はあなたの恵みで二倍になりました、だからこれから二倍にあなたの爲めに戦ふつもりでございます！——わしの胸には自由な魂たましひが宿つてゐます——わしは自分にも、周りの者にも、前より變つた人間なのだ。——は、あ、ファンクスよ！」と彼は續けた、——何故と云ふに、その忠實な犬は、彼の主人がこのやうに有頂天になつてゐるのを見て、同感を表はすために、主人に飛びかゝり始めたので、——「お前はまた主人が分るのか？」

「分るとも、」とワンバは言つた、「ファンクスも俺もまだお前が分るよ、ガース、俺達は是非頸環をすてる譯にはゆかないが。俺達二人とお前自身とを忘れさうなのは却つてお前の方だ。」

「俺はお前を忘れるくらゐなら、自分自身も忘れつちまふだらう、」とガースは言つた。「ワンバ、若

し自由がお前に似合ふとしたら、御主人様はきつとそれを與へて下さるに違ひねえ。」

「いや、」とワンバは言つた。「ガス兄い、わしがお前を羨むなどは思つてくれるな。自由民が戰場へ向はねばならねえ時に、農奴は火の傍はたに坐つてゐるのだ——マームズベリーのオールドヘルム上人が言はれたことだが——戰場にある賢い人よりも、宴會に出てゐる幫間の方がまだ。」

軍馬の足音が聞えて、ローエナ姫が現はれた、數人の騎兵と、彼女の解放を喜んで嬉しげにその槍を振つたり、斧戟そのほこをかち／＼打ち合はせたりする特に強い歩兵の一隊とに護られて。華かな衣裳をつけ、濃い栗毛の馬に跨つた姫は、立居振舞もすつかりもとのやうに嚴いひかめしかつたが、唯見馴れない一種の蒼白さが面に現はれて、彼女の受けた苦しみの名残りを留めてゐた。憂はしげではあるが愛らしい額は、自分の解放に對する感謝の印しるしと共に、將來に關する再び甦つた希望の影を宿してゐた。——彼女はアイヴンホーの無事なことを知つた、そして又アセルステインが死んだことも知つた。前者の吉報を聞いて、彼女の胸は限りない衷心こころからの喜びに満ちた。そして、後者の悲報は、彼女を絶對には喜ばせなかつたとしても、彼女が自分の保護者のセドリックに反對せられてゐた唯一の問題に就いて、これ以上迫害せられることになつたのを、大層都合だと感じたことは察せられるであらう。

ローエナ姫が馬をロックスライの席に向けた時、その大膽な郷士と、彼の部下の者一同は、さつと立ち上つて彼女を迎へた、その様子は、丁度思はず挨拶しなくてはゐられなかつたかのやうである。彼女は紅の血潮に兩頬を染めながら丁度丁手に手を振り、また美しいふさ／＼した垂れ髪が自分の乗馬のう

ちなびく鬘としばしもつれ合ふまでに、低くかゞみながら、僅かではあるが、ふさはしい言葉でロックスライやその他の救助者達へ感謝のあいさつを述べた。——「勇敢な方々よ、あなた方の祝福を祈ります、」彼女はかう結んだ、「虐げられた人達の爲めに勇ましくも自分の身を顧みなかつた皆様に對して神様と聖母様とが祝福を垂れ、報いをお與へ下さるやうにお祈り致します！——若しも、あなた方のどなたかゞ餓ゑられるやうな事があつたなら、ローエナが食べ物を持つてゐることを思ひ出して下さい——若しあなた方が喉の渴きを覺えられる事があつたなら、彼女が澤山の酒や黒ビールの樽を持つてゐる事を思ひ出して下さい——若し又ノルマン人があなた方をこの道から追ひ出したならローエナは自分自身の森を持つてゐる事を思ひ出して下さい。そこでは私を救つて下さつた勇ましい方々は、存分に狩をすることが出来ます。そして番人は誰が鹿をうつたかなどと決して尋ねは致しませんまい。」

「有難うございます、姫君様、」とロックスライは言つた。「家來一同からも私自身からもお禮を申し上げます。けれども、あなた様をお救ひすることが、それ自體すでに報酬でございます。緑の林の中を横行する我々は、數々の荒々しい行ひを致します、さればローエナ姫をお救ひしたことは一つの罪滅しとも考へられるのでございます。」

再び馬上から一禮して、ローエナは出發しようとして身構へた。然しながら、彼女の供をする筈のセドリックが別れを述べる間、暫く休んでゐるうちに、彼女は思ひがけなくも、捕虜になつたド・ブラシーの側近くにゐることに氣が附いた。彼は兩腕を胸の上に拱いたまゝ、深い思ひに沈みながら、樹の下

に立つてゐた、そして、ローエナは彼に見附けられないで、その側を通れるやうに希<sup>こひねが</sup>つた。が、彼は目を上げた、そして、彼女のあることに氣附くと、恥かしいといふ深い心の閃きが、彼の美しい容貌の上にみなぎつた。彼は非常にきまりわるく、一瞬間立つてゐた。それから、つか／＼と進み出て、姫の馬の手綱を控へ、そして彼女の前に跪いた。

「姫君ローエナさま、どうか、囚れの騎士を、ちらとでも御覽下さいませ——面目を穢<sup>けが</sup>された騎士を。」騎士殿、」とローエナは答へた、「あなたのお企てになつたやうなことは、本當は不面目や失敗ではなくて、成功の方でございます。」

「姫君よ、勝利は心を柔げる筈でございます。」とド・ブラシーは答へた。「ローエナ姫さま、あはれな情慾のために行つた亂暴な振舞を許してやると、たつた一言仰しやつて戴きたうございます。さすればこのド・ブラシーも、もつと氣高く姫に仕へることも出来るといふことを、やがてお知らせ申し上げます。」

「私は御身を許します、騎士殿、併しそれは唯基督教徒としてでございます。」

「その意味は、」とワンバは言つた、「姫がお前を少しもお許し遊ばさぬといふことだ。」

「併し私はあなたの狂氣が惹き起した、みじめさと悲しさを許すことは決して出来ません、」とローエナは續けて言つた。

「姫の手綱を捉へてゐる手を離せ、」と近づいて來たセドリックは言つた。「我等の頭上にかゝる赫々たる日輪にかけて、若しそれが手の汚れでなかつたなら、わしは貴様を槍で地上に打ちつけて見せように——だが、モオリス・ド・ブラシー、貴様がこの卑怯な企てに加はつたからには、後でひどい目に遭はすからさう念<sup>おも</sup>へ。」

「捕虜をおどかすのはいとたやすいことだ、」とド・ブラシーは言つた。「だが、サクソン人は露ほども好意を持つたことがあるか？」

それから二歩ばかり後へ退<sup>うしろさか</sup>つて、彼は姫を前へ進ませた。セドリックは、出掛ける前に、黒装束の騎士に對し、特別な謝意を述べ、そして自分に隨いて、ロザードへ行つてくれるやうにと熱心に頼んだ。

彼は言つた、「あなた方放浪の騎士殿は、運勢を槍の穂先に任せようとなされて、土地や品物などは何ともお思ひにならないことはわしもよく存じて居ります。然しながら戦争といふものは氣紛れな情婦のやうなもので、放浪を商賣とする騎士にとつても、家庭といふものがやゝもすれば欲しくなるのでございます。氣高い騎士殿、わしはロザードの館の一部をあなたに進ませよう。セドリックは運命があなたに加へた損害を償ふに足るだけの富は持つて居ります、そして自分の持つだけのものは、みんな命の恩人に差し上げる筈でございます。——どうぞ、ロザードへ、お越し下さい、他人行儀の客人としてではなく、伴か弟のやうに肉親のものとして。」

「セドリック殿はすでにわしを裕福にして下さつた、」と騎士は言つた、——「即ちわしにサクソン人

の徳義の眞價を教へられたのだ。勇敢なセドリック殿、ロザードへお供ませう、而も出来るだけ速かに。けれども、目下のところは、極めて重大な、差し迫つた用件がわしの行くのを妨げてゐます。恐らくわしが参ります時には、貴方の寛大さを試すほどの賜を要求しますでせう。」

「それは今から承知して置きます、」と心安げに、その掌を黒装束の騎士の手袋をはめた掌の中に置きながら、セドリックは言つた——「たとへ、わしの財産の半ばを投げ出すほどでございまして、今から承知して置きます。」

柳錠紋の騎士は言つた、「そのやうに軽々と約束をなさるものぢやございせん、なれどわしがお願ひする賜は是非とも得たいものです——まづそれまでは、しばしのお別れです。」

セドリックは言つた、「わしは次の事を申し上げれば事が足りるのでございます。あの身分の貴いアセルステインの葬儀中は、わしはコニングスボロー城のお屋敷の住人となつて居ります——その城のお屋敷は、葬儀に加はりた望む者には誰にでも開放されます。そして亡くなられた皇子の母君、エディス様に代つて申しますが——そのお屋敷に、たとへ不成功には終りましたもの、アセルステイン殿をノルマン人の鎖と劍から救はうとして、あんなに勇敢に働いたお方を入れない筈はありません。」

「さやう、さやう、」再び主人の傍に戻つたワンバは言つた、「珍しい御馳走があることだらう——あのアセルステイン殿が自分の葬儀に御馳走の食へないのは氣の毒なことだ。——併しあの方は、」重々しく眼を天に向けながら、期間に言ひ續けた、「天國で食事をなさつてゐられる、そして屹度その御馳走を賞味してゐられることではございませう。」

「黙つて進め、」とセドリックは、この時ならぬ冗談にむつとしたもの、ワンバの今までの功勞を思ひ出し、我慢してかう言つた。ローエナは柳錠紋の騎士に向つて優しく別れの挨拶をした、——セドリックは騎士に向つて神の冥加を祈つた、そして彼等は森の廣い空地を通つて進んだ。

彼等が出發するかしないかに、突然一つの行列が緑の林の樹蔭から進み出て、緩やかにその圓形の空地をめぐるつて、ローエナとその従者達と同じ方向を取つて進んだ。附近の僧院の僧侶達は、セドリックが約束しておいた澤山な寄進又は回向料を當にして、アセルステインの死骸を乗せた車に付き添うて進んだ、そして僧侶の唱ふる讚美歌につれて、亡き人の死骸は、遠い先祖にあたるヘンジストの墓場に埋める爲めに、コニングスボローの居城へと、家臣達の肩の上に物悲しく緩やかに運ばれて行くのであつた。多くの家臣が彼の訃報に接して集まつてゐた、そして落膽と悲哀とを、少くとも、あらゆる外面的の喪章に現はして棺の後に従つた。またも浪士達は立ち上り、今しがた美人に捧げたと同じ無造作な、心からの敬意を死者に對して拂つた——僧侶達の、のろい聖歌の聲と悲しげな歩みとは、前日の戦に倒れた戦友達の追憶を彼等の心に浮ばしめた。併し、そのやうな追憶は、危険と冒険の生活を送つてゐる人達の心には、永く止まつてゐないのが常である、そこで死の讚美歌の響が、風に乘つて消え去らぬうちに、浪士達は再び戦利品の分配に没頭し始めた。

「勇敢な騎士よ、」とロックスライは黒装束の騎士に言つた、「貴方の親切な心と力強い腕とがなかつた

なら、我々の企ては全く失敗に歸したに違ひありません。どうぞこの堆かく積んだ戦利品中からあなたのお氣に召すもので、且つこの寄合所の樹を思ひ起させるやうなものをお取り下さいませんか？」  
騎士は言つた、「では、わしも遠慮なく頂かう。わしはモオリス・ド・ブラシー殿をわしの自由に處分する許しを得たいものです。」

「彼はすでに貴方のものでございます」とロックスリイは言つた。「彼の爲めには幸せなことだ！ でなければ、わしはこの暴逆者をこの櫛の樹の一番上の枝に晒し、彼の部下の傭兵達をも皆集めて、丁度櫛の實のやうに其奴の周圍に澤山ぶらさげて、晒し物にしたでせうに。——けれども彼は貴方の捕虜であれば、まづ安全だ、たとへ彼がわしの父を殺したとしても。」

「ド・ブラシー」と騎士は言つた、「お前は自由の身になつたのだ——立ち去れ。お前を捕虜にしたお方はお前の過去の罪に卑劣な復讐をすることを潔しとされないのだ。だが、今後は氣を附けるがい、さもないと一層悪いことが降りかゝるかも知れないぞ、——モオリス・ド・ブラシー、ほんとに氣を附けるがい！」

ド・ブラシーは黙つたまゝ低く首を下げ、將に立ち去らうとしてゐた、その時郷士達は一齊に呪咀と嘲笑の叫びを上げた。傲慢な騎士は忽ち踏み止まり、後を振り向き、腕を組み、思ふ存分丈を伸ばして叫んだ、「黙れ、泣きわめく犬共！ 追ひつめられて逃げる鹿を追ひかけるやうな卑怯な者共よ——ド・ブラシーはお前等の賞讃を輕蔑すると共にお前等の非難をも嘲笑してやるぞ。自分の藪か洞穴へで

も引つ込んでゐる、追放された泥棒共め！ そして、お前達の洞穴の近所で騎士らしいことや氣高いことが話される時には口を噤んで居れ。」

浪士の首領が急いで押し止めなかつたならド・ブラシーはこの皮肉な挑戦の爲めに矢の一齊射撃を浴びたかも知れなかつた。その間にド・ブラシーは一頭の馬の手綱を捉へた、何故と云ふにフロン・ド・ブーフの厩の中から捉へて來た數頭の馬がまだ装具をつけたまゝその邊りに立つてゐたからである。而もこれは戦利品の大切な部分をなしてゐたものである。彼は鞍の上に飛び乗つて森の中を馳せ去つた。

この不意の出來事で捲き起された騒ぎが、幾分鎮まつた時、浪士の首領は自分の首からアシビに近いの弓術試合で贏ち得たばかりの立派な角笛と飾り帶とを取つた。

「氣高い騎士よ」と彼は柳錠紋の人に言つた、「若しもわしが一度身に着けた角笛をお受取り下さるのがお厭でなかつたなら、どうぞこれを勇ましい御振舞の記念としてお納め下さい、——また若し何かなさる事がございまして、勇ましい騎士の身に屢々降りかゝるやうに、御身がトレント川とティーズ川の間の森でひどい目にお遭ひになるやうなことが起りましたなら、かやうにワ・サ・ホー！ と云ふ三つの調べを角笛でお吹きなさいまし、さすれば屹度助け人を差し向けてお救ひしますでせう。」  
彼はそれから角笛に息を籠めて、幾度も自分の言つた通りの音を吹きならした、騎士もそこでやうやくその調べを覺えた。



「賜物有難く頂戴いたします、豪膽な郷士殿、」と騎士は言った。「若しわしがいよくといふ場合には、貴方と貴方の部下の浪士達の助けほど望ましいものはございませんまい。」そしてこんどは、彼が緑林の中に鳴り響くまで笛を吹き鳴らした。

「いかにも見事な朗かな音色だ、」と郷士は言った。「屹度御身は戦争のことに劣らず、狩獵のこともよく知つて居られるに違ひない！——御身の若い時分には、屹度鹿狩をされたことがおありなかつた筈だ。——各々方、この三つの調べを記憶するがい、——それは柳錠紋の騎士の呼び聲なのだ。若しその音を聞いて、急いでその急をお救ひしようとしないうものがあつたなら、わしはその者の弓弦をもつて彼を懲らしめ我等の仲間から追放するつもりだ。」

「我等の首領萬歳！」と郷士達は叫んだ、「そしてまた柳錠紋の黒装束の騎士萬歳！——我々が如何に速かに御用を勤めるかを示す爲めに、一刻も早く我等の奉公を求めらるゝようにお祈りします。」

ロックスリイはまたも戦利品の分配を始めた、而も彼はそれを感心する程非常に公平に行つた。即ち全體の十分の一は教會の爲めと、敬虔な用途の爲めにとり除けられた。次に一部が一種の公共の財産として定められた。そして又一部は死んだ人々の寡婦や子供達の爲めと、數多の無縁者の靈を弔ふ爲めに費すべく指定された、残りは各自の階級と功績とに従つて、浪士達の間で分配された。えて疑惑を惹き起しやうしした事に關して首領は非常に巧妙な判断を下し、而も、それが絶對の服従をもつて受け納められた。黒装束の騎士は、このやうな無法律の状態にありながら、彼等自身の間には嚴

格な公平な自治が行はれてゐるのを見て少なからず驚いた、そして彼は自分の見聞するところに依つて、浪士の首領が、正義と判断とに富んでゐると云ふ見解を、益々強める許りであつた。

各々が自分の分け前を取つた時、そして四人の丈の高い郷士に伴はれた會計係が、この團體の共有財産に屬する部分をどこかの安全な隠し場所へ運んでゐる間に、教會に捧げられる部分は、誰にも持ち去られずにあつた。

首領は言つた、「あの愉快な和尚さんの消息が聞きたいものだ、——彼は御馳走にあづかつたり、分捕品を分けたりする時には缺席したことがないのだが。して我等の戦利品の中から十分の一税を取り立てるのが彼の役目なのだ。多分この任務が彼の宗規違反行爲を幾らか庇ふ助けとなつた。わしはまた彼の同役を程遠からぬところに捕虜にしておいた、それ故わしは彼奴を適當に處理する爲めに和尚様の助けを得たいのだ——わしはあの無遠慮な和尚さんの安否をひどく氣づかつてゐるのだ。」

「わしもまことに氣の毒に思ひます、」と柳錠紋の騎士は言つた、「といふわけは、わしもあの方の草庵で楽しい一夜の款待を受けた御恩があるので。城の焼け跡へ参りませう、多分あの方について何かの消息が得られるでせうから。」

彼等がかう語つてゐるうちに、郷士達の間で高い叫び聲が聞えて、氣遣つてゐた人の到着が報ぜられた。それはそのづんぐりした姿の見えない先から、和尚自身の高聲でそれと分つたのである。

「席を空けて下さい、愉快な方々！」と彼は叫んだ、「皆様方の神父様とその捕虜との爲めに退いて下

さい、——もう一度歓迎の叫びを揚げて下さい。——大將殿、わしは鷺のやうに、獲物をひつ掴んで参りました。」そしてみんなの笑ひ聲に包まれながら、座の中を押し分けて、彼は堂々たる凱旋といった風で現はれた。片手には大きな矛を持ち、他の手には絞索くびりなはを持つてゐた、その一方の端には、不幸なヨークのアイザックの首玉が縛りつけてあつた、そして悲哀と恐怖に首垂うなだれた捕虜は勝ち誇つた僧侶に曳き摺られて来た。和尚は大聲に叫んだ——「わしを物語歌か短い叙事詩に歌ひ込めるアラン・ア・デール（シヤイウツドの森にロビン・フック）は何處にゐる？——聖ハーマンガルド（六世紀の西ゴツスの諸侯、カトリックの信仰擁護者として聖列に列せら）にかけて申すが、勇氣を讃へる手頃な題目がある場合には、この調子よく唄ふ樂手は何時もゐない！」

「御出家、」と首領は言つた、「貴僧は今朝はもう般若湯の彌撒みさをお済ませになりましたな。一體貴僧は誰を連れて参られたのだ？」

「隊長殿、わしの劍と槍との捕虜なので、」とゴブマンハーストの僧侶は答へた、「いや寧ろわしの弓と戟ほことで得た捕虜だと言つた方がよいかも知れません。そればかりでなく、わしは我が崇める神の威徳を藉りて、彼を一層悪い囚はれから救ひました。これ、猶太人、わしはお前を惡魔から取り戻してはやらなんだか？——わしはお前にお前の信條と、天父の祈りと、聖母マリアの祈禱とを教へはしなかつたか？ わしは一夜をお前の改宗を祝して飲み、また奥義を説明する爲めに過しはしなかつたか？」

「神様の愛の爲めに！」と哀れな猶太人は叫んだ。「どなたもわしをこの氣狂ひの——いやわしの意でこころはさういふ積りだが——この神聖な人の繩から解いて下さいませんか？」

「なんぢやと？ 猶太人め、」脅かすやうな様子をして、和尚は言つた。「お前は約束を取り消すつもりか？——よく考へて見ろ、若しお前がもとの不信に立ち戻るなら、たとひお前が乳を呑んでゐる豚のやうに柔かなくなるとも、——わしは誰かにお前の肉で朝飯の支度を拵へて貰ふぞ——貴様は焼き肉に出来ない程堅くはない！ おとなしくせい、アイザック、そしてわしの後あとについてかう唱へろ。

——アヴェ・マリア！——」

「いや俺等は神を潰つぶしてはならない、氣狂ひ坊さん、」とロックスリイは言つた、「それよりもまづ貴僧は、この捕虜を何處で見附けられた、それを言はつしやい。」

「本當に、」と和尚は言つた、「わしはもつとよい品をと搜してゐる場合に此奴を見附けたんですよ！ わしは何か持ち出せるものがあらうかと思つて穴藏ほひへ入りました。といふのは、香料を混ぜた一杯の爛酒は、王様の晩酌にもならうけれども、こんなに澤山のよい酒を一度に爛する（瓶が焼けて、貯蔵の葡萄酒が一時に焼き盡される云ふ）のは勿體ないことと思ひましたからだ。そして、わしは一つの酒樽を見附けました、それから何かうまいことをする機會はないものかと絶えず搜してゐるなまけ者共のところへ、もつと手傳を求めに出掛けようとしてゐました、その時わしは一つの頑丈な扉に氣が附いた——は、あ！ この祕密の土窖つちあなの中には一番上等なのがあると思ひました。そして、ならず者の番人が自分の役目を怠つた爲めに、鍵は扉にさした儘にしてありました——そこで、わしは中へ入つたが、何にも見出さなかつ

た、が、錆びた鎖とこの猶太人の犬めを手に入れました。彼奴は助けられるも助けられないもなく、もうその場ですぐ捕虜になつちまひました。わしは戦争の疲れのあとで、この不信者と一緒に一杯の泡のたつ酒で元氣をつけた後、わしの捕虜を引つ立て、來ようとして居りますと、電光と雷鳴とが一度にするやうに外櫓の壁や土臺の石ががら／＼と倒れ落ちて、(畜生め！ 彼奴等の手めがこんなに脆く建てやがつたのだ！) わしの行手をふさいでしまひました。櫓の倒れる音があとからあとから起りました——わしは、逃れる望みをすて、了つた。そして猶太人と一緒にあの世に行くのはわしの務の汚れと考へて、彼奴の頭腦を打ち割らうと矛を手に振り上げました。だが、わしは彼の白髪に哀れを感じ、矛を収める方がよろしいと思つて、改宗を勧める爲めにわしの靈の武器を取り上げました。實に、聖ダンスタンの祝福のお蔭だが、種子はよき地に蒔かれたのだ。わしは一夜中彼に宗教の奥義を語つて聞かせたといふだけで——それに(わしの氣を引き立てた數杯の酒も餘り効目がなかつたから) 幾らか斷食と云つた譯であつたので、わしの頭は殆んどふらく／＼になつてゐるのだ。——だが、わしは全く疲れ果てゝゐたのだ——ギルバートとウィットポールドはわしがどんな状態であつたかを知つてゐる——實に全く疲れ果てたのだ。」

「我々が保證します、」とギルバートは言つた、「我々が焼け跡を出て、聖ダンスタンの助けで土窖の階段に降り立つた時、半ば空になつた酒樽と、半ば死んだ猶太人と、御自身仰せの通り、半ば以上疲れ果てた御僧とを見附けたのでございませう。」

「この悪黨め！ お前達は嘘を吐いてる！」と立腹した和尚は言つた、「あの樽を飲み乾して、朝酒だなどと言ひ居つたのはお前とお前の呑み助の相棒達だ——若しわしがあるを隊長殿の爲めにとつて置かなかつたら、わしは異教徒だ。併しそれはどうでもよいではないか？ 猶太人が改宗したのだ、そしてわしの教へたことを、全部ではないまでも、殆んどわしと同じ位に理解するやうになつたのだ。」

「猶太人よ、」と隊長は言つた、「それは本當か？ お前はお前の不信を捨てたと言ふのか？」  
 「誠に以て恐れながら、」と猶太人は言つた、「私は尊い上人様が、あの恐ろしい夜の間中、私にお話しなされたことが一言も分らないのです。あゝ！ 私は悶えと、怖れと、悲しみとの爲めに、すつかり心を奪られてゐましたので、我等の父なるアブラハム様が説教をして下されたとしても、多分聾の聽聞者に話されるも同様でございましたせう。」

「お前は嘘吐きだ、猶太人、そして自分が嘘を吐いてゐることを自分で知つてゐるのだ、」と和尚は言つた、「わしは貴様に我々の協議した事を唯一言だけ思ひ起させてやらう——貴様は貴様の財産を、残らず我々の神聖な教團に寄進すると約束したのだ。」

「その約束だけはお許し下さい、皆様方、」前よりも一層驚いてアイザックは言つた、「そのやうな言葉は、私の口から漏れたことにはございせんから！ あゝ！ 私は年とつた乞食のやうな人間でございませう——多分子供もなくなりました——私を憐れんで、このまゝ免して下さい！」

「いや、」と和尚は言つた、「若しお前が神聖な教會の爲めにした誓ひを取り消すなら、お前は罪障消

滅の爲めに苦行をしなければならぬぞ。」

そこで彼は矛を振り上げた、そして黒装束の騎士がそれを制めて、和尚の怒りを自分で引き受けなかつたなら、矛の柄は勢ひ鋭く猶太人の肩に打ち下ろされたことであらう。

「ケントの聖トマスにかけて、」と彼は言つた、「若しわしが本當に怒つたら、不精騎士殿、貴方の鐵の鎧などはないも同然、一つ貴方に目にもみせて、他人の事に餘計なお世話をしないようにと教へてあげ申すぞ。」

「いや、さうお怒りなさるな、」と騎士は言つた、「知つての通り、わしは御身の無二の親友なのだ。」  
「わしはそのやうなことは知らぬ、」と和尚は答へた、「そしておせつかいな貴方に對して挑戦するのだ。」

「いや、併し、」前夜の宿主を怒らすことを面白く思ふらしい騎士は言つた、「貴方は最早お忘れになつたのか、わしの爲めに、——(わしの爲めとばかり申しますのは、あの酒徳利と肉饅頭との誘惑の事などは抜きに致しますので) 貴方は精進と通夜との誓ひを破られたではございませんか?」

「その通りだ、」と和尚は大きな拳を握りしめながら言つた、「わしは貴方にこの拳を振舞ひ申さう。」  
「わしはそのやうな贈物は決してお受け致しません、」と騎士は言つた。「わしは貴僧の拳を借金としてなら、甘んじてお受け致します。併しわしはそこにゐる貴僧の捕虜が自分の商賣で高利を取り立てますが、それを取り立てると同様の高利をつけて、お返しいたすことにしよう。」

「わしはすぐさま、その證據を見るところにしよう。」と和尚は言つた。

「おいこら!」と隊長は叫んだ、「お前はどうかしたのか? 氣狂ひ坊主め、我等の寄合所の樹の下で争ふとは?」

「喧嘩ではない、」と騎士は言つた、「たゞ友誼の交換に過ぎないのだ。御坊、勇氣があるなら、かゝつて參れ——若し貴僧がわしの打撃に堪へるなら、わしも貴僧のに堪へるつもりだ。」

「貴方は頭の上の鐵鍋で得をして居られる、」と僧侶は言つた。「だが、勝手にお着けなさい——たとひ貴方が眞鍮の兜を冠つたガスのゴライアス(イスラエルの敵ペリシテ軍の代表戦士である。舊約聖書、撒母耳前書十七章)であらうとも、打ち倒さずにはおかないぞ。」

和尚は日に焦けた腕を肘のところまでまくり上げ、満身の力を籠めて、牡牛さへも打ち倒すやうな打撃を騎士に與へた。併し相手は岩のやうにびくともしなかつた。周圍にゐた郷士達は一齊に高い叫び聲を擧げた。何故と云ふにその僧侶の拳の力は彼等の間には名代のもので、いたづらにしろ、眞面目にしろ、彼の拳を喰つては、その力を知る機會を持たないものは殆んどなかつたからである。

「さて、和尚、」と手袋を脱ぎながら騎士は言つた、「たとひ頭上には有利なものを着けてゐたとしても、手には何にも持たぬことにしよう——眞の男らしくちつと立つて居れ。」

「おのれを撃つ者に頬を向けよ。」(舊約聖書、耶利米哀歌三、十三章三十節の冒頭の言葉)と僧侶は言つた。「若し貴方が、愚僧をこの場所からちよつとでも動かせたら、愚僧は猶太人の身代金を進んで貴方に進上致さう。」

肥つた僧侶は劇しい挑戦の態度でかう言つた。併し誰が運命に勝つことが出来よう？ 騎士の打撃は非常な力と熱意を籠めて打ち下ろされたので、和尚は眞逆様に地面に轉んだ、居合はせた見物人は、みなびつくりした。が、彼は怒りも狼狽もせず立ち上つた。

「兄弟よ、」と彼は騎士に言つた、「貴方は貴方の力をもつと慎重に使用なさるべきであつた。もし貴方が愚僧の顎をぶち砕いたとしたら、愚僧は辻褃の合はぬ彌撒をぶつ／＼唱へただらう、何故と申せば、笛吹きが下顎をなくしたならうまく吹けませんからな。とは云ふものゝ、もう敗れたからには決して貴方と撲り合ひをしないと云ふ仲値りの證據に、愚僧は手を差し出します。亂暴なことはもう止ませう。そこで猶太人の身代金を取ることにしませう、豹はその斑點を變へぬと同様に、猶太人はいつまで経つても猶太人なのです。」

「貴僧は、」とクレメントが言つた、「あの拳を耳の上に受けてから、猶太人の改宗を半分も信じなくなりましたなあ。」

「おいこら、ならず者め、お前なぞが改宗について何をぐづ／＼言ふのだ？——はて、こゝには尊敬といふものはないのか？——みんな主人で家來はないのか？——奴、お前に言ふが、わしは騎士殿の打撃を受けた時には、幾分酔ひ加減であつた、さもなければ、わしはぢつと動かずにゐた筈だ。併し若し貴様がそれに就いてもつと嘲るなら、わしが受けると同じく、與へることも出来るといふことを思ひ知らせてやらう。」

518

「一同鎮まれ！」と隊長は言つた。「ところで、猶太人、お前の身代金はどうするつもりだ。お前の種族がすべての基督教徒の國では、呪はれたものと考へられてゐることは言ふまでもないのだ、そして實際、我々は、お前のこゝにゐることに我慢が出来ないのだ、だから、わしが別の種族の捕虜を吟味する間に、お前の渡すべき贈物のことを考へて置け。」

「フロン・ド・ブーフの家來の多くは捕へられましたか？」と黒裝束の騎士は訊ねた。

「身代金を取るやうな目ぼしい奴は一人もゐません、」と隊長は答へた。「一組の雜兵共が居りましたが、その者共は放免してやつて、新たな主人を捜せと言つてやりました——復讐と利得の爲めには萬事抜かりなくやつて了ひました。彼等の群は三文の値打もございません。私の申す捕虜と云ふのは、これらよりも立派な分捕品だ——彼の馬具と衣裳とから判断しますと、情婦のもとへ急ぐ美しい僧侶らしいございます。その立派な高僧が、やつて参りました、かささぎのやうに身も軽々と。」そして、二人の郷士に挟まれて、讀者諸君も、前よりよく知つてゐられる彼のジールヴォールのエイマ僧正が、浪士の首領の森の玉座の前に曳き出された。

(三十三)

武士の精華ともいふべき君

タイタス・ラーシヤスはいかゞ致されましたな？

マーシャス。兎角命令に忙しい人の習はし、  
或は死刑を、或は流罪を宣告し、  
或は憐み許し、或は嚇しなどして居りまする。

(「コリオレイナス」)

囚はれの僧院長の容貌や態度には、憤慨と氣狂ひじみた虚飾と肉體的苦痛とが妙にこんがらがって現はれてゐた。

「これはまたどうしたことだ？」と彼は言つた。その聲の中にはいま書いた三つの感情が含まれてゐた。「これは何といふ振舞だ？ 僧侶に手をかける其方等はトルコ人かそれともまた基督教徒か？ 『主の僕に手をかける』といふことがどういふことか其方等は知つてゐるか？——其方等はわしの鎧を奪ひ——珍しい型のレイスで拵へた長袍を引き裂いた、それは大僧正が着てもよいものだ——若し他の人がわしのやうな目に會うたなら其方等に『破門を申し渡すぞ』と言つたことであらう。けれどもわしは穩かな人間であるから、其の方等がわしの乗馬を返し、わしの兄弟を解放し、わしの鎧を戻し、大急ぎで百クラウンをジョルヴォール僧院の祭壇で彌撒をとり行ふ料に寄進し、次の精靈降臨節まで、鹿の肉を食べない誓ひをするなら、この狂氣の振舞に就いては、これ以上何も言はぬことにしよう。」

「神父様。」と浪士の首領は言つた。「わしの家來どもが御身の父親らしいお叱りを頂戴するやうな御待遇を致しましたことは、まことに申譯もない次第でございます。」

「待遇とや！」森の首領の溫和な調子に力を得た僧侶は叫んだ、「あれは立派な種類の犬にもふさはしくない取扱ひだらう——基督教信者に對してはなほ更——僧侶にとつては更になほ一層——殊にジョルヴォールの神聖な教區の僧院長にとつては全くふさはしからぬ取扱ひだ。こゝにアラン・ア・デールといふ不信心な酔ひどれの吟遊樂人がゐる——やくざ者め——そのみではない、彼がすでにわしから奪つた財寶、即ち極めて高價な黄金の鎖や、二重指環などの他に四百クラウン。身代金を添へて拂はねば、殺して了ふぞとおどかしたのだ。そして彼等の荒々しい手で破られ碎かれた物の他に、香箱や、銀の毛捲鏝なども奪はれたのだ。」

「アラン・ア・デールが貴方のやうな立派な人をさやうに取扱ふ筈はございません、」と首領は答へた。

「それは聖ニコデマスの福音のやうにまことの事なのだ、」と僧院長は言つた、「彼は數々の酷い北國の罵詈の言葉を以て、わしを綠林の中の最も高い樹の頂きに吊すと誓言したのだ。」

「まこと彼がそのやうなことを申しましたか？ でしたら、僧院長殿、彼の要求にお従ひ遊ばした方がよろしかつたらうと私は存じます——と申しますのは、アラン・ア・デールは一旦誓つた以上はきつとその言葉を守る男だからです。」

「貴方は私に戯れて居られるのか、」と苦笑を浮べながら、驚いた僧院長は言つた、「私は面白い冗談なら、いつでも心から歓迎する。けれど、ハッ！ ハッ！ ハッ！ 歡樂が一晩中續けば、翌朝になつた

ら、眞面目にならなきやなりません。」

「だから私は懺悔聽聞僧のやうに眞面目だといふのです。」と浪士は答へた。「僧院長様、貴僧はどつさり身代金を拂はねばなりませんぞ、さもないと、貴僧の僧院では恐らく新しい僧正を選ばねばなりませんまい。と云ふ譯は貴僧は再び元の椅子にお坐りなさらなさいでせうから。」

「僧侶に對してそのやうな事を言はれるとは——御身達は一體基督教徒なのか、」と僧院長は言つた。

「基督教徒かと言はるゝのか！ 如何にも、我々は基督教徒だ、そしてその上に我々の間にも僧侶があるのだ。」と浪士は答へた。「あの肥つた牧師を呼び出して、このことに關する本文を、この僧正殿に説明させたがよい。」

半ば酔ひ、半ば醒めた和尚は、緑衣の上に僧衣を無造作に纏ひ、今は昔、譯も分らず、空で習ひ覺えた切々のものを、残らず思ひ出して言つた、「神父殿、御安康をお祈り致します——貴僧はようこそ緑林へおいでなさいました。」

「これは何といふ不信な狂言なのか？」と僧院長は言つた、「若し貴僧が本當に聖職について居られるのなら、こゝでモリスダンスの踊手のやうにびよこ／＼首を下げたり、鑿め面をしたりしてゐるよりは、どうしたらこの人達の手から脱れるかを、私にお教へ下さる方が、遙かに立派な振舞でせう。」

「いかにも、僧正殿、」と和尚は言つた、「私は貴僧を逃がす唯一つの方法しか存じ申さぬ。今日は聖アンドリューの日(計十期)なので、我等は十分の一の税を取り立てゝゐるのです。」

「併し、それは教會の税ではありませんまい、」と僧院長は言つた。

「教會と在家との兩方でございます、」と和尚は言つた、「ですから、僧正殿、不義の財を以て己が友とせよ(新約聖書、路加傳十六章九節にあり)だ——何故と云ふに、他の友情で御身の今の役には立ちさうもないからな。」

「私は愉快的森の人々が心から好きだ、」と僧院長は調子を和げて言つた。「ところで、御身はわしをあまりひどくいぢめてはならぬ——わしは狩獵が巧みで角笛を朗かに快活に吹き鳴らしたり、すべての櫓の木が反響する程喚はつたりすることが出来る——さて、御身達はわしをあまりひどく取り扱つてはなりません。」

「彼に笛を渡せ、」と浪士は言つた、「わしは彼が自慢の手並を拜見するとしよう。」

エイマ僧正はそこで一吹き鳴らした。首領は首を振つた。

「僧正様、」と彼は言つた、「御身は楽しい節を吹かれた、がそれだけでは貴僧の身を購ふことは出来ません——或る立派な騎士の楯の銘に書いてあるやうに、わし等は笛の一吹きのためには御身を許すことは出来ない。且つ又わしの知つたところでは——貴僧はフランスの新しい飾(グレイズ、ノット)、音やトラ・リ・ラで、古風なイングランドの角笛の調べを亂すものの一人なのです。——僧正様、只今の獵犬を呼びよせる華かな吹き方は御身の身代金に五十クラウンを増加させましたぞ、古いまことの雄々しい狩獵の調べを墮落せしめたといふ科によつてだ。」

「さうですか、」僧院長は不機嫌さうに言つた、「御身は狩がお氣に召さぬと見えますな。が、このわ

しの身代金の問題に就いてはどうぞもう少し寛大にして下さい。手短かに申せば——わしは是非とも一度だけは悪人共を助けなくてはならないから——五十人の援兵を連れずにウォトリング街路を唯一人で歩いた爲めに、わしは何程の身代金を支拂はねばならないのですか？」

「かうしたら如何でせう、」と隊長から離れた處にゐた一隊の指揮者が言つた、「僧正様が猶太人の身代金を定め、猶太人が僧正様のそれを定めるとしましては。」

「其方とはんでもない男だ、」と首領は言つた、「けれども其方の思ひつきは至極結構だ！——こら、猶太人、前へ出る。其處の神父エイマ様、福々しいジョルヴォール僧院の僧正様を見ろ、そして如何程の身代金を僧正様から取つたらよいか言つて見ろ。——お前はたしかにあの修道院の収入を知つてゐる筈だ。」

「あゝいかに、」とアイザックは言つた。「わしはこれまで坊さん方と取引をいたしました、そして小麦や大麦や、果物や、それからまた澤山の羊毛を買ひました。あゝ、あれは裕福な寺領です、そして坊さん方は脂肉を食つたり、長く貯へた上澄みのおいしい酒をたらふく召し上つてゐます、あのジョルヴォールの坊さん方は。あゝ、若しわしのやうな浮浪人があのやうな家を持ち、年々月々あのやうな収入が得られますなら、わしは捕虜の身を脱れる爲めには澤山の金銀を拂ふでございませう。」

「猶太人の犬め！」僧院長は叫んだ、「我等の僧院は禮拜堂を建てる爲めに借財を負うてゐるといふことはお前位によく知つてゐる者は他にはない筈ではないか——。」

「そして又この前の季節の穴藏の貯へと申しますと、ガスコンの葡萄酒も相當にお納め致しました筈で、」と猶太人は言葉を挿んだ。「が、それは——いや、それはほんの些細な事で。」

「この不信な犬の吠えるのをお聞きなされ！」と僧侶は言つた、「きやつと愚僧共が必要の爲めに、又寒さを防ぐ爲めに飲む許しを得てゐる酒の爲めに、寺領内の者が借財に苦しむやうになりでもしたやうに吐し居ります。この猶太の悪者は神聖な教會を罵倒してゐる、而も基督教徒はそれに耳を傾けてゐて、彼を責めようともしないわい！」

「そんな事は、何の口實にもならない、」と首領は言つた。——「アイザック、僧正が文なしの、丸裸とならない範圍で、支拂ひ得る金は幾らか申せ。」

「六百クラウンならば、」とアイザックは言つた、「僧正様はあなた方に立派に支拂つて、そして今迄通り立派に暮してゆけますでせう。」

「六百クラウン、」と首領は嚴かに言つた、「俺は満足するぞ——お前はよく申した、アイザック——六百クラウン——これを申し渡しますぞ、僧正様。」

「申し渡す！——申し渡す」と一群の者は叫んだ。「ソロモンでもこんな立派な申し渡しはしなかつたらう。」

「僧正様、貴僧は貴僧への宣告を聞かれたであらうな、」と首領は言つた。

「各々方、それはとんでもないことだ、」と僧院長は答へた、「そんな大金を何處で見附けられませ。」



う？ たとひわしが祭壇にある聖體器（聖餐用の聖餅を入れる器）や燭臺を賣り拂ふとしても、その金額の半分も得られますまい。してその目的の爲めには是非ともわしが自身でジョルヴォールへ参らねばなりません。で、人質として二人の僧侶をお預けしてもよろしい。」

「そんな當あてにならぬものを信用するわけにはいかん」と浪士は言った。「わし等は貴僧を留めて置かう、僧正様、して彼等二人を遣はして貴僧の身代金を持つて來させるといたさう。その間、貴僧には一杯の酒と一片きれの鹿肉とを差し上げませう。若し貴僧が狩が好きなら、貴僧のやうな北國人が見たこともないものをお目にかけてませう。」

「それともまた、お氣に召すなら、」浪士達の機嫌を取らうとしてアイザックは言った、「わしがヨークに使をやつて、わしの手にある金の中から六百ク라운を持つて來させることにいたさせう、若し僧正様がわしに受取證を書いて下さるなら。」

「アイザックよ、お前の望むものは何でも彼からとつてやらう、」と首領は言った。「してお前はエイマ僧正の身代金とそれからお前の分も一緒に支拂はねばならんぞ。」

「わしのものとは！ あゝ、勇敢な皆様方、」と猶太人は言った、「わしは零落おちぶれた人間でございませう。わしがあなた方に五十ク라운を支拂はねばならぬといたしましたら、わしは生涯乞食の杖をついて歩かねばなりませんまい。」

「そのことに就いては、僧正様に判断して貰はう、」と首領は答へた。「エイマ神父様、どうお思ひになりませうか？——猶太人めは澤山の身代金を出すことが出来るでございませう？」

「身代金を拂ふことが出来るかと問はれるのか？」と僧院長は答へた——「彼はあの有名なヨークのアイザックではないですか、アッシリアの奴隷にされたイスラエルの十種族の身代金をも拂へる程富裕なヨークのアイザックではないですか？——わし自身は彼をあまり存じませんが、わし共の土藏番と出納係とは彼と手廣く取引を致して居ります。その言ふところによると、ヨークにある彼の住居には基督教徒の何處の國でも恥辱と思はれる程金銀財寶が一杯だとのことでございます。こんな兇暴な蝮蛇まむしが國家の臟腑、いや神聖な教會のはらわたにまでも喰ひ込み、汚ららしい高利貸とゆすりとを働いてゐるまゝに任せておくのは、あらゆる基督教徒の胸には、實に不思議に思はれることなのです。」

「一寸お待ちなさい、」と猶太人は言った、「貴僧あなたの怒りをお鎮めなさい。そしてどうぞわしがどなたにも金を無理に貸したことがないと云ふ事を心にお留め置き下さい、ですが僧職の人にする在家の人にする、皇子にする、僧正にする、騎士にする、坊さんにする、アイザックの家を訪おもむれて金を借りる時には、そのやうな無禮な言葉を使ふ人は一人もございませぬ。その時には、『わが友アイザックよ、どうぞこれを肯きいてくれぬか、期限は堅く守るが、どうだ？』——とか、又は、『親切なアイザックよ、若しお前が人の爲めにつくす人なら、この急場でわしに友情を示してくれ、』とかと申します。それに、約束の期限が來て、わしが自分のものを請求いたします、するとその時には『猶太人の畜生め』とか、『エチプトの疫病でも（舊約聖書、出埃及記九章八節より十二節参照） 貴様の種族にとつつくがい、』とか、その他無禮な

粗々しい人々を動かして、あはれな流浪人達に反感を懐かせるやうな言葉ばかりを聞かされます。」  
「僧正様、」と首領は言った、「猶太人ではあるが、彼の言ったことは如何にも尤もである。それ故、これ以上の悪口は止して、彼奴の身代金の高をお言ひなさい。彼が貴僧の高を言ったやうに。」

僧院長は言った、「基督教國の僧侶と洗禮も受けない猶太人と同列に置かうとするのは、ラトロ・ファモス(名高)より他にはない——この言葉の意味はいつか他の機會に話して聞かさう。併し御身達がこの悪者に要求すべき身代金を聞かうと望むからには、わしは明かに申すが、若し彼から千クラウンより一ペンニでも少く取つたなら、御身自ら不當の罪に陥るぞ。」

「宣告だ！——宣告だ！」と浪士の首領は言った。

「宣告！——宣告！」と課税係は叫んだ。「從來、基督教徒(僧正)はさすが物分りがよくて、猶太人よりもずつと鷹揚に我々と取引をします。」

「我が先祖代々の神様、どうぞ私をお助け下さい！」と猶太人は言った。「あなた方は貧乏な、零落れた人間を破滅させようとなさるのか？——わしは最早子供もない、その上あなた方は、わしから生活のたつきまでも奪はうとなさるのか？」

「猶太人よ、若しお前が子無しなら、それだけ負擔も少ないわけではないか、」とエイマ僧正は言った。

「あゝ！ 殿様、エイザックは言った、「我々の一番可愛い子供が我々の情の故で、どんなに驚かされるか！」

てゐるか、あなたの掟では知る事が出来ないのだ——おムレベッカよ、わが愛するラッセルの娘よ！  
あの木の上の葉が一つく——金貨であり、その一つくの小金貨がわしの物であるとしたら、わしはその残らずの富をお前が生きてゐるかどうか、又あのナザレ人の手から脱れたかどうか知る爲めに捨てようものを！」

「お前の娘は黒い髪をしてはゐなかつたか？」と一人の浪士が言った。「そして銀で刺繍をした、絹のヴェールを掛けてはゐなかつたか？」

「その通りだ！——その通りだ！」老人は前には恐怖に顫へたやうに、今度はわが子を思ふ熱烈さに顫へながら言った。「ヤコブ様の祝福があなたの上にありますように！ あなたは娘の安否に就いて、何かわたしに知らせて頂くことは出来ませんか？」

「そんならあの女だ、」と郷士は言った、「昨日の夕方、あの傲慢な寺侍が、我等の隊伍を突破つた時、つれて行つたのは。わしは彼に向つて一矢を放たうと弓を引き絞つたが、あの娘が傷を蒙つてはならぬと思つて容赦した。」

「あゝ！」と猶太人は叫んだ、「たとへその矢が娘の胸を貫くにしても、矢を射て下さればよかつたのになあ——あの淫らな野獸のやうな寺侍の、穢れた寢床よりも先祖代々の墳墓の方がよほどましだつた。イカボド！ イカボド！  
(ヘブライ語で「光榮去れり」云々意) あゝ、光榮は我が家から立ち去つて了つたのだ。」

周囲を見廻しながら首領は言つた——、「各々方、かの老人は一猶太人に過ぎないが、而も彼の悲しみはわしの心をば動かすわい。——アイザックよ、正しくわし等と取引せよ——千クラウンの身代金の支拂はお前を全く無一文にするのか？」

アイザックは金錢に對する愛が、永年の習慣の力で、父親としての愛情とさへ争ふほどであつたので、自分の財貨を思ひ起し、色青ざめ、口籠り、なほいくらかの餘りがあるかも知れないといふことを、否定し得なかつたのである。

「よろしい——行け、」と浪士は言つた、「何はともあれ、わし等はお前に對してあまりに詮索はせぬつもりだ。金なしでその娘をサア・ブリアン・ド・ボア・ギルベールの爪から取り返さうとするのは、丁度尖のない矢で十二以上も又のある角を持つた立派な牡鹿を射ようとするのと同然だ——わし等は以前の身代金をエイマ僧正のと同類にしよう、或はまた百クラウンだけ下げてもよろしい、それはわし自ら損失として、その貴い團體には及ぼしはしない。さうすれば、わし等は猶太人の商人と基督教徒の僧侶と同等に取り扱ふと云ふ由々しい僻事ひがことを免れ得るし、お前は娘の身代金として五百クラウンだけ手許に残ることになるのだ。寺侍達は黒い眼の閃きと同じに、銀貨の輝きを愛するものだ——風向きが悪くならないうちに急いで金貨の響をド・ボア・ギルベールの耳に響かせるがよい。わし等の斥候の報告によると、彼は隣りにある彼の教團の僧院にゐると云ふことだ。——わしの楽しい仲間よ、わしの云ふことに間違ひはあるまいな？」

郷士達はその首領の意見にいつもの通り賛同の意を表はした。そして、アイザックは、自分の娘が生きてゐて、しかも取り返すことが出来るかも知れないと云ふことを知つて、心配の一半を取り除かれたので、寛大な浪士の足許に身を投げ出し、自分の鞆ひざを長靴にすりつけながら、浪士の縁へりの衣の縁に接吻しようとした。首領は多少輕蔑の様子を見せながら、身を引いて、猶太人に捉まらないやうにした。

「いや／＼、これ、立ち上れ！ わしはイングランド生れなんだから、そのやうな東方の禮拜は、あまり好まぬ——神に跪け、わしのやうな、哀れな罪人に跪くには及ばない。」

「その通りだ、猶太人よ、」とエイマ僧正は言つた。「祭壇の下僕しもべによつて代表される神に跪け、お前が眞實ほんたうに後悔し、聖ロバート（シートの建設者）の宮に適當な捧げ物をするなら、お前自身やお前の娘レベッカの爲めにどのやうな恵みが下らうも知れぬではないか？ わしはあの少女の爲めに悲しむものだ、と申すのは彼女は色白く容貌みづかうるはしいからだ。わしは彼女をアシビの試合場で見た。そしてブリアン・ド・ボア・ギルベールは、またわしの大いに信頼することの出来る男だ——わしの口添へが、どんなに御身の爲めに効果きこうがあるか、考へて見るがよい。」

「あゝ！ あゝ！」と猶太人は叫んだ、「四方八方から掠奪者がわしに刃向はむかつて来る——わしはアッシリアの掠奪者の餌食であるばかりでなく、エジプトの掠奪者の餌食とまでなつてしまつたのだ。」

「貴様の呪はれた種族の運命がそれでなくて何だらう？」と僧院長は答へた。「そのわけは聖書にも書かれてある通り、『彼等は主の言葉を顧みず、されば彼等には何の叡智なし。それ故われは彼等の女を

異邦人に與へん。』つまりこんどの場合のやうに寺侍に與へるのだ。『而して彼等の財寶をば見知らぬ人に嗣がしめん。』丁度こんどの場合のやうにこの正直な紳士達にな。』

アイザックは深い溜息を吐いて、兩手を振り絞つたり、悲哀と絶望の状態に戻つたりし始めた。併し郷士の首領は彼を側へ呼び寄せた。

「アイザック、」と首領は言つた、「こんどのことでお前がしようと思ふことをよく考へてみるがい。わしの考へではあの僧侶と友達になる方がいゝと思ふ。アイザック、彼は虚榮の強い男で、而も貪慾な男だ、少くとも彼は豪華な暮しをする爲めに金が入用なのだ。お前はたやすく彼の欲望を満たすことが出来る筈。貧乏だなぞといふお前の言拔けにわしが欺だまされると思ふな。アイザック、わしはお前が金袋を入れて置く鐵の箱をさへ知つてゐるのだ——はて、お前のヨークの屋敷の地下室に入る所に、林檎の木の下で道しるべとなつてゐるあの大きな石迄も知らないでどうなるものか？」猶太人は死人のやうに蒼ざめた——「けれど少しもわしを怖れるには及ばない、」と郷士は言葉をつづけた、「何故と云ふにわし等は昔からの馴染だからな。お前はお前の美しい娘レベッカが、ヨークの牢獄から救ひ出して、病ひが癒るまで逗留させ、それから恢復すると一片の金を添へて送り出した、あの病氣の郷士を覚えてゐないのか？——お前は高利貸ではあるが、あの僅かな銀貨ほどよい利子で金を貸したことはあるまい、と云ふのはあれが今日お前に五百クラウンといふ金を得させたからだ。」

「ではあなた様は、あのわし等がディッキン・ベンド・ザ・ボウと呼んだ方ではございませぬか、」とアイザックは言つた。「わしはどうもあなたの聲の調子に聞き覚えがあると思つてゐました。」

「いかに、わしはベンド・ザ・ボウだ、」と首領は言つた、「そしてロックスリイとも云ひ、それらのほかにも尙ほよい名前を持つてゐるのだ。」(他のよい名は「ロビン・ラッパ」のこゝ)

「併し、親切なベンド・ザ・ボウ様、その地下室のことに就いては、あなたは間違つて居られます。たしかに、その部屋にはわしが喜んであなたに差し上げてもよいやうな二三の商品しか入つてはゐません——あなたの部下の胸着をつくる百ヤードの緑のリンカン布と、弓を作る百ステープのスペインの水松と、強い、丸い、丈夫な絹の弓弦ゆづるの百筋と——これらのものは、あなたの御親切に對して差し上げます、正直なディッキン様、若しあなたがあの地下室に就いて秘密を守つて下さるならば——私の親切なディッキン様。」

「やまね(栗鼠に似た獣で、語原的に言ふとオマウス)のやうに黙つてゐよう。」と浪士は言つた、「そして又わしはお前の娘のことを悲しんでゐないなどと思つてくれるな。けれどもそれは已むを得ない。寺侍の槍兵達は廣野では、わしの弓兵隊が、とても敵對出来ないほどに強いのだ——彼等は塵芥ちりかたのやうにわし等を蹴散らしてしまふだらう。だが、若し連れ去られるのがレベッカと知りさへしたら、施す術すべもあつたかも知れなかつた。がそれも今となつては策略はかりごとをめぐらすより他に道がない。さあ、お前に代つて僧院長と談判するでしょうか？」

「ディッキン様、若しあなたが出来ることなら、どうぞわしの一番可愛い子供が戻りますようにお

助け下さいませ！」

「お前の無暗な貪慾で、わしの妨げをしなければ、」と浪士は言った、「わしはお前に代つて彼と談合しよう。」

彼はそこで猶太人の處から離れて行つた、けれども猶太人は影のやうにびつたりと彼の後に跟いて行つた。

「エイマ僧正様、」と首領は言った、「わしと一緒にあの樹の下まで貴僧だけおいでを願ひたい。噂によると、貴僧は職掌柄にも似合はぬほど、酒と婦人の笑顔をお好みなさるとやら、僧正様、けれどもわしはそんな事はなんとも思つてゐない。また聞くところによると、貴僧は一對の見事な犬と、一頭の神速な馬とを愛してゐられるさうだな。金目のかゝる物をお好みになるからには財布一杯の黄金がお厭でないのも尤もな次第だ。けれどもわしは貴僧が壓制か残虐をお好みになつたことをこれ迄聞いたことがございません。——ところで、若し貴僧がお友達の寺侍におとりなし下さつて、彼の娘の自由を得られますれば、百マルクの銀貨の入つてゐる財布をお慰みやお氣晴しの料として、アイザックが貴僧に喜んで差し上げようと申してをります。」

「わしの手から奪ひ取られた時と同じやうに恙なく、穢されもしないで、戻つて來ますれば、」と猶太人は言つた、「さもなければ談判は無用でございます。」

「黙れ、アイザック、」と浪士は言つた、「さもないとわしはお前の爲めに盡すことは止めにするぞ。」

「エイマ僧正様、このわしの申出に對して何とお答へ召されるでせうか？」  
 「その事たるや、」と僧院長は言つた、「實に複雑な問題なんだ。何故と云ふに、若しわしが一方に於て善事を行ふとしても、他方に於て、一猶太人の利益となることによつて、わしの良心に背くことになるからだ。とは云へ、若しそのイスラエル人が我等の寄宿舍の建設に幾らか寄附して教會を賑はさうとすれば、わしは良心に誓つて彼の娘の事に就いて盡力するだらう。」

「御意には叶ふまいが、その教會の寄宿舍の爲めに、二十マルクの寄進をするか、」と浪士は言つた、  
 「——黙つてゐろ、こらアイザック！——それともまた、祭壇に一對の銀の燭臺を獻することゝするか、どちらでも厭とは言ひません。」

「いや、だが、親切なディコン・ベンド・ザ・ボウ様——口を挿まうとしながら、アイザックは言つた。  
 「この猶太人め——この獸め——この吝嗇者奴！」たまりかねて郷士は言つた、「若し貴様が何時迄も貴様の娘の命と名譽とを貴様の汚れた利益に比較して、輕重を量つてゐるならば、三日と經たぬうちに、わしは貴様がこの世で持つてゐるだけの金を、一厘も残らず全部きつと取り上げてやるぞ。」

アイザックは縮み上つた、そして口を噤んだ。

「してこの擔保として、何をわしは受け取つたらよいでせう？」と僧院長は言つた。

「若しアイザックが貴僧のとりなしに依つて成功して歸りました時には、」と浪士は言つた、「わしは聖ヒューバートにかけて誓ひますが、必ず彼にその金額を銀貨で拂はして御覽に入れます。さもなければ

彼がその金額の二十倍の金を支拂つた方がましだと、かうわしは彼と談判するつもりです。」

「では、猶太人」とエイマ僧正は言つた、「わしが是非ともこの事件に與かる以上は、お前の筆箋を使はして貰ひたい——いや／＼、お前のペンを使ふのは御免だが、それを使ふ位なら、寧ろ、一日中絶食でもした方がましだ。と云つて何處でペンを手に入れようか？」

「若し貴僧が我慢して猶太人の筆箋を使用する事が出来れば、ペンはわしが代りを見附けることにしよう」と郷士は言つた。そして、弓を引き絞つて彼等の頭上を飛び翔つてゐる雁に矢をねらつた、その雁は遙かに遠い、そして物淋しいホルダネスの沼澤の方へ向つて飛んでゆく一列の雁の先頭であつた。その雁は郷士の放つた矢に刺し貫かれて、ひら／＼と舞ひ落ちた。

「そら、僧正様」と首領は言つた、「ジョルヴォールの僧侶どもが、年代記など書かなければ、百年間も使へる程澤山な鷺ペンが出来ました。」

僧院長は腰を下ろし、ゆる／＼とブリアンド・ボア・ギルベールへの手紙を認め、そして、注意深く手紙の封をして、次のやうに言ひながら猶太人に渡した、「これさへあれば、お前は無事にテンプルストウの分院へ行くことが出来る、そして、お前の手から用を辨じたり、金錢を差し出したりすれば、お前の娘の救助は非常に甘く行くだらう。何故と云ふに、實際、あの親切な騎士のボア・ギルベールは、唯では何事もせぬといふ手合だからな。」

「では、僧正様」と浪士は言つた、「貴僧が約束の身代金六百クラウンの受取證を猶太人に渡しさへ

すれば、この上貴僧を引き止めはしません——わしは彼をわしの勘定方と認めるのです。して若し貴僧に代つて今彼の拂ふ金額を後に貴僧が彼との取引になつて、承認することを躊躇されたら聞き及べば、屹度わしは貴僧の居られる僧院を焼かすには置きませぬぞ。たとひその爲め、わしが十年早く絞首臺にかけらるゝといたしましても！」

ボア・ギルベールへの手紙を書いた時の鄭重さとは打つて變つた亂暴さで、僧院長は借用證一札を書いた——即ち彼が身代金に困つた折、立換へて貰つた六百クラウンをヨークのアイザックに返済し、而もその金額に就いては、寸厘の違算のないことを堅く約束すると認めた。

「さてそこで」とエイマ僧正は言つた、「わしはわしの騾馬と乗馬との御還附と、わしにつき従ふ僧侶達の御解放と、又組合せ指環(二つも三つも環を組み合はせて作)や寶石や、美しい衣裳などの御返還とを貴殿にお願ひするのだ。それらの物は先にわしが強奪されたのだが、眞の捕虜としての身代金は、もう御意を満たしたわけですからな。」

「僧正様、貴僧のお仲間就いては」とロックスリイは言つた、「彼等はすぐさま追放することにしよう、引き止めるのは正しくあるまい。それから貴僧の馬と騾馬に就いては、ヨークに着くまでの路銀を添へてお返しませう、と云ふ譯は、貴僧から旅行の手段(馬や騾馬や路銀などをさす)まで奪ふのは残酷であらうからな——けれども指環や、寶石や、鎖や、その他の物に就いては、我々は感じ易い良心をもつ人間なのですから、現世の浮華虚榮に無頓着であるべき貴僧のやうなお方には、指環や、鎖や、それから、他の

つまらぬ華美な裝飾は身につけると、僧侶の根本教則を破るやうな強い誘惑となりますからお返しはしない積りだ。」

「各々方、各々方が教會の財産に手を觸れないうちは、」と僧院長は言つた、「なんとでも勝手になさるがよい——これらのものは神聖なものだから、若し俗人の手がそれに觸れたら、いかやうな神罰が降らうも知れぬ。」

「わしがそれを預ることに致しませう、僧正様、」とコブマンハーストの隠者は言つた、「と申すのは、わしが自分にそれをつけたうございませうので。」

「友よ、いや兄弟よ、」自分の疑惑のこの解決に對する答として僧院長は言つた、「若し御身が本當に聖職にずつと前から就いて居られるのなら、どうか御身が今日の働きに與あづかられた事に對して、どんな風に宗教裁判の役人に答へなさるか知りたいものだ。」

「僧院長様、」と隠者は答へた、「わしは自分自身で監督をする小さな僧正管區に屬してゐます、そこでヨークの大僧正もジョルヴォールの僧院長も、全修道院も何とも思ひは致しません。」

「御身は全く正規を外れてゐられる、」と僧院長は言つた、「適當な理由もなしに神聖な役目を僭おそし、神の儀式を穢けがし、助言を求むる人々の魂を危険に陥おとしれる變則な僧侶の一人だ。即ちラテン譯聖書にあるやうにパンの代りに彼等に石を與へる徒ぢや。」(新約聖書、路加傳十、一章十一節に在り)

538 「いや、」と和尚は言つた。「若し愚僧の腦天の皿がラテン語(下らない)で碎かれてもしてゐようものなら、それは疾くの昔に亡くなつて了ひましたらう、が、幸ひ、下らぬ勉強に腦をなやまさなかつた爲めに、わしの頭腦は健全です。——たしかに、貴僧のやうな傲慢な僧侶の仲間から、その所有の寶石や、虚飾品などを奪ひ去りますのは丁度昔イスラエルの子等が神の恵みを受けて、エジプト人から金銀珠玉を奪つたやうに、正當な事でございませう。」(舊約聖書、出埃及記十、二章三十五節三十六節)

「御身は賤しい無學の坊主だ、」と非常に怒つて、僧院長は言つた、「わしはお前を破門するぞ。」

「あんたこそわしよりもつと賤しい泥棒か異教徒らしいわい。」和尚も憤つて言つた。「わしはそのやうな侮辱を、教區の人々の前で忍ぼうとは思はない、わしは御身に對して法の兄弟であるのに、御身が愚僧を誤魔化すことを恥辱と思はない上はな。ラテン譯聖書にあるやうに、わしはあんたの骨々をへし折つてくれようぞ。」(舊約聖書、以賽亞書、二十八章十二節參照)

「こらく、」と首領は言つた、「僧侶同志がそんな言葉使ひをしてよいものか?——和尚殿、靜かになさい——僧正様、たとひお心が未だ十分に和らげられなくとも、これ以上、和尚を怒らせてはなりません。——隠者殿、この神父様を身代金を支拂つた人として、穩かに出發させてお上げなさい。」

郷士達は激怒した僧侶達を引き離した、二人は互に下手なラテン語で罵り合ひながら、なほも聲を高めるばかりであつた、そのラテン語を僧院長は相手より流暢に發音し、隠者は相手より猛烈に吐き散らした。僧院長はとうとう自分に氣が附いて、浪士味方の牧師のやうな微賤無學の僧侶と争つては、自分の威嚴を害ふことを悟り、部下を従へて、彼等に出會ふ以前から見ると、遙かに威儀も張ら

ず、扮装いせたちなども一層使徒らしくつくろひ、馬を驅つて馳せ去つた。

が、こゝに猶太人が僧院長の爲めに支拂ふべき身代金と、自分のそれとに對し何か保證になるものを示すことが残つてゐた。そこで彼は、署名をして封をした手紙をヨークにゐる彼の種族の兄弟に送つて、その手紙の持參者に千クラウンの金額を支拂ひ、且つ列擧してある品々を手に手渡すことを要求した。

「わしの兄弟のシーバが、深い溜息を吐きながら、彼は言つた、「わしの倉庫の鍵を持つてゐます。」

「それからまた地下室の鍵もな？」とロックスリイは小さい聲で言つた。

「いや、いや——とんでもない！」とアイザックは言つた。「誰にしろ、その祕密を知る時は凶事が起るのだ。」

「わしには大丈夫だ、」と浪士は言つた、「そして又このお前の手紙がその中に指定して、書き記されてある金額を産み出すことも——だがどうした、アイザック？ 死んだのか？ 正氣を失つたのか？」

千クラウンの支拂が娘の危難をお前の頭から逐ひ出して了つたのか？」

猶太人は吃驚して立ち上つた——「いや、ディコン様、いや——わしはすぐに出發いたします。——さやうなら、善人とも言ひかねるし、思ひきつて悪人とも呼びかねるし、また呼びたくもないあなた様。」

併しアイザックが出發する前に、浪士の首領は彼に次のやうな別れの勸告を與へた。——「アイザック

よ、賜物を十分にしろ、そして娘の安全を計る爲めには財布を惜しむな。確かに、お前が娘の爲めに物惜しみした金は、後になつて丁度溶とした銀かねを嘔のみ下すやうな、無量の苦悶をお前に與へることだらう。」

アイザックは深い溜息と共に肯うなづいて、彼の旅路たびぢに就いた、供には二人の丈高たけい森の浪士が立つたが、彼等は彼の道案内を勤めると同時に、森の中で彼の護衛人となつた。

少なからぬ興味をもつてこれらの成行を眺めてゐた黒裝束の騎士は、今度は自分が浪士に暇乞ひをする番になつた。彼は又法律の正當な保護と威光とを受けない人々の間に、斯くも澤山の禮節のあることを見て、驚嘆の言葉を禁ずることが出来なかつた。

郷士は言つた、「騎士殿、いゝ果實が往々哀れな木なに生るものだ。そして又悪い時勢が必ずしも全くの悪いもののみを生ずるとは限らない。このやうな法律のない境遇に置かれた人々の間にも、疑ひもなく、その特權を控へ目に用ゐようとすることもあり、またこのやうな生計なまひを營まねばならぬことを悔んでゐるものがございます。」

「してその中の一人に、」と騎士は言つた、「恐らく、わしは今話してゐるのだらう。」

「騎士殿、」と浪士は言つた、「わし等は互に祕密を持つてゐます。御身はわしについて御隨意に判斷を下さるゝがよからうし、わしも亦御身に就いて勝手な想像をめぐらしてもよいわけです。尤も我々の矢は孰れも狙つた的ぼつを外れるかも知れませんが。けれどわしは御身の祕密に立ち入らうとは願ひま



せんから、わしが自分の秘密を打ち明けぬとお腹立ち下さるな。」

「お許し下さい、勇敢な浪士殿、」と騎士は言った。「貴方の非難は道理至極だ。けれども恐らく我々はこの後、互に會ふ時にはもつと分け隔てなく出来るだらう、——先づそれまでは友達としてお別れする事にしよう。」

「手をかけて誓ひます、」とロックスリイは言った。「そしてわしはそれを生粹まじまじのイングランド人の手と呼びます、たとひ今の間は浪士であつても。」

「わしの手も差し出します、」と騎士は言った。「わしはこの手が御身の手に握られて光榮に存じてゐます。何故と云ふに、幾らでも悪事を犯す力を持ちながら、それを耐へて善事を行ふ人は、たゞその善行の爲めにのみ褒むべきばかりでなく、悪事を心に戒めて耐へ通した事に對しても亦褒むべきです——。勇ましい浪士殿、さらばだ！」

かうして麗はしい友達フレンドは別れた。そして柳フエック銃ロック紋の騎士は、彼の強健な戦馬に跨つて、森の中を馳せ去つた。

(三十四)

ジョン王。これ、予が友、

彼は予が行く手に横はる毒蛇だ。

予がこの足の向ふ處いづこにも、

彼は予が前に横はるのだ。——

予が言葉の意味が分つたか。

(ジョン王)

ヨークの城(一〇六八年この都を占領したキリアム勝利王の建てた城)では、素晴らしい饗宴が催され、ジョン親王は兄の王位を奪はうとする野心を遂げるのに力を貸してくれさうな貴族や、高僧や、首領等をそれに招待した。彼の役に立つ、抜目のない家來ワルデマール・フィッターズは、その間にあつて密かに畫策はかりごとをめぐらし、自分等の計畫を公に宣言するのに必要な程度の勇氣を煽り立てゝゐた。併し彼等の計畫は、その同盟の二三の主おもな手足ともなるべき者の缺席の爲めに遅おそらされた。フロン・ド・ブーフの獸的ではあるが、頑強な、向う見ずの勇氣と、ド・ブラシーの陽氣な氣質と、大膽な振舞と、ブリアン・ド・ボア・ギルペールの賢さと、内戦の經驗と、有名な豪膽とが、彼等の陰謀の成功の爲めには頗る大切であつたのだ、それで、内心では彼等の不必要な、意味の解らぬ不參を忌々しく思ひながらも、ジョン親王もその補佐役も、彼等なくては思ひ切つて事を行ふことは出来なかつたのである。それに猶太人のアイザックも亦行方不明となり、それと共にジョン親王がそのイスラエル人とその同胞達と約束した一定の額の軍用金を得る望みも消え失せてしまつた。この缺乏はかゝる危急の場合に當つて、殆んど致命傷となりさうであつた。

ド・ブラシーとボア・ギルベールとが、その盟友フロン・ド・ブーフと共に、捕はれたか殺されたかしたと云ふ取り止めもない噂が、ヨークの町に弘まり始めたのは、トールストーン城が陥落したその翌朝のことであつた。ワルデマールがその噂をジョン親王に傳へ、且つそれに附け加へて、彼等はサクソン人セドリックとその家來とを攻撃する目的で、僅かの手兵を引率して出發したのであるから、その噂は或は本當かも知れないと言つた。外の時なら親王もこの亂暴な振舞を面白い冗談として取り扱つたであらうが、今はそれが彼自身の計畫と衝突したり、それを妨害したりするので、彼はその違犯者の非を鳴らし、アルフレッド王にもふさはしいやうな調子で、法律の無視だとか、公の秩序を紊し、個人の財産を侵害するものだとか云ふやうなことを盛んに口走つた。

「不埒な掠奪者達！」と彼は言つた——「若し予がイングランドの君主ともならば、予はそのやうな違犯者を、彼等自身の城の跳橋の上に晒首にもしてくれよう。」

「併し、イングランドの君主とおなり遊ばす爲めには、」と彼の腹心の家來は冷やかに言つた、「殿下はこれらの不徳の掠奪者達の犯則をお堪へ遊ばすばかりでなく、彼等が始終犯してゐる法律を擁護して、彼等を懲らさうとの當然な御熱意はお抑へ遊ばして、却つて彼等に保護をお與へなさる事が必要でございます。若しもサクソンの下司共が殿下の御夢想を十分に悟つてゐましたら、城の跳橋を絞首臺に變へるといふ面倒もなくて、私達も大變助かる事でございます。そしてかの大膽不敵のセドリックはそのやうな考への浮びさうな男のやうに思はれます。殿下はよく御心付きでもございませうが、

フロン・ド・ブーフと、ド・ブラシーと、寺侍との留守の間に事を擧げるのは危険でございませう。とは云へ、我々は最早無事に退くことが出来ぬ程深入り致して居ります。」

ジョン親王は焦々として自分の額を打つた、それから部屋を大勝にあちこちと歩き始めた。

「悪黨め、」と彼は言つた、「卑劣な、裏切者め、こんな危急の場合に予を見捨てるとは！」

「いや、寧ろ愚かなふらくした狂人と仰しやつた方が、よろしうございませう、」とワルデマールは言つた、「かうした大事が抄られてゐる最中に、たはけた振舞ばかりしてゐるとは全く呆れた狂人でもでございます。」

「どうしたらいいのか？」とワルデマールの前に突然立ち止まりながら親王は言つた。

「どう致しましたらよろしうございますか、私には一向に解りかねます。」と彼の補佐役は答へた、「但し私が既に命令を下しました事だけは存じて居ります。——私はこの不運を救ふ爲めに出来るだけの力を盡しもせずに、たゞ殿下とそれを歎く爲めにやつて參つたものではございません。」

「ワルデマールよ、其方は實に予の立派な天使だ、」と親王は言つた。「予が御身のやうな補佐役を持つてゐるからには、ジョンの御代は我が國の歴史にも名高いものとなるだらうぞ。——其方は何を命令したのか？」

「私はド・ブラシーの副官であるルイ・ウィンケルブランドに命じて、乗馬の用意の喇叭を吹き鳴らさせ、軍旗を打ち振らせ、味方の救助の爲めに尙ほ出来るだけの事を試みる爲めに、フロン・ド・ブーフ

の城を指して早速出發致させました。」

ジョン親王の顔は、駄々つ子が侮辱だと思はれる事をせられて起すやうな奮激で赤くなつた。

「本當にまあ！」と彼は言つた。「ワルデマール・フィッツァーズ、御才はあまり遣り過ぎたぞ。予のゐる町で、予の特別な命令も待たずに、喇叭を鳴らさせたり、軍旗を掲げさせたりするのは、餘りに差出がましい振舞ぢやないか。」

「何卒御勘辨を願ひます、」と内心では、主君の下らぬ虚榮心を呪ひながらフィッツァーズは言つた。「然しながら、時期が切迫して、一刻の猶豫も、重大な結果を惹き起さうも知れなかつたので、殿下の御利害にかうも關係の深い大事件に、これ位ゐの責任をわしの身に引き受けるのは、當然と考へたのでございませう。」

「フィッツァーズよ、許して遣はずぞ、」と重々しく親王は言つた。「御身の志が御身の早まつた行ひを償うてゐる。——だが其處へ来るのは誰か？——確かに、ド・ブラシーだ！——而も彼は妙な風采をしてやつて來たわい。」

それは果してド・ブラシーであつた——「餘り激しく馬に拍車を入れた爲めに血に染まり、急いだ爲めに烈火のやうに眞赤になつてゐた。」（シエイクスピヤの「リチャード二世」三幕三場五十八行にある言葉）——彼の甲冑は、破れたり、損はれたり、處々方々に血が着いてゐたり、前立から拍車まで埃や塵に蔽はれたりしてゐて、最近の物凄い戦闘の名残を止めてゐた。冑を脱いで、それを卓の上に置き、彼は自分の消息を述べる前に、氣を取

り直さうとするやうに一瞬間立つてゐた。

「ド・ブラシーよ、」とジョン親王は言つた、「これはどうした譯か？——話せ、命令だ！——サクソン人が叛逆を企てたのか？」

「話せ、ド・ブラシー、」主君と殆んど同時にフィッツァーズは言つた、「貴殿は、いつも男らしさを失つた例がない。——寺侍は何處にゐますか？——フロン・ド・ブーフは何處に？」

「寺侍は逃げてしまひました、」とド・ブラシーは言つた。「フロン・ド・ブーフとはもう二度と會ふ事はございませう。彼は自分の城の燃え盛る櫓たぐきの間に眞紅しんくの墓を見出したのです、そして私一人がそれを告げに遁れて參りました。」

ワルデマールは言つた、「我等に取つては、冷たい知らせだ、貴殿は火事に就いて語つてゐられるが。」

「尙ほ悪い報告がございませう、」とド・ブラシーは答へた。そして、ジョン親王のそばへ寄つて、低い力強い調子で言つた——「リチャードがイングランドに戻りました——私は彼に會ひ、彼と語りました。」

ジョン親王は蒼白になり、よろめきながら身を支へようとして櫓の腰掛の背に捉つかまつた——まるで胸に矢を受けた人のやうに。

「貴殿は讒言うそごころを言つてゐるのだ、ド・ブラシー殿、」とフィッツァーズは言つた、「そのやうなことがある筈はない。」

「いや全く本當です、」とド・ブラシーは言つた、「私は彼に捕はれ、彼と言葉を交へたのです。」  
 「リチャード・ブランタジネットとですか？」とフィッツァーズは言葉を續けた。  
 「リチャード・ブランタジネットとです、」とド・ブラシーは答へた、「獅子心王リチャードとです——我が  
 イングランドのリチャードとです。」

「して貴殿は彼の捕虜となられたのですか？」とワルデマールは言つた。「では彼は軍勢を率ゐてゐる  
 のでせうか？」

「いや——僅か數人の追放された郷士が彼の周りに居りますが、それらの人々には彼の身分は知られ  
 てはゐません。私は彼がその人々を後に残して立ち去らうと言ふのを耳に致しました。彼はたゞト  
 キルストーン城攻撃の助力をする爲めに加はつただけです。」

「實際、」とフィッツァーズは言つた、「それがリチャードのいつもの流儀なのだ——全く漂浪騎士である  
 彼は、サー・ガイ(フリックのガイ云々)や、サー・ピース(その冒險はアーサーの物語に有名である)のやうに、王國の重大事件がな  
 く、しかも彼自身の安全が危険に瀕してゐる時には、自分の一本の腕の力を恃んで、向う見ずにさま  
 よひ歩くのが常なのです——ド・ブラシー殿、貴殿はどうなさるおつもりですか？」

「私？——私は部下の傭兵共の奉公をばリチャードに捧げました、ところが彼はそれを斥けました——  
 私は彼等をハル(ヨークシャーの海岸にある小都會)へ連れ行き、舟を裝ひ、フランダースへ向けて出帆するつもりです。  
 亂世のお蔭で、働きのある男ならば、如何なる時でも雇つて貰ふことが出来るのです。そして貴殿は、

ワルデマール殿、槍と楯とを取り、貴殿の策略を抛つて、私と同行して、神が私共に與へ給うた運命  
 を分たうとは思はれませんか？」

「私は餘りに年を取り過ぎました、モオリス殿、その上私には娘がございます、」とワルデマールは答  
 へた。

「フィッツァーズ殿、お娘御を私に下さい、さすれば、私がお娘御の御身分にふさはしいやうに、弓矢に  
 かけて保護致しますでせう、」とド・ブラシーは言つた。

「いや、」とフィッツァーズは答へた。「私は聖ピーター寺院(イングランド中最も立派な大伽藍の一。昔は寺院にのがれこむ罪人は保護を受けるのが常であつた)  
 に身を隠すつもりです——あそこの大僧正は、私の義兄弟でございますから。」

この會話の間にジョン親王は、思ひも掛けぬ報道の爲めに陥つてゐた茫然自失の状態から次第に目覺  
 めて、彼の家來達の間に取り交されてゐる會話に注意を拂つてゐた。「彼等は予から離れ去つて行く、」  
 と彼は呟いた、「彼等は丁度風が吹く時、枯葉が枝から離れ落ちるやうに、予の許を離れて行く！——  
 が、一體全體、これ等の卑怯者に見捨てられた曉には、自分の獨力では策の施しやうもないであらう  
 か？」——彼は言ひ止んだ、そして遂に彼が彼等の會話に割り込んだ時のその苦笑の中には、惡魔的  
 な熱情が現はれてゐた。「ハッ、ハッ、ハッ！ 御一同、確かに、予は御身達を賢明な人、大膽な人、機  
 敏な人だと思つてゐた。それに御身達は富も、名譽も、快樂も、又我等の氣高い計畫が御身達に約束  
 する總ての物を投げ捨てられるとな、しかもそれが大膽な一擧に依つて、手に入れることが出来るよ



とするこの際に臨んで！」

「私には殿下の仰しやる事が解りかねます。」とド・ブラシーは言つた。「リチャードの歸國が觸れ廻されば、忽ち數萬の軍が彼の麾下に駛せ參ずるでございませう、さすれば我々は萬事休する事になります。我が君様、フランスへお逃げ遊ばすか、母君陛下の保護をお求めなさるか、切にお勧め致します。どうぞいます。」

「予は自分一人の安全は求めはしない、」とジョン親王は傲然と言ひ放つた。「たとへ一言兄君に言ひさへすれば、それが得られるとしても。よし又、御身、ド・ブラシーと、御身、ワルデマール・フィッツァーズとが予を見捨てようとしてゐても、予は御身達の首が彼方のクリフォード城樓の門に曝されるのを見ては餘り嬉しくは思はぬであらう。ワルデマールよ、御身はあの狡猾な大僧正が、リチャード王と和睦をするやうなことがあれば、御身を神壇の保護から追放するやうなことはあるまいなどと思ふのか？ 又、ド・ブラシーよ、御身はロバート・エストリートギルが部下の軍勢全部を率ゐて、御身がハルに行く途を遮つてゐる事と、エッセックスの伯爵がその部下を集めつゝあることゝを忘れたのか？ 我等がリチャードの歸國よりも前にこれ等の募集兵等を恐れる理由があつたとすれば、今や彼等の首領がどちらに味方するかは最早疑ひを容れないではないか？ 實に、エストリートギルだけでも御身の率ゐる傭兵を悉くハンバーへ追ひ遣るに足るだけの軍勢を持つてゐるのだ。」——ワルデマール・フィッツァーズとド・ブラシーとは、全く狼狽して互に顔を見合はせた。——「安全を得る道は唯一つあるのみだ、」と

親王は言葉を續けた。そして彼の額は深夜のやうに暗黒になつて行つた。「我々の恐怖の的となる者は、たゞ一人旅してゐる——然しながら彼に出會はねばならぬ。」

「私は御免を蒙ります、」とあわて、ド・ブラシーは言つた。「私は彼の捕虜となり、彼の恵みを受けた身でございます——私は彼の胃の前立の毛一筋も、傷つけることを欲しません。」

「誰が彼を傷つけよなどと申したか？」と無情さうに笑ひながらジョン親王は言つた。「此奴は今度は予が彼を殺せと命じたなどと言ふかも知れぬ！——いや——牢獄の方がましだ。たとひイングランドでもオーストリアでも、牢獄はどちらでもかまはぬ——予等のこの計畫を始めた時と同じやうに、萬事はなり行くであらう——もと／＼この計畫は、リチャードが永く獨逸に捕はれてゐるだらうといふ見込に基いて起つたことである——予等の叔父上のロバートはカーディフの城に於てその生を終へられたのだ。」

「その通りでございます、然しながら、」とワルデマールは言つた。「殿下の祖父上のヘンリ陛下は、殿下よりもつと嚴然と王座にお坐り遊ばしました。最も良い牢獄は寺男の造つたものでございます。——寺院の圓天井の審ほどよい牢獄はございません！ 私はもう言ひたいだけの事を言つてしまひました。」

「牢獄にしる墓場にしろ、」とド・ブラシーは言つた。「私はこの事件からすつかり手を引きたいものです。」

「卑劣者め！」とジョン親王は言った。「其方はまさか我々の相談を他へ洩らすことはあるまいな？」  
 「私は相談を決して洩らしは致しませんでした。」傲然とド・ブラシーは言った。「又卑劣者と云ふ名前も頂戴いたす筈がございません！」

「お静かになされい、騎士殿！」と、ワルデマールは言った。——「して又、我が君様、どうぞ勇敢なド・ブラシーの取越し苦勞をお許し下さいまし。私がかがてそれを取り除きます程に。」

「それは貴殿の辯舌を以てしても及ばぬことです、フィッツァーズ殿、」と騎士は答へた。

「はて、モオリス殿、」と狡猾な政治家のフィッツァーズは答へた、「少くも、貴殿の恐怖の的を見究めもせず、驚いた馬のやうに飛び退り召さるな。——このリチャードと——もう一日前であつたら、戦に伍して彼と接戦することが貴殿の最も切なる願ひではなかつたか——私は貴殿がそれを願はれるのを百度も耳にしたものです。」

「左様、」とド・ブラシーは言った、「けれどもそれは貴方が今言はれた通り、接戦、しかも戦に伍してならばです！ 貴殿はよもや私が彼一人を、しかも森の中で攻撃したいなぞと申したのをお聞きなすつたことあるまいな？」

「若しその様なことを心配なさるなら貴殿は決して立派な騎士とは申されません、」とワルデマールは言った。「ランスロット・ド・ラックとサア・トリストラム(二人ともアーサー物語に出て来る有名な騎士)とが譽れを得たのは戦場に於てよしたか？ それは深い人知れぬ森の蔭で、巨人のやうな騎士と戦つた爲めではございませんか？」

「如何にもさうです、けれども私は誓つて申しますが、」とド・ブラシーは言った、「トリストラムもランスロットも、一騎打では到底リチャード・プランタジネットの敵ではなかつたでせう、して又たど一人に對して多勢で立ち向ふことは、彼等の習ひではなかつたと存じます。」

「ド・ブラシー殿、貴殿は氣でも狂はれたか——傭兵隊の隊長として、金で抱へられた貴殿に、私等が望むことは何でせう？ 貴殿達傭兵隊の劍はジョン親王の御用を勤める爲めに需められたものではなかつたですか？ 貴殿は我々の敵の事を知つてゐられる、さうして、貴殿の主君の運命と、貴殿の朋輩の運命と、貴殿自身の運命と、私共すべての生命と名譽とが危険に瀕してゐるにも拘らず、貴殿はよくよと心配して居られるとは！」

「實のところ、」と不機嫌さうにド・ブラシーは言った、「彼は私に命を與へたのだ。本當に、彼は私を側から遠ざけ、私の臣服の禮を退けたのだ——それだけ私は彼に恩寵も忠節の念も感じてはゐません——けれども彼に對して弓を引くつもりはございません。」

「その必要はありません——たゞルイ・ウィンクルブランドと貴殿の槍兵を二十人許り派遣なされば宜しいのだ。」

「貴殿は御自身で十分な兵士を持つて居られる筈だ、」とド・ブラシーは言った。「私の部下は一人たりともそのやうな役目に使ふことはありません。」

「ド・ブラシー、其方はそんなに迄片意地を張るのか？」とジョン親王は言った。「して、あれ程度々予

に對する忠節の誓ひを立てながら、今になつて予を見捨て、行かうとするのか？」  
 「私はそのやうなつもりはございません、」とド・ブラシーは言つた。「私は試合場にしろ、陣營にしろ、騎士にふさはしい事にはいつも殿下のお供を致します。けれどもこの追剝の振舞だけは私の立てた誓ひに含まれては居りません。」

「ワルデマールよ、此方へ来てくれ、」とジョン親王は言つた。「予は不幸な王子なのだ。父君ヘンリ王は忠實な臣下を持つて居られた——父王は、亂を好む僧侶に惱まされてゐるとお言ひになりさへすればよかつたのだ、するとトマス・ア・ベケットは、聖者ではあつたが、父王の臣下に殺されて、血潮は彼自身の祭壇の階段を染めた。——トラシイよ、モウヴィルよ、ブリトーよ、忠節にして大膽な家來達よ、お前達の名も、お前達の精神も消えてしまつた！そしてレジナル・フィッツァーズは一人の息子を遣したが、その子には、彼の父親の忠義と勇氣とが失せてしまつたわい。」

「彼はその執れをも失ひは致しません、」とワルデマール・フィッツァーズは言つた。「外に仕方もございますから、私がこの危険な企ての指圖を引き受けるつもりでございます。とは云へ、私の父も熱誠な臣下の譽れを購ふには随分高い價を拂つたものでございます。でも父がヘンリ王に對する忠義の證あかしも私がこれから力を盡さうとする事には遠く及びません。何故と申しませば、獅子心王に向つて槍を構へるよりは、寧ろ記録にある限りの聖者をみんな攻撃した方がましでございますから——ド・ブラシー殿、貴殿には危懼の念を抱く者共の士氣を引き立て、ジョン親王の御身を護ることを依頼しなくてはな

りません。若し私が貴殿に送らうとしてゐる報告をお受取り下されば、私共の企ては最早あやふやの状態ではなくなりませう——小姓、」と彼は言つた。「私の館やかたへ急いで参り、甲冑方にすぐさま用意をするようにと傳言しろ。そしてステイーヴン・エザラルと、ブロード・ソアーズビーと、それからスパイングハウの三人の槍兵とに直ぐに私の許へ参るやうに命じろ。そして又斥候長のヒュー・バードンも参るやうに致せ。我が君様、時節到來します迄さらばでございます。」かう言つて、彼はその室を立ち去つた。ジョン親王はド・ブラシーに向つて言つた、「あの男は一人のサクソンの郷士の自由でも取り扱ふかのやうに、殆んど良心の苛責もなしに予の兄上を捕へようとして出て行くわい。だが、彼はきつと予の命令を守り、リチャードの身を、適當な尊敬を以て遇することであらう。」

ド・ブラシーはたゞ微笑を以てこれに應こたへた。

「聖母マリヤの額の光にかけて、」とジョン親王は言つた、「予の彼に對する命令は非常に嚴重なものであつた、——だが我々は二人で張出し窓の處に立つてゐた故、多分御身には聞えなかつたらう——極めて明瞭に予はリチャードの身の安全をくれぐれも注意するやうに命じたのだ。若しワルデマールがそれに違背したら、彼の頭こそ實に呪のろはしいぞ！」

ド・ブラシーは言つた、「私は彼の宿に参り、殿下の御意を十分彼に傳へた方が宜しいかと存じます。何故と申しませば、そのお言葉は私の耳に全く入らなかつた位でございますから、恐らくはワルデマールの耳にも届かなかつたかも知れません。」

「いや、いや、」ジョン親王は焦々として言つた、確かに彼は聞いたのだ。そこで尙ほ予は御身に他の用事がある。モオリス、此方へ来て、御身の肩に倚り掛らせてくれ。」

二人は親しさうな姿勢で廣間を一周り歩いた、そして、ジョン親王は、極めて打ち解けた親しみの様子を見ながら、かう切り出した、「我がド・ブラシーよ、御身はあのワルデマール・フィッツァーズをどう思ふ？——彼は予の大臣にならうと當てにしてゐる。リチャード排斥の陰謀を易々と引き受けることによつても解る通り、予の血族に對して明かに尊敬の念を抱いてゐる男に、そのやうな高い位を授けることは考へものだ。御身はこの不愉快な仕事を遠慮なく斷つた爲めに、予の寵を幾分失つたと思つてゐるに違ひない——だがさうではない、モオリスよ！ 予は寧ろ御身の立派な節操を尊敬してゐるのだ。是非なさなくてはならない緊要な事が幾つもある、それを好くなし得ないやうな者は、予は愛しも敬ひもしないのだ。併し又、予の役に立つやうな拒絶があることもある、その爲めに、予の要求を拒む者を却つて予が尊敬するやうになることもある。予の不幸な兄君を何の躊躇もなく捕縛するやうな奴には大臣などと云ふ高官に就く資格を與へはしない、これに反して、御身の騎士にふさはしい勇敢な拒絶は、御身に元帥の官杖を持たせるのだ。ド・ブラシー、このことをよく考へてくれ、そして御身の任務に就くがよい。」

「氣の變り易い暴君よ！」と親王の前を立ち去るや否や、ド・ブラシーは呟いた。「殿下に信頼する者は不幸だ。成程、殿下の大臣！——殿下の良心を司つてゐるのは容易い仕事だ。だがイングランドの

元帥！ それは、」とその官杖を掴まうとするやうに腕を差し延べて、控への間を一層尊大ぶつて歩きながら彼は言つた、「それは手に入れる價值のある褒美に違ひない。」

ド・ブラシーが部屋を立ち去るや否や、ジョン親王は一人の近侍の士を呼んだ。「予の斥候長のヒュー・バードンにワルデマール・フィッツァーズと話を済ましたなら——直ぐ此處へ来るよ、うに言へ。」

斥候長は暫く經つて入つて來た、その間ジョン親王は不揃ひな亂れた歩調で部屋の中を行つたり來たりしてゐた。

「バードン、」と彼は言つた、「ワルデマールはお前に何を望んだのだ？」

「北方の荒野をよく知り、人馬の足跡を辿ることに妙を得た二人の勇氣ある男を望まれました。」

「してお前は彼の頼みを叶へてやつたか？」

「私はその望みを叶へる事が出来ないなどとお思ひ下さいますな、」と斥候長は言つた。「一人はヘクザムシャーの人間でございます。彼は獵犬が傷ついた鹿の足跡を辿るやうにタインディルとテヴィオットデルの盜賊共の跡をつけることに慣れて居ります。もう一人はヨークシャーの生れで、屢々楽しいシャーウッドの森で、その弓弦の響を立て、居りました。彼は此處とリッチモンドとの間にあるあらゆる林間の空地も、深い谷も、雜木の林も、喬木の森も知つて居ります。」

「宜しい、」と親王は言つた、「ワルデマールも彼等と一緒に出發するのるか？」



「直ぐさまでございます」とバードンは答へた。

「どんな供を連れて行くか？」と、ジョン親王は無造作に訊いた。

「ブロード・ソアーズビーと一緒に参ります、それから冷酷なので、世間に鐵心スティーヴンと呼ばれてゐますエザラルも、それからラルフ・ミッドルトンの部下に屬する三人の北國武士も一緒に参ります——彼等はスパイングハウの槍兵と呼ばれて居ります。」

「宜しい」とジョン親王は言つた。それから一寸躊躇つた後附け加へた、「バードン、お前はモオリス・ド・ブラシーを嚴重に見張りすることが何よりの大切だ——然しながら、彼に氣取られぬようになくちやならない——そして時々彼の舉動を知らしてくれ——彼が誰と會談するか、彼が何を目論むかと云ふやうな事をな。抜からぬやうに致せ、それはお前の責任だからな。」

ヒュー・バードンは一禮して退いた。

「若しモオリスが予を裏切つたなら」とジョン親王は言つた——「彼の態度からの疑ひなのだが、若し彼が予を裏切つたなら、たとへりチャードがヨークの關門に押し寄せて來てゐても、先づ彼の頭を刎ねずには措かぬぞ！」

(三十五)

\*ヒルカニアの荒野の虎を立たしめ、

飢ゑたる獅子と餌食を争はしめよ、

而も假睡める狂信の火を掻き起さんより、

その危険や妙し。

(\*ヒルカニアは歐洲と亞細亞との間のカスピアン海とオクサス河との間の地)

(作者不明)

さて物語はヨークのアイザックの身の上に戻る。浪士に與へられた驟馬に跨り、警護と道案内の役を務める背の高い郷士兩名に伴はれて、かの猶太人アイザックは娘の身請けの談判にテンブルストウの教堂をさして出發した。この教堂は落城したトールキルストーンの城から約一日の行程であつた。で、アイザックは、日暮前にはそこへ到着すべき豫定であつた。そこで森の端れ迄來ると、道案内の郷士に銀貨一枚與へて別れ、それから、疲れた體の許す限り、馬を速めて歩き出した。併し教堂の境内にも、う四哩と云ふ處迄にも達しないうちに力は盡き果て、絞るやうな疼痛は脊筋を流れ、四肢を傳はり、言ひやうもない胸の悶えは、體の苦しみにつれて増し、今はとある小さな市の立つ町から一步も先に進むことが出来なくなつて了つた。その町にはかねて呢懇にしてゐる、醫術に長けた、同族の醫者が住んでゐた。そのネーザン・ベン・イスラエル先生はその惱める同胞を迎へて、掟の定める、そして猶太人が互に實行してゐるあの親切を盡してやつた。彼は進むのを止めて、休むようにとアイザックに無理

やりに勧め、そして當時非常に評判の妙薬を服ませて、恐怖、疲勞、虐待、悲嘆などが原因で、この哀れな老猶太人に發した熱の高まるのを止めようとした。

翌朝、アイザックが起きて道中を續けたいと言つた時、ネーザンは亭主役として又醫者として、その所存に反對を唱へた。そんなことをすると命を失くすかも知れない、と彼は言つた。が併しアイザックは、生死以上の事が今朝自分がテンプルストウに行く行かぬ一つにかゝつてゐるのだと答へた。

「テンプルストウへ！」と主は驚いて、再びアイザックの脈をとつて見たが、やがて我と呟いた。「熱は下つてゐる、が氣分はまだぼんやり亂れてゐるやうだ。」

「何故テンプルストウへ行つてはならないのです？」と病人は問うた。「ネーザンさん、成程其處は蔑すまれた神約の子(猶太人)を罪の種、憎むべきものとして却ける者共の栖處に違ひない。併し急な商賣上の用事があれば、我々も随分あの血に混かいたナザレ兵共の中へ行くし、又あの寺侍の教堂長の處へも、それから救護會兵の上役の處へも出向いて行くといふ事は、あんたも御存知の筈だ。」

「いやそれはよつく知つてゐる。が、あんたはあの寺侍團の頭で彼等が大長老と呼んでゐる、あのリョーカス・ド・ポーマノワールも今テンプルストウにゐる事を御存知かな？」

「いやそれは知らない。此間巴里の仲間から來た手紙では、彼はあの市まちにゐて、フィリップ王にトルコ王サラヂンを征伐する援軍を乞うてゐるといふ事だつたが。」

「彼はそれから寺侍團の者にも知らせず、不意にこのイングランドに渡つて來たのだ。驚おどろらしたり、罰したりする爲めに延ばした強い手をもつて寺侍團の中へ來たのだ。彼の顔は誓ひを破つた者共に對する怒りで燃えてゐる。で、その惡魔の子等の怖れといふものは、一通りではないのだ、御手前も彼の名は聞かれたことがあるに相違なからうがな？」

「わしの耳にも随分入つてゐる。異邦人はこのリョーカス・ポーマノワールはナザレの掟を守らすのに大層熱心で、どの條目でも犯すものはどしどし殺す人間だといひ傳へてゐる。そして我が同胞は彼をサラセン人の擄猛な撲滅者、約束の子等に對する殘忍酷薄の暴君と呼んでゐる。」

「本當にそれや甘く言つたものだな、」と、醫者のネーザンは言つた。「その寺侍共なら快樂で心目の變へさせることも出来る、金銀の餌えさで買収することも出来る。が、あのポーマノワールだけは別の代物だ——肉慾を憎み、財寶を賤しみ、そして彼等が殉教の冠と呼ぶ所のものへ慕ま地に進む——ヤコブの神様、その冠を一刻も早くポーマノワールに、それから寺侍全部にお授け下さい！ わけてもこの高慢な男は聖ダヴィデがエドムにしたやうにユダの子等に籠手こごてで固めた手を延ばして、猶太人を殺す事をサラセン人の死に劣らぬ香かのよい犠牲いけにへ（舊約聖書、出埃及記二十九章十八節に「汝その牡羊を壇の上に悉く焼くべし、是エホバにたてまつる燔祭なり、是は馨しき香にしてエホバにたてまつる火祭なり」）だと思つてゐる。我々の藥の效能の事でもまるで惡魔の製こへた藥でもあるかのやうに、随分勿體ない外れの事を言つてゐた——畜生奴！」

「けれども、わしはテンプルストウへ行かなくちやならない、假令リョーカス・ポーマノワールが七倍も熱く熱した爐のやうな眞赤な顔をしてゐたとて。」



アイザックは門前に立ち止つて、どうすれば最も好意を得られさうな案内を乞はれようかと考へた、と言ふのも、自分の不幸な種族にとつて、今この宗團に復活してゐる狂信が、その危険さに於て元の不規律な放縱に劣らないといふ事や、又彼の富が或る場合には無情な暴虐極まる強奪に彼を會はしめる因となり、他の場合には彼の宗教が憎悪と迫害の對象となるといふ事によく氣附いてゐたからである。

話變つてリユーカーカス・ポー・マノワールはこの時、パレスタインから同道した一人の同宗徒と悲しい打明け話を交しながら、外堡の内にある、この教堂に附屬する小庭を、そゞろ歩きしてゐる所であつた。

大長老は可なりの年寄りで、それは長く垂れた白い鬚や、眼の上に差しかゝるむしゃくしゃした白い眉を見てもそれと領られるが、併しその眼の光は、この年齢とも思へぬ程爛々してゐた。彼が不敵の戦士である事は、瘦せた厳格な顔に、兵の猛々しい表情を留めてゐるのでも分る。彼が禁慾的な狂信家であることは矢張りその顔に禁慾からの枯瘦や自足の行者の精神的な誇りの痕が著しいのでも分る。しかもかういふ一際嚴めしい人相の中に、何處か目立つて氣高い所があつた。それは確かに、その高い職掌柄王侯の間で大役を勤める所から、又この宗團の掟で統一されてゐる剛勇な名門の騎士達に何時も最高の權力を揮ふ所から生じて來たものに相違ない。背は高く、歩態は、齡にも勞苦にもめげず、眞直ぐで堂々としてゐた。白い外套はベルナル上入(有名なフランスの僧侶寺侍團の統治の爲めに法典を作つた)自身の規定に従ひ一分一厘も違はず正確に作られ、先づ布地は當時バーレル織(粗悪な布の名)と呼ばれてゐたもので、着る人の體の大きさにびつたり合ひ、左の肩に赤い布で作つた、この宗團に特有の八角形の十字架が着けて

あつた。この衣には栗鼠の皮も、狐の皮も飾つてない、が年齢の點から、大長老は、掟の許すところから従つて、最も柔かい小羊の皮で裏をつけ、縁を取り、外側を羊の毛で飾つた胴着を着てゐた。これは寺法の許す限り當時の衣裳としては最も贅澤で、毛皮の使用に最も近いものであつた。手には、職標である妙な形のアバカスを持つてゐた、それは通常寺侍の徴であつて、上端に圓板があり、それへ紋章の言ふオール即ち丸に八角形の十字架の紋を彫り附けてある。この高僧に付き添つてゐた連れの者は、凡ゆる點でよく似た衣裳を身に着けてゐたが、その長上に對して拂ふ極度の尊敬は、兩人の間に衣裳以外に上下の差別があると云ふ事を示してゐた。この教堂長(と云ふのが彼の位だつたので)は、大長老と肩を列べず、と云つて、ポー・マノワールが、首を廻さなくては話せないほど、後でもない位の位置を保つて歩いてゐた。

「コンラードよ、」と大長老は言つた、「わしの數度の戦、わしの數々の勞苦の親しい友よ、獨り御身の忠實な胸にだけ、わしの悲しみを打ち明けることが出来るのだ。獨り御身にだけ、この王國に來て以來幾度わしがこの世を去つて正しい者と一緒になるのを望んだかを語ることが出来るのだ。イングランドではわしの目の止るもので、愉快な物は一つもない、但し、彼方の立派な首府(ロンドンを指す)にあるテムブル教會(ロンドンに於ける寺侍の昔の宿泊所インナ・ア・テムブルの境界内にある。この寺院内の古い部分で「ラウラント・チャーチ」を稱せられる所に有名な寺侍の像がある。その中には、ベンブロック伯たるキリアム・ド・マレッシュヤルやロベール・ド・ローなどがある)のどつしりした屋根の下にある我々の兄弟の墓だけは別だ。『おゝ、勇ましいロベール・ド・ロー！』と、わしはこの立派な十字軍士達の名が墓碑に彫刻されてゐるのを見詰める度に、かう心の中